

異世界で魔神になった自称ぼっち

GUNGUN (ペスト)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

普通の高校生だった黒神優真は不思議な夢を見た。

その夢に違和感を感じながらも学校に向かう。

放課後にクラスメイトを含め数十人が呼び出され謎の光に包まれてしまう。

光が収まった頃に目を開けるとそこには姫様の格好をした女の子がいた。

そして、その女の子が『貴方達は選ばれた者達です。』と言い出し、皆が呆然としている中、優真は冷静に考える。

そして優真は1つの結論に辿り着き呟く。

『出来るだけ信じたくはないが、ここは異世界か。』

目次

番外編

～思い出の聖夜です～ | 1

～年明けです～ | 14

登場人物紹介と説明

～登場人物設定です～ | 19

～Aチームの簡単な紹介と雑談です～ | 29

第一章～異世界生活開始～

～プロローグです～ | 39

～異世界転移です～ | 46

～やるべき事です～ | 53

～職業です～ | 65

～チーム名とメンバー(仮)です～ | 75

～話し合いです～ | 82

～訓練です～ | 92

～模擬戦です～ | 104

～1週間です～ | 112

～魔族の襲撃です～ | 119

～魔神達の手力です～ | 127

～隠れた努力です～ | 138

～白井真央です～ | 148

第二章～魔神の旅路～

～新たなスタートです～ | 163

～出発前の出来事です～ | 173

～アースナル王国です～ | 184

〜キレリア街です〜	192
〜休息の一時です〜	203
〜作戦会議？です〜	212
〜VSバルムです〜	216
〜一難去つてまた一難です〜	228
〜怠惰と魔神ともう一人です〜	235

番外編

～思い出の聖夜です～

「……寒い。」

寒い季節。賑わう街並み。そんな中でボソツと呟くコートを着た少年。少年は駅前の待ち合わせ場所に適する銅像の前に一人でいた。その少年に向かって一人の少女が走って近寄り、少年の前に着くと少女は息を整えながら言った。

「はあ……。はあ……。ごめん！待った？」

「ああ、凄い待った。」

「そこは『今来たところだから気にするな。』って言うところですよ？」

「そもそも集合時間には間に合ってるんだから気にする必要ないだろう？」

少年は少女と待ち合わせをしていた。

そう、今日はクリスマスだ。少年からしたら『クリスマスなんて寒いから家から出たくない。』という事らしいが、少女に誘われて仕方なく来たそうだ。

「じゃあ、楽しみにしてくれてたのかな？」

「……まあ、それなりにはな。」

「えへへ、何か嬉しいな……。」

「……………」

少年の性格は少し捻くれているのか、遠回しに表現したのだが、あっさり見抜かれて少し恥ずかしくなってしまった。少女も少女でその事に照れてしまい、二人とも黙ってしまおう。

「……とりあえず行くか。」

「う、うん。」

そしてポケットに手をつ突っ込んで歩き出す少年の後に付いて来る様に少女が歩く。その際、少女の視線が少年の手に向けられたことを少年は見逃さなかった。

「……ほら。」

「……!？」

「いや、何驚いてんだよ。別に嫌ならいいんだが……。」

「嫌なんかじゃない!その……ちよつと珍しいと思っただけだから……。」

「自分でもそう思う。」

少年はポケットから手を出して少女に手を差し伸べる。その行動に少女は驚くが、素直に嬉しかったので、その手を握り隣を歩く。

「さて、とりあえず行くかなんて言ったが、ノープランなんだけど、何処かリクエストはあるか？」

「だと思った……。まあ、行きたい所は決めてあるからそこでもいい?」
「仰せのままに。」

少年の言った事に少し呆れながらも、とても優しい笑顔で少女が少年の手を引いていて、その手に引かれている少年は面倒くさそうな表情をしながらも満更でも無い様子。その二人の光景は周りの人から見ても凄く微笑ましいものだった。

「……で、どこに行くんだ?」

「まずは映画館だよ。」

「え?…マジ?」

「そうだけど……嫌だった?」

少年の反応に少し悲しそうにする少女。その少女の悲しそうな顔に少年はたじろいで、慌てて弁解する。

「いや、そういう訳じゃないけど……何か一緒に騒いだりするもんだと思ってたから。2時間くらい黙ってるのとか退屈だと思っし、何より寝ちやうかもしれないんだよ。」

「あはは……君らしいね。」

「だろ?」

「でも、今日は映画を見てもらいます!」

「まあいいけど、どんなジャンル?」

「ん？それは着いてからの楽しみだよ!!」

「おっと……。おい、いきなり走り出すなよ。」

少女が走ったことによつて手を繋いでいた少年も引つ張られて付いて行く。

しばらくして映画館に着いた二人。少年は気になってた事をまた聞いた。

「で、何を見るんだ？」

「これだよ。」

そう言つて少女は看板を指した。その指した方向を少年はゆつくりと目を向けるとそこにあつたのは今人気の恋愛モノの映画だった。

「まあ定番なのか？恋愛モノつて。」

「私も初めてだし、よく分からないけど……。君と一緒に見たいなつて思つて……。」

「……。そうか。」

少年の質問に手をモジモジさせて少し恥ずかしがりながら答える少女。その仕草にドキツとして、少し顔を赤らめる少年。

「んじゃ、行くか。」

「うん！」

次は少年から少女の手を引いて映画館の中へ入っていく。

〜2時間後〜

「……………。」

(そんなに泣けるか？いや、俺が泣いてないのがおかしいのか？)

少女は映画で感動して泣いているが、少年はそんな少女を見ながら空気を壊さないように心の中で自問自答を行っていた。周りには泣いてる人もいれば感想を言い合ってる人もいる。それを参考に少年は少女に話しかけた。

「どうだった？」

「ぐすつ……………いい話だよお……………」

「そうか。まあ悪くなかったよな。」

「うん！」

この時ばかりは少年は空気を読めた。少女も少年の言葉に満足し、涙を見せながらも笑って返した。

「んで、この後はどうする？」

「えっとね、少しお腹空いてない？」

「まあ確かに昼過ぎてから何も食ってないしな。おやつ程度に何か食うのはありだと思うぞ。」

「じゃあそのレストランで軽く食べよう。」

そう言つて少年と少女は映画館の隣にあつたレストランに向かつて行く。

「いらつしやいませ！お客様2名様でよろしいでしょうか？」

「はい。」

「それではご案内致します。」

店員に席を案内されて二人は席に着く。そして、注文が決まつていたのか少女は直ぐに注文する。しかし、その注文した物が名前からして少年は嫌な予感がした。だから少年は少女に聞いた。

「今なんて言つた？」

「え？カップル限定パフェだけど。」

「何故そんなものを？」

「寧ろ、それが理由だから来たんだよ？」

「既に策にはまつてたのか……。」

少女が当たり前のように言つてきた事に少年は諦めたように呟いて返す。それが本気で嫌がつてるのではなく、恥ずかしがつてるだけだという事に少女は気付いていた。

しばらくして注文通りのパフェが来た。それなりのサイズであり、スプーンが一つしかない。つまりはそういう事をしろというお店と少女の策に対して完全に諦めた少年は吹っ切れた。

「ほら、口開けろ。」

「……………ふえ？」

「ん？いらねえのか？」

吹っ切れた少年が起こした行動はスプーンを手に取り、パフェのクリームを掬って少女に差し出している。そのいきなりの行為に少女も戸惑いが隠せず、変な声でありながら可愛い声を出してしまう。

「え、えと……………あ、ありがとう。」

「美味しい？」

「うん、美味しいよ！じゃあ次は私がやるね！はい、あーん。」

「ん……………ああ、美味しいな。」

「うん！」

この二人の光景を見てた他の客は皆ブラックコーヒーを頼み、その日はレストランのコーヒーが無くなったという。

割とスムーズに食べ終えた二人がレストランの外に出ると外は既に暗く、イルミネーションが色々なところで輝いていた。

「綺麗だね。」

「そうだな。……なあ、ちよつと付いてきてくれるか？」

「え？別にいいけど。」

「んじや、失礼して。」

「えっ!?!ちよ……!」

そう言うと、少年は少女をお姫様抱つこの形で抱えて細い路地裏に入ってから建物を足場に聖夜の街の空を跳んでいく。

「やっぱり普通じゃないんだね、君は。」

「そんな反応してるお前も普通じゃないけどな。」

二人は周りからしたら何を言っているんだという様な話をしていくが、この場にいるのは二人だけであり、この二人だから分かり合っている事なので他の人なんて気にしていない様子。

建物と建物を跳んで渡っていると、見えてきたのはこの辺では有名な塔だった。その頂上は危ないから立ち入り禁止なのだが、上から入ってしまえば問題無い。

「ほら、着いたぞ。」

「わあ〜……。」

少年はゆっくり少女を下ろし、少女はそこから見えた景色に感動して声を漏らす。そこから見える景色はこの日だからこそ見えるもので、少年にとつてのとおきだった。

「中々良い所だろ？」

「うん、凄く綺麗で、凄く良い。でも、何も考えてないなんてやっぱり嘘だったんだね。」

「偶々思い出しただけだ。」

「ふふ、ありがとう。」

二人は寄り添いながらそんな話をしている。しばらくボーツと景色を眺めていたが、少年が少女に話しかける。

「今日は来れてよかった。」

「うん。」

「こんな事、初めてだったからどうなるかと思ったけど、楽しかった。」

「私も楽しかった。」

「こんな気持ちになったのも初めてだし、でもその初めてがお前で良かった。」

「……うん。私も同じ気持ちだよ。」

二人の間に少し沈黙が訪れる。そして話し出したのは二人同時だった。

「だから……。」

「これからも俺と——」

そこで少年と少女は謎の光に包まれてしまった。

「……ん。……ま……くん！」

「……？」

「……てー……まくん！」

「起きてっつてば！優真くん！」

少年——黒神優真は誰かに起こされて起床する。

「もうお昼だよ……って優真くん？」

「ん？白井さん、どうしたの？」

優真を起こしたのは白井真央。異世界に来てからずっと優真を支えている女の子だ。どうやら長い睡眠をしていたらしい。そして真央の疑問に優真自身も疑問を感じて質問に質問で返した。

「優真くん……泣いてるの？」

「……………え？」

優真はその言葉を聞いて自分の頬に涙が零れるのを感じた。拭ってもすぐに溢れ出てくる涙。自分でも分からない。いや、分かっているがそれは誰かに言うには恥ずかしかつたのだ。すると、真央が優真を抱きしめて、優しく呟く。

「何も言わなくていいよ。我慢もしなくていい。今は私しか聞いてないから……いいよ。」

「ごめん……白井さん。」

「ううん、気にしないで。」

優真は真央に抱きしめられたまま静かに泣いた。

「もう大丈夫？」

「うん。ありがとう、白井さん。」

「ふふ、どういたしまして。それじゃ外で皆も待ってるから先に行ってるね！」

「ああ、すぐ行く。」

それを聞いた真央は優真の部屋を出て扉を閉める。その際に口が動いていて優真は自然にその口元を読んだ。

「妬けちゃうなく……か……。本当に白井さんって俺のこと分かり過ぎだろ。いや、俺が分かりやすいだけか？」

優真は一人になってから自問自答を繰り返していた。そして、思い出夢のことを思い出していた。

「本当に……。約束破りやがって。」

言ってる事は少し怒りを感じられる様なものだが、優真の表情から呆れたような感情読み取れる。

「もう一度会って一言くらい文句言わないと気が済まないな。覚悟しとけよ」

那月」

そう言っただけで軽く服装を整えて優真は部屋を出る。そして外に出ると真央の他に健とミーニャが待っていた。

「それじゃ、次の目的地に向かうぞ。」

「うん！」

「了解です。」

「はい！」

優真少年と那月少女は再び会えるのか、それは、まだ誰にも分からない。

く年明けですく

「「明けまして、おめでとうございますー!」」

はい!今日は年明けという事でラジオ的にお送りしたいと思いま
す!

進行役は私、ペストが務めさせて頂きます。そして、ゲストに来て
くれたのはく!?

「黒神優真です。まず、作者の都合により本編が未だに進まず申し訳
ない。後でフルボッコしときます。」

「月宮奏よ。黒神くんが敬語なんて珍しいわね。それと、最後のに関
しては私も協力させてもらおうわよ?」

「みんな久し振りだな。松下当麻だ。忘れられても読者のみんなには
文句は言わない。作者をぶっ飛ばすだけだからな。」

「はい。私は遠山文香です。皆さんご無沙汰しております。クソ作者
のせいで出番が全く無いので割と激おこでございます。」

「「誰だお前?!」」

「ひい〜!!ご、ごめんなさい!ちよつとふざけ過ぎました……。」

はい!ゲストは懐かしの《ALL JOKER》の皆さんです!

……ていうか皆さん私に対して当たりが強過ぎませんか?

「お前が悪いんだから当たり前だろうが。」

「まあ作者を倒すのは決まりとして何をするんだ?」

優真くんも当麻くんはもう少し作者に優しくしてくれない？優真くんなんか名前に『優』が入ってるんだから尚更だよ！

「……ハッ。」

鼻で笑われた!?

「俺が優しいわけないだろ？あつたとしても敵に対して優しくするヤツなんていないだろ。」

「あはは……。作者は敵扱いなんですネ。」

「あら、さつき遠山さんも作者を罵倒してたじゃない。」

「あれは違います！ちよつと《狂戦士化》^{バーサーカー}が入っちゃって……。」

「……やっちゃえ、バー「優真！それ以上はストップだ！」……チッ。」

「というより、声がほぼ同じって何よ。その見た目であの声ってギャップにも程があるわよ。」

ねえねえ……。これ一応投稿するものなんだけど……もう少しまともに話さない？当麻くんも質問無視されてたよ？皆気付いてあげようよ。

「お前の匙加減でどうにでもなることじゃねえか。」

ぐっ……。正論すぎて何も言えない。でも、無視した皆も悪いのは事実だ！

「それでも貴方が殺られる運命は変わらないと思うわよ?」

……お前ら、作者いなくなったら動けなくなるし、喋れなくなるんだぞ!

「背に腹は変えられないからな。致し方ない。」

そんなに!?!作者ってそんなに嫌われてるの!?!ねえ! 優真くん!!

「はいはい、黙って。つーか黙れ。《ディザスター天災》ぶち込むぞ。」

……ごめんなさい。

「それで、結局何をやるんですか?」

まあ、ただの談笑っていうか会話形式でグダグダするだけなんだけども。

「私から一ついいかしら?」

どうぞ、奏ちゃん。

「今までの話でそれなりに反省点があったと思うのよ。誤字脱字や意味分からない文章。そういうのを反省して新しい年にその反省を含めた抱負を決めるとかあったでしょ?」

……奏さんパネエです。有難うございます。

そうですね。という事で作者の今年の抱負は……。

『やるべき事はしっかりやる!』

この小説においても中途半端に終わらせるつもりは無いですが、とても長くなる予感しかしてません。

「まあ、このまま行けば長くなるだろうな。リアルも忙しくなるだろうし。」

「それに、何よりこの小説がかなり読まれていることに驚きよね。」

「ああ、確かにな。最初は登録すらしないで読んでただけだったのに、何気なく投稿したのがきっかけだったもんな。」

「でも、とても新しい挑戦でしたよね。その結果が今に至るんですから、読者の皆さんには本当に感謝ですよね。」

皆さんの言う通りです。本当にこの小説がここまで読まれるとは思ってませんでした。

それこそお気に入りも今では234件も来ていて、作者にとっては宝物の一つになっています。本当にありがとうございます！m(´`)

「んじゃそろそろ締めと行くか。ではゲスト1の黒神優真と。」

「ゲスト2の月宮奏と。」

「ゲスト3の松下当麻と。」

「ゲスト4の遠山文香。そして……。」

はい、進行役の作者ペストでした！ありがとうございます！！

「『これからも『異世界で魔神になった自称ぼっち』をよろしくお願

いします!!」「」

おまけ

「ディザスター
《天災》」

「せつげつか
《雪月花》」

「ドラゴンブレス
《龍の息吹》」

「ロンギヌス
《聖槍》」

ぎやああああああああああああああああ!!

作者は白井真央歩く病院で一命を取り留めた。

登場人物紹介と説明

〈登場人物設定です〉

くろがみゆうま
黒神優真

本作の主人公。

桜雲高校さくもこうこうの2年D組で、性格は面倒くさがり屋で鈍感。

容姿は、悪くは無いが暗い雰囲気を纏っている。

両親は既に他界してしまい、妹と二人暮らしをしている。

運動が出来て、頭もそれなりに良いが、学校では所謂ぼっちである。

その事に対して本人は何とも思っていないらしい。それ以前に全然ぼっちではない為、自称ぼっちと思われる（確定）。

実は、色々な人と何かしら関係を持つてる方が多いと思われる部分がある。

転移後、ほとんどの人がパニックになってる中、冷静に状況を確認し、考え、判断をする。この時は話が進まないと思い、自ら目立つような行為をするが、後悔する事になる。

ステータス確認の時、いち早く見た優真はとんでもないものを見てしまい、誤魔化すことにしたが、3人の人物に気付かれる。

《ステータス》

名前？ユウマ クロガミ

種族？人間

職業？魔神

属性？全属性

スキル？ 《全属性魔法》ユニゾンマジック 《合体魔法》 《魔眼》 《千里眼》 《魔法無効》マジックキャンセル

《魔法創造》マジッククリエイト 《無詠唱》 《隷属魔法》 《空間魔法》 《並列思考》 《瞬間加速》マルチタスク イグニッションブースト

《身体強化》 《精神強化》 《属性強化》 《魔力自動回復》 《体力自動回復》オートガード

《自動防壁》 《威圧》 《覇気》 《気配遮断》 《気配察知》 《超隠蔽》 《超鑑定》

《剣術》 《槍術》 《格闘術》 《銃術》 《投剣術》 《能力略奪》スキルステール 《言語理解》

白井真央しらいまお

本作のヒロインの1人。

桜雲高校の2年D組で、クラス委員長。性格は穏やか。

容姿は出る所は出ていて、腰まで伸びた艶やかな黒髪ロングが印象的。

学校では1、2位を争う人気者の美少女で、よく優真に話しかけている。勇輝、彩華、康太の3人の幼馴染みと一緒にいることが多い。

実は、優真とは勇輝と一緒に中学生の頃に出会った事がある。その時、ある出来事を境に優真の事を意識し始めるが、優真は覚えてない様子。優真と同じクラスになった時は小さくガッツポーズをしたくらいである。

転移後、いきなり異世界転移させられた事に不安になり、優真に対して積極的に接する一面が見られる。

優真のステータスを知らされた真央は、次は自分が優真を守ろうと強く決意する。

主人公に対する呼び方『優真くん』

《ステータス》

名前？マオ シライ

種族？人間

職業？治癒師

属性？聖

スキル？《回復魔法》《聖魔法》《魔力自動回復》《言語理解》

皇彩華すめらぎあやか

本作のヒロインの1人

桜雲高校の2年D組で、性格は真面目で周りの事を考えて行動する。そのせいで優真にはお節介焼きと思われる“THE 苦勞人”という不名誉なあだ名を付けられてしまう。

容姿はヘアゴムで纏めた茶髪のポニーテールが印象的でスタイルも悪くなく、真央と同様に人気者である。

皇家は剣道で有名な家で、彩華自身も幼い頃から剣道を習っていて、そこらの男子よりは強く育つ。その反面、小さい頃の夢は「かっこいい王子様のお嫁さん」という可愛らしい夢を持っていた。今でも密かに思っているらしい。小学生の頃には、勇輝も習い始め、一緒に稽古をしていた。

実は、中学生の頃、優真にある事から助けてもらっているが、優真は覚えてない様子。優真と同じクラスになってから、その時の話をしていたら、よく話すようになった。

転移後、最初は驚いてたものの、やるべき事が決まった時の意思の強さは幼い頃からの稽古の賜物である。

主人公に対する呼び方『黒神君』

《ステータス》

名前？アヤカ スメラギ

種族？人間

職業？姫騎士

属性？光

スキル？《呪い無効》《剣術》《光魔法》《言語理解》

柏崎勇輝かしわざきゆうき

桜雲高校の2年D組で、性格は優しくて爽やか。

容姿はモデル雑誌にでも載りそうな位の金髪イケメン。

男女両方から親しまれる人気者で、勇輝を嫌う者は少ない。正義感が強く、常に自分の行動が正しいと信じて動くタイプ。幼馴染みの真央と彩華の事を気になっている。優真は気付いていないが、優真の事をライバル視している。

実は、優真とは真央と一緒に中学生の頃に出会った事があるが、優真は覚えてない様子。その後、優真をライバル視することになる。

転移後、異世界転移をした事に驚いてしまうが、自分が勇者である事に気付くと皆を鼓舞するようにやる気を見せる。

主人公に対する呼び方『黒神』

《ステータス》

名前？ユウキ カシワザキ

種族？人間

職業？勇者

属性？聖

スキル？《天賦の才》《剣術》《聖魔法》《言語理解》

石川康太いしかわこうた

桜雲高校の2年D組で、性格は寂しがり屋。影が薄く気付かれないことが多いため落ち込みやすい。

容姿はメガネが似合っている。人差し指でメガネの真ん中をクイツと上げる仕草は凄く絵になるらしいが、本人はする必要が無いと言いつ張る。

頭が良く、物事の飲み込みが早い。学校のテストでは常に上位に入っているが、『え？誰？』と言われる始末である。

実は、優真と同じクラスになった時、一番最初に優真に話し掛けたのは康太である。影の薄い康太は人脈を少しでも多くしたいのが本音らしいが、優真にそれが気に入られてよく話す仲になった。

転移後、なかなか会話に入れずにいるが、すごい活躍を見せる時が来るのを信じて待つ。

主人公に対する呼び方『優真』

《ステータス》

名前？コウタ イシカワ

種族？人間

職業？魔導士

属性？闇

スキル？ 《隠密》 《気配察知》 《闇魔法》 《言語理解》

つきみやかなで
月宮奏

本作のヒロインの1人

桜雲高校2年C組で、性格は内気だと思われがちだが、他より冷静なだけである。

容姿は凛としたような顔つきで、セミロングの黒髪が綺麗な雰囲気
を漂わせる。成長途中のある部分がコンプレックスらしい。

学校では近寄り難いと思われていて、優真を除いて、話し掛けられることが滅多にないことから、本物のぼっちと言えるだろう。

実は、去年、優真と同じクラスで行動がそっくりなせいで段々とよく話すようになり、一緒に行動することも多くなる。色々巻き込まれる事も多くなる。

転移後、優真と同様に落ち着いて状況判断をし、優真の行動に合わせて動く。

ステータス確認の時、自分達は異常だと知り誤魔化す。
優真がステータスを誤魔化している事に気付いた1人。

主人公に対する呼び方『黒神くん』

《ステータス》

名前？ カナデ ツキミヤ

種族？ 人間

職業？ 魔物使い

属性？ 呪

スキル？ 《強制契約》 《強制解除》 《融合》 《分離》 《召喚》 《威圧》 《呪
魔法》 《言語理解》

もりしたけん
森下建

桜雲高校2年D組で、性格は謙虚。

容姿は何処にでもいるような普通の学生。

学校では普通に友達と話したり、一緒に昼食を取ったりと普通の学生生活を送っているが、どこか遠慮がちな部分がある。

実は、優真（と巻き込まれた奏）のある行動に惹かれて2人と仲良くなりたいと思い、本当の自分を晒せる居場所となる。

転移後、まさか自分が異世界転移するなんてと内心興奮するが、優真の行動によって落ち着きを取り戻し、エミリアの話を聞く。

自分の職業を見た時、大丈夫かと思っただが何も問題なかった事にすごく安心したらしい。

主人公に対する呼び方『黒神さん』

《ステータス》

名前？ケン モリシタ

種族？人間

職業？暗殺者

属性？闇

スキル？《暗殺術》《気配遮断》《闇魔法》《言語理解》

えのもとしやうこ
榎本祥子

桜雲高校2年D組で、性格は明るい。

容姿は中学生に間違われるくらい小さく、その体格に似合うツインテールをしている。

色んな人とすぐに仲良くなれるコミュニケーション能力を持っている。何よりも楽しむことを大事にしているらしい。優真とは同じクラスになってから少し話したことある程度。

転移後、色々と起こりすぎて頭が追い付かず、呆然とするが、落ち着きを取り戻し、エミリアの話を聞く。

主人公に対する呼び方『黒神君』

《ステータス》

名前？ ショウコ エノモト

種族？ 人間

職業？ 精霊使い

属性？ 水

スキル？ 《精霊契約》《水魔法》《自動防壁》オートガード《言語理解》

行方なめかたせいしろう征志郎

桜雲高校2年D組で、性格はやんちゃ。

容姿はガタイがよく赤茶の髪でツンツンヘア。

見た目は不良っぽいが、そこまで素行が悪い訳では無い。少し悪目立ちしてしまうことがあるくらいである。

松下当麻を髪型が似ている事に腹立つが、何か言っても何度も返り討ちに合わされた経験あり。

転移後、いきなりの異世界に呆然とするが、落ち着きを取り戻し、エミリアの話聞く。

主人公に対する呼び方『黒』

《ステータス》

名前？ セイシロウ ナメカタ

種族？ 人間

職業？ 鍛冶屋

属性？ 土

スキル？ 《武器創造》ウエポンクリエイト《土魔法》《超修復》《言語理解》

桜田さくらだ遥香はるか

本作のヒロインの1人。

桜雲高校2年D組の担任で、性格は楽観的だが、生徒の事を第一に考えるという熱血な部分もある。

容姿は大人の女の理想的な感じで、結婚してないのが不思議なくら

い。

普段は気だるそうにしている、自由にしている。いざという時はとても頼りになるので、皆からすごい尊敬されている。

実は、ある日の夜に変な輩に絡まれるが、偶然通りかかった優真に思わぬ形で助けられる。

転移後、エミリアの話にカツとなってしまうが、優真の行動によって落ち着きを取り戻してやるべき事に決意を改める。生徒達が無事に帰れる事を1番に思っている。

主人公に対する呼び方『黒神』

《ステータス》

名前？ハルカ サクラダ

種族？人間

職業？鑑定士

属性？無

スキル？《千里眼》《鑑定》《無魔法》《言語理解》

まつしたとうま
松下当麻

桜雲高校2年B組で、性格は真っ直ぐ。

容姿は程よい筋肉がついた体に、黒髪のツンツンヘア。

基本は平和主義だが、どうしようもない時は、力づくで振じ伏せる事もある。

転移後、呆然とし、気絶までしてしまう。

皆のステータスを聞き、自分のステータスが異常だと知り、上手く誤魔化す。

優真がステータスを誤魔化している事に気付いた1人。

主人公に対する呼び方『優真』

《ステータス》

名前？トウマ マツシタ

種族？人間

職業？格闘王

属性？虚

スキル？《身体強化》《精神強化》《肉体変化》《格闘術》《衝撃波》《覇気》《虚魔法》《言語理解》

とおやまふみか
遠山文香

桜雲高校2年E組の図書委員で、性格は恥ずかしがり屋。

容姿は至って普通でメガネをかけていて、ショートヘア。

すぐくオロオロする事が多く、声をかけると震えながら返事してくる。ある人物に「捨てられそうなチワワ」と言われ、みんなに納得されてしまう。しかし、人を見る目はある。

転移後、いきなりの事にいつも以上に慌てて、優真の殺気にすぐに気絶する。

ステータス確認の時には落ち着き、皆の報告を聞いていて自分が周りとスキルの数が違うという点に気づき、誤魔化す。

優真がステータスを誤魔化している事に気付いた1人。

主人公に対する呼び方『黒神さん』

《ステータス》

名前？フミカ トオヤマ

種族？人間

職業？魔法戦士

属性？聖

スキル？《剣術》《魔力譲渡》《属性強化》《魔力回復》《付与魔法》《無詠唱》《聖魔法》《言語理解》

エミリア

本作のヒロインの1人。

優真達を異世界に呼んだデリアル王国の姫様。

性格は冷静だが、優真の前だと崩れることがある。

呼んだ理由を説明するが、優真の起こした行動には驚かさされるばかりである。そんな優真の行為に惹かれる自分がいる事には気付くが、確信がないのではつきり出来ないでいる。

主人公に対する呼び方『優真さん』

くAチームの簡単な紹介と雑談ですく

くろがみゆうま
黒神優真

性格：面倒くさがり、鈍感

容姿：黒髪で片目を隠している。少し筋肉質。

服装：フード付きの黒いコートを羽織っている。

転移前：桜雲高校2年D組に所属。自称ぼっち。

両親は既に他界しており、妹と2人で暮らしている。運動神経は良く、頭もそれなりに良い。とある「仕事」の都合上、周りの人との関係を避ける事が多い。中学生の頃、偶然「仕事」の対象と接触していた真央と勇輝に出会う。しかし、優真はその時の事を覚えてはいない様子。

転移後：誰よりも早く状況を把握し、冷静に判断した。「魔神」という職業を手に入れて次々と厄介事に巻き込まれる。1週間、独自の特訓で力のある程度使いこなせるようにした。

自ら嫌われ者になろうとしてる事に真央に気付かれ、真央の一言によって溜め込んでいた気持ちを吐き出す。その後、元恋人の那月の事を想いながらも真央と結ばれる事になった。Aチームのリーダー。

《ステータス》

名前？ユウマ クロガミ

種族？人間

職業？魔神

属性？全属性

スキル？ 《全属性魔法》 《合体魔法》 《魔眼》 《千里眼》 《魔法無効》

《魔法創造》 《無詠唱》 《隷属魔法》 《空間魔法》 《並列思考》 《瞬間加速》

《身体強化》 《精神強化》 《属性強化》 《魔力自動回復》 《体力自動回復》

《自動防壁》 《威圧》 《覇気》 《気配遮断》 《気配察知》 《超隠蔽》 《超鑑定》

《剣術》 《槍術》 《格闘術》 《銃術》 《投剣術》 《能力略奪》 《能力教授》 《結

界》 《殺気》 《発現速度強化》 《付与魔法》 《重力操作》 《空間倉庫》 《魔

力譲渡》 《???》 《言語理解》

白井真央しらいまお

性格：穏やか

容姿：腰まで伸びた艶やかな黒髪ロング。スタイル抜群。

服装：白いローブを着ている。

転移前：桜雲高校2年D組に所属。クラス委員長。

学校では1,2位を争う人気者の美少女。幼馴染みの勇輝、彩華、康太と一緒にいることが多い。中学生の頃、親に頼まれて勇輝と出かけていた時、不良高校生達に絡まれている所を優真に助けられる。その時から優真に恋心を抱く。高校生になった時、優真と同じ学校という事を知り喜ぶが、話しかけることが出来ずに1年を終える。2年になって同じクラスになり、漸く話す事が出来るようになった。

転移後：いきなりの出来事に不安になり、優真に積極的になる。魔族の襲撃で殺されそうになるが、またもや優真に救われる。そこから優真に更に積極的に接するようになり、自身の気持ちを告白する。同時に優真の過去を大まかに打ち明けられるが、『優真の一番になる』『次は自分が助ける』という目標を持ち、優真と行動を共にする。Aチームの補助担当。

《ステータス》

名前？マオ シライ

種族？人間

職業？治癒師

属性？聖、光、風

スキル？《回復魔法》《聖魔法》《光魔法》《風魔法》《魔力自動回復》
《回復量上昇》《発言速度強化》《無詠唱》《??》《言語理解》

もりしたけん
森下健

性格：謙虚

容姿：茶髪で短髪の普通の高校生。

服装：Yシャツにグレーのパーカー。黒の長ズボン。

転移前：桜雲高校2年D組に所属。謎の多い生徒。

両親はいるが、1人暮らしをしている。学校では普通に友達と話したり、昼食を取ったりと普通の生活を送っている。しかし、優真と似たような「仕事」をしていて、そんな日常に飽きていた。ある日、優真と奏に遭遇してしまい、本当の自分を知られてしまうが、変わらない態度で接する優真に安心感を抱く。その時から何度か共に「仕事」をするようになる。

転移後：異世界転移というファンタジーな出来事に内心興奮する。しかし、優真の行動によって落ち着きを取り戻す。ステータスを確認した時、職業が『暗殺者』という「本業」に近いもので『よく自分を表している職業だ』と若干焦りを感じるが、何事も無く安心する。

最初は力をまともに扱えずピンチに追い込まれるが、その後の優真の訓練によって、とんでもない成長を見せる。Aチームの副リーダー。

《ステータス》

名前？ケン モリシタ

種族？人間

職業？暗殺者

属性？闇、呪、氷、無、虚

スキル？《暗殺術》《忍び足》《気配遮断》《隠密》《加速》^{アクセラ}《闇魔法》

《呪魔法》《氷魔法》《無魔法》《虚魔法》《無詠唱》《殺気》《??》《言語理解》

〜雑談会〜

「なあ……。雑談って何すりゃいいの？」

「スキルの説明とかあった方が良くない？って作者言ってた

よ。」

「そうですね。あまりにも多くて覚えられるかも分かりませんが……。」
「実は作者ですら分かってないなんてパターンもありそうだな。」

「まあ全部はやらなくて良いんじゃないかな？」

「では、簡単に説明していきましょうか。」

「うわあ〜面倒だわ……。」

「もう、優真くん！そんな事言っちゃダメだよ！でも、そういう事言ってもやるのが優真くんだよね。」

「……どうだか。」

「照れてますね。」

「ダイザ天——」

「わわわっ！ストップ！ストップ！ストップ！優真くん、落ち着いて！！
健くんもからかわないの！」

「……チツ。」

「ふう〜。命拾いしました。危なかったです。」

（絶対に分かってやってるよこの人……。）

「では、始めましょうか。まずは——」

「あ、健くん。ネタバレは注意してね。本編で書くものもあるからって作者から伝言。」

「わざわざ伝言するならこの場に作者ぶち込めよ。連行して来いって。そして説明やらせとこうぜ。」

「作者さんは別の事に取り組んでいるらしいですよ?」

「話逸れすぎだよもう!じゃあ行くよ!」

《隷属魔法》

「これってどういう効果なの?」

「自分と対象の合意の上で隷属出来るらしいですね。」

「そして隷属させた対象の位置と状態を常に確認できるようにする。割と便利だなこれ。」

「でも一度も使っていないよね?」

「《千里眼》と《気配察知》と《魔眼》で足りるんだよな……。」

「しかし、隷属させた対象との親密度が上がるとスキルを共有出来るりするみたいですよ。」

「え……。それってつまり……。」

「俺みたいなバグが大量発生するのか。……面白そうだな。」

「やめて！そんな事したら世界がいくつあっても足りないよ!!」

「白井さんの中で俺はどんな存在なのかな？」

「ん？大好きな人だよ？」

「……そうか。」

「リア充爆発しろ、と。残念ですが、共有と言つても黒神^主さんが対象^{従者}のスキルを得ると言つた形です。」

「何か怖いことが聞こえたけど……。じゃあ優真くんが強化されるだけってこと？」

「そのようですね。」

「なんだつまらん……。んじゃ次行くか。」

《威圧》《覇気》《殺気》

「この3つの違いですか。」

「《威圧》はその人の力を雰囲気として差を見せつける感じかな。差があればあるほど効果は大きいね。」

「《覇気》は簡単に言うなら覇者や王としての資質を持った心みたいなやつだな。それを周囲に放つ事で相手を怯ませたり、気絶させる事が出来る。」

「《殺気》は文字通りですね。相手に激しい敵意、殺そうとする気配です。恐怖を植え付けるには一番楽なやつですよ。」

「本当にさらっと怖い事言うよな……。」

「これが森下健ですからね。では、次へどうぞ。」

《スキルステイール》 《スキルティチャー》
《能力略奪》 《能力教授》

「《能力略奪》は本当に相手のスキルを奪うだけですね。」

「条件とかあるのかな？」

「ああ。一度相手に触れる必要があるな。」

「その一度があれば後はいつでもって事なの？」

「いや、奪う瞬間は対象を視界に入れておくことが条件だな。」

「結構細かいですね。」

「《能力教授》は他人にスキルを教えたり、自身を含めた対象の潜在能力を引き出す効果がある。」

「これの発動条件も先程と一緒にですかね？」

「そうだな。」

「これで優真くんのスキルの説明は終わりかな？」

「後は大体文字通りだからな。条件とか色々あるが本編での楽しみみて事だ。」

「では、次は白井さんのですね。」

「と言っても少ないけどね。」

《回復量上昇》

「これはどういった効果なんだ？」

「《回復魔法》を使う度に回復量がどんどん増えていくんだよ。」

「そして《魔力自動回復》まで付いてるといいう事は無限回復みたいな事が出来そうですね。」

「回復のチート、ここに現る。」

「えへへ……。何だか照れるなく。」

（（皮肉が効かない……。だと……!?））

「私のスキルはこれで終わりかな。じゃあ次は健くんだね。」

「え、ああ。はい。では、まずはこれですね。」

《暗殺術》

「《暗殺術》のスキルの中には、あらゆる攻撃が入ってます。」

「例えば……狙撃、ナイフ、毒。後は純粋に素手とかかな？」

「他にも鎖、縄、鈍器、鎌。色々な武器が使えるみたいだな。」

「そうですね。優れた殺し屋ほど何とやらです。」

「方に通ずるってか。微妙に懐かしネタだな。」

「教師を殺そうと頑張るクラスだね。」

「なあ……。著作権とか怖いからこれ以上言うな。」

「分かりました。では次にこれです。」

《加速》
アクセラ

「これは《瞬間加速》イグニッションブーストの劣化版みたいなやつだな。」

「それでもかなりの速さになるんだよね。」

「《隠密》と《気配遮断》、《忍び足》を一緒に使うと尚良しです。完全に暗殺者向きのスキルばかりですね。」

「後は本当に文字通りだな。」

「そうだね。分からないことがあったら作者に聞きに行くよ?」

「いえ、こちらは大丈夫です。」

「後は《???》については軽く言っとくか。」

「後から結構重要? な物だからお楽しみに。」

「ここにいる他では後4人《???》を持っていますね。」

「それでは長々と失礼しました。また次回も読んでね！」

第一章く異世界生活開始く くプロローグですく

「、―――！」

声が聞こえる。男か女か若人か老人か。分かることと言えば、焦つてるような、懇願するような声。

「―――す！―――を―――て―――い！」

微かに聞き取れた。女の人の声だ。もう少し耳を澄ましてみる。

「お願いです！世界を―――！」

そこで声は途切れ、意識が薄れていった。

ピピピピ、ピピピピ、ピピピピ、カチツ

「……夢か……。」

目覚ましの音とともに起きた少年、黒神優真くろがみゆうまは見た夢の事を思い返していた。

「世界を……って、何かスケールのでかい話だなあ。」

優真は高校2年生で自称ぼっちである。性格はめんどくさがり屋で、容姿は悪くはなく、頭もそれなりに良く運動も出来るのだが、暗い雰囲気纏っているので中々良くは思われない。優真の両親は共に事故で既に他界している。

今は妹の黒神零華くろがみれいかと二人で暮らしている。優真は学校に行くより夢の続きが気になり、二度寝に入ろうとすると

ダツダツダツダツ、バタンツ！

勢いよく開けられた部屋の扉の先に天使妹がいた。

「お兄ちゃん！ご飯できたから起きて…つて、もう起きてたんだ。珍しいね。」

「久し振りに夢を見てな。続きが気になるから二度寝しようと思ってたところだ。お休み」

「起きてつてば！起きなきやおはようのキスしちゃうよ？」

「分かったから早まるな！そういうのは好きな人にやってやるもんだ。」

「はあく…。これは本当に重症もいいとこだよね…。」

優真を起こしに来た妹の黒神零華。高校1年生で明るく元気な性格で家事全般をこなせる美少女。優真も家事は出来るが零華には及ばない。優真自身『俺はめんどくさがり屋だから非常に助かっている。』と駄目人間まっしぐらな事を言う。

そして零華は周りから見ても分かるくらい重度のブラコンで優真を異性として意識している。だが、何度もアタックしても優真の鈍感

スキルによつて流されてしまう。

(どうすれば気付くのかなあ…。)

「おーい、零華。先行つてるぞ。」

「あ、待ってよ！お兄ちゃん！」

朝食を終えて、優真は零華と一緒に学校に向かう。優真にとっては怠い事この上ないのだが…。

「今日はね、愛衣^{あい}ちゃんと出掛けるんだよ。」

今日の予定を楽しそうに話す零華を見れるから良いと優真は思つてる。

学校に着き、それぞれの教室に向かうため別れようとするが…。

「お兄ちゃん、目瞑つて。」

そう言われて優真が目を瞑ると、頬に柔らかい感触を受ける。驚いて目を開けると、いつの間にか離れていた零華が顔を赤くし、唇を押しさえて照れたような笑顔を見せた。優真は頬を押さえて暫く呆然としていたが何をされたか理解して徐々に顔に熱を帯びるのが分かった。

「えへへ。じゃ、じゃあまたね、お兄ちゃん！」

そう言つて走り去つていった零華を見つめている優真。
顔は赤いが表情はポーカーフェイスのままだが、内心では…。

(え、ええええええ!!?今、零華が?キス?今のつてキス!?)

非常にパニックな状態。これでもかというくらい問答を繰り返している。それでも落ち着きを取り戻し優真も自分の教室に行く。

教室に入ると騒がしい話し声が聞こえてくる。優真の席は窓側の一番後ろでそこに足早に向かい、席に着く。未だに騒がしい教室の中で睡眠をとろうとする優真。だが、そんな中で優真に声をかける人物がいた。

「おはよう、優真くん!今日も怠そうだね。少し顔も赤いみたいだし熱でもあるの?」

クラス委員長の少女、白井真央しらいまおだ。

容姿はとても綺麗な黒髪ロングと出るとこは出てるのが印象的で性格は穏やか。学年で1、2位を争う美少女でクラスの人気者。そんな人気者に声をかけられる優真には嫉妬や羨望の視線が飛んでくる。大半が嫉妬であるが、優真は全く気にしてない。

「ああ、おはよう白井さん。確かに怠いけど熱はないよ。」

「良かった。でも授業はしっかり受けなきゃダメだよ?」

「分かってるつて。」

そんな風に他愛もない話をしてしていると、

「やっぱり真央は優しいな。そんな奴にも気を遣うなんて。黒神もいつまでも真央に気を遣わせるなよ?」

「ちよつと勇輝くん！そんな言い方しないでよ！私は本気で心配してるだけなんだから！」

突然、話に入ってきた少年は柏崎勇輝^{かしわざきゆうき}。

イケメン。とにかくイケメン。男女両方から親しまれる人気者で嫌う者は少ない。

優真をそっちのけで真央と勇輝が言い合っていると、

「ごめんね、黒神君。勇輝もわざとじゃないから。」

「あ、THE 苦労人”。」

「その呼び方どうにかならないかしら!？」

優真が “THE 苦労人” と呼ぶのは皇彩華^{すめらぎあやか}。

彩華の家は剣道で有名な皇家で彩華自身も幼い頃から剣道を習っている。容姿はきめ細やかな髪をまとめたポニーテールが印象的。真面目な性格で周りの事を考えて行動することが多いため、優真にはお節介焼きと思われる。THE 苦労人” と呼ばれるようになる。

彩華も真央と同じくらい人気者なので優真に突き刺さる視線はさらに強くなる。

真央、勇輝、彩華の3人は小学1年生からの幼馴染みでよく一緒にいる。いや、正確には4人の幼馴染みなのだが、もう1人は影が薄いというか、存在感がないというか、中々気付かれない。

「そういうえば石川は？」

「あ、話逸らしたわね!?!まあいいけどさ。康太の事?そういうえば見てな「ここにいるよ!」うわあ!？」

「ねえ、分かっててやってるよね？そうだよね？」

「あ、当たり前じゃない！ねえ？黒神君。」

「全然分からなかった。」

「ははは…。やっぱり僕はその程度なのか……。」

「ちよつと黒神君!?!私のフォローを返せ！」

急に現れた(元々いたが気付かれなかった)メガネをかけた少年は、
いしかわこうた石川康太。

さっきの3人の幼馴染みとは小学3年生で知り合い、その時からよく一緒にいる。しかし、影が薄いので周りからよく驚かれる。頭が良くてテストなどでは常に上位にいるのに『え？誰？』と言われるのを聞いた時は酷く落ち込んだらしいが、”THE 苦勞人”である彩華がフォローしてくれたと言う。

学年で1、2位を争う人気者に声をかけられ、その幼馴染み達と楽しそうに話している時点でそこまでぼっちではないと思うのだが優真は頑なにぼっちと言う。

キーン コーン カーン コーン

チャイムになると、教室の扉が開かれ先生が入ってくる。

「おーい。お前ら席に着け。ホームルーム始めるぞ。」

クラスの担任であり国語担当の、さくらだはるか桜田遙香先生。

若干男っぽい口調で話すが容姿は綺麗や美しいとしか言えない程の美人。性格は結構楽天的に思われがちだが、生徒の事を優先に思う

熱血さも持つ。

「……全員出席つと。んじや今日も張り切って授業を頑張っして下さい。」

ホームルームが終わり、授業が始まるのを待つ。優真は今日の時間割りを確認して、1時間目の授業の用意をして今朝の事を考えていた。

(……やっぱり気になるな、あの夢。それに、何だか嫌な予感がする。)

その嫌な予感が来る時は、そう遠くなかった事に気付いたのは放課後になってからだ。

く異世界転移ですく

キーン コーン カーン コーン

今日も1日変わらず帰りのホームルームが終わろうとしていたが、

「ああ、それから今から呼ばれた奴はこの後体育館に集まってくれ」

優真達のクラスで呼ばれたのは、石川康太、榎本祥子、柏崎勇輝、黒神優真、白井真央、皇彩華、行方征志郎、森下健の8人である。

他のクラスからも何人か呼ばれて先生を含めて40人が集まった。集められた生徒は何の理由で呼ばれたのか分からず、不満に思いはじめている。その中で真央は優真に静かに話しかけていた。

「優真くん……私達どうして呼ばれたのかな？」

「俺にも分からないが、ただ事ではなさそうだな」

優真はこの状況に何故か落ち着いていた。実際は焦っているが、朝からの嫌な予感の方が優真にとって重要であったからだ。そしてこの呼び出しは、その嫌な予感に繋がってるのかもしれないと優真は考えていた。

（そもそも何を願っていたんだ？……世界をどうしたらいい？ いや、それ以前に唯の高校生にそんな力がない。だとすると……）

「……まくん！ 優真くん！」

「!?……すまん。考え事してた」

「何か凄く怖い顔してたよ？ 大丈夫？」

真央が声をかけてきてる事に気づかない程考えていた優真は我に返ると勇輝と桜田先生が何やら言い合ってる。

「特に問題は無いよ。それより何が起きてるか聞かせてくれ」

「うん。まず最初にね——」

話をまとめると

・呼び出された理由が分からないため勇輝が桜田先生に聞きに行った。

・桜田先生は自分も呼ばれたと言う。誰に呼ばれたかは思い出せないらしい。

・それを聞いた勇輝はふざけてると思い怒り出す。

・そして言い合いになる。↑今ここ

優真は微妙な表情をして頭の中で話の整理をしていた。

(焦ってるのは分かるが、これ唯の喧嘩じゃねえかよ……。)

確かに桜田先生に呼ばれ、その本人も誰かに呼ばれたとなってその人物を思い出せないとなるとふざけてるのかと思う者は少なくないが、生徒から責められている桜田先生の顔は嘘をついているような表情ではない。他のクラスでも同じようなことが起こっている。

その時、優真の中で何かが繋がった。理由もなく体育館に集められたという事。呼び出した先生は誰に頼まれたか全く覚えてないという不思議な状況。そして、朝に見た夢の中の女の子のお願い。

これら全ては朝からの嫌な予感に係るものだと優真は確信した。

にわか信じ難いが、これから起こるであろう事象はどうすれば避けられるかまでは考えつかない。だからその事実を聞かせるために優真はみんなの前に出て静かに話す。

「みんな一度落ち着け。話がある。先生も柏崎もストップだ」

「これが落ち着いてられるかよ!!」

勇輝がそう言うのと周りからも『そうだ！　そうだ！』いきなり出てきて何だよ！』などと罵声が飛んでくる。しかし、優真は気にせず続ける。真央は罵声を飛ばしてきた人達を睨んでいる。

「こんなので焦っていたらこれから起こることに対してどうなるんだよ」

「……どういうことだ」

「唯の推測に過ぎないが聞くか？」

「……ああ。聞くだけ聞こう」

「先生も良いですか？」

「構わん。すまないな。教師として情けない」

「いえ、これは教師とか生徒とか云々じゃない問題ですから」

俺は皆を見回して発言しようとしたその時。

「な……何だあれは!？」

誰が言ったか分からないが、何に對して言ったのかは分かった。体育館の天井に目をやると、そこにはゲームやアニメで見るような魔法陣が浮かんで輝いていた。

皆は悲鳴を上げたり、呆然と立ち尽くしてたり、興奮している者もいた。

そんな中、優真は溜息を吐いて片手で頭を押さえていた。それに氣付いた真央、彩華、康太は優真に近付いて何が起ころのかを聞こうとする。

「ゆ、優真くん……何が起ころの?」

「黒神君……何か分かったのかしら?」

「黒神……聞かしてくれ。さっき言おうとしたことを」

「……いや、悪いが手遅れみたいだな」

優真がそう言うのと魔法陣は輝きを増して、魔法陣の光は優真達を包み込んで、体育館に集まった40人の人間は姿を消した。

光が収まった頃、優真達の前にはどこかのお姫様の格好をしている少女と、強そうな騎士の格好をした人物がいた。みんながキョロキョロと周りを見回して、勇輝が呟く。

「……は……どこだ?」

「貴方達は選ばれた者達です。そしてここはデリアル王国王城。私の名前はエミリアと申します。」

突然、訳の分からない事を言い出すエミリアと名乗る少女。優真は冷静に状況判断というより、やっぱりか…と言った表情をしていて、真央は不安そうな表情で優真に引っ付いている。勇輝は凄じ睨んでくるが、他の皆は呆然としている。

「優真くん…何が起こったの？」

「信じたくはないが、ここは異世界というやつだろうな。体育館に集められた俺達は転移させられたってことだろう」

優真の言葉を聞いた皆は頭が追いついてないのか、首を傾げてしまっている。未だに呆然としてるやつもいる。

優真の声を聞き取ったエミリアは一瞬驚いたような顔で優真を見るが、すぐに微笑む。それを見た男子達は顔を赤くする。

姫様の格好をしたと言うが上品な仕草と雰囲気から本物のお姫様だと思わせるには充分なものだった。

優真も例外ではなく、顔を赤くしている。そんな優真を見た真央が顔を膨らましている。

「じく……」

「白井さんどうしたの？」

「……別に。男ってケダモノだなあ〜って」

「いやいや、健全な男子高校生には耐え難いから」

「ふうん……。そんなに胸が好きなんだ」

エミリアの容姿は見事なスタイルで綺麗な銀髪がこれでもかと言うくらい似合っている。胸に関しては確かに大きいのが真央に引っ付かれてる優真は、

「白井さんのだって、さっきから当たってるんだけど」

「……!? 優真くんの馬鹿あ!」

涙目になって叫ぶ真央を慰める彩華。優真もさりとてそういう事を言えてしまうのは優真の鈍感スキルによるものなのでどうしようもない。

「ふふふ……」

「……何かおかしかったか？」

「いえ、そうではありません。貴方は周りの方と比べると動揺してないと思いますって」

「なるほど、そういう事か」

「先程の発言もまるで分かってたかのように話してましたが、何故ですか?」

「簡単な推測だよ。ここに来るまでの出来事からあらゆる可能性を考えてたんだよ。呼ばれた理由までは分からなかったが」

「それでも充分過ぎる推測だと思いますけどね。それから皆さんにはこの世界に来た時点でそれぞれ職業を手に入れていきます。頭の中で

《ステータス》と念じて確認してみてください」

お互いに不敵な笑みを浮かべながら会話してる優真とエミリア。
そんな2人は周りから見ると不気味でしかない。

優真はそんな会話の中で、最も朝気にするべき予感事を思い浮かべていた。

(同じだ……。夢の時の……。女の声と。)

くやるべき事です」

「エミリアが職業を確認するように言うが、皆は理解が追いついてない。寧ろ理解出来てる優真と他クラスの1人が異常なだけである。勇輝は何故呼ばれたのかを聞き、エミリアがそれについて話し出す。

「エミリアさん、その前に何故俺達が呼ばれたのか教えてくれませんか？」

「すみません。何も説明せずに話を進めてしまつて。まず、貴方達が呼ばれた理由はこれから現れる魔王を倒してもらうためです。」

「……魔王……ですか？」

「はい。その魔王を倒すためには異世界から選ばれた者達、勇者達を呼ぶ必要があつたのです。」

優真達が呼ばれた理由は、勇者となつて魔王を倒しに行くという事だつた。生徒達はそれを聞いてオロオロしているがエミリアは続ける。

「その為に貴方達には職業と共に強力なスキルが授けられます。しかし、魔王はそれだけで倒せる程ではありません。……それに、魔王以外にも敵はたくさんいますので油断すると命を落としてしまうかも知れません。」

最後の方を脅迫するように声を低くして言ったエミリアに対してほとんどの人間が顔を青くして怯える。

全く動揺しなかつたのは優真と他クラスの1人で、勇輝も優真に負けないように冷静を装うが冷や汗がすごい。

そして桜田先生は少し怒つたような表情をしてエミリアに質問を

する。

「つまり、生徒達は訓練や敵と戦って経験を積んで強くさせるつもりか？」

「そういうことになりますね。」

「ふざけるな！教師としてそんなこと——」

「選ばれてしまった以上、どうすることも出来ません。死にたくなければ強くなるしかないんですよ。」

「くっ……！」

桜田先生は怒りの余りエミリアを殴ろうとすると、近くの騎士が剣を抜き斬りかかってくる。

「エミリア様に何たる無礼を!!」

「何をやってるんですかデイン！下がちなさい！」

桜田先生は突然の出来事に目を見開き、エミリアも流石に焦り叫ぶがデインと呼ばれた騎士は既に剣を振りかぶって桜田先生に、

キンッ！ガシッ！

「はあく……。全く、騎士ってこんなものばつかなの？イメージと全然違うのだけれど？」

「いやいや、こいつが特殊なだけだろ。」

届くことは無かった。騎士の腕を掴み止めたのは優真、剣を蹴りで弾いたのは月宮奏つきみやかなでという少女。

実は去年優真と同じクラスで、なんと奏もぼっちである。暗いとかそういう訳ではなく、逆に綺麗すぎると言った意味で近寄り難い。性格も内気で厳しいためぼっちが完成した。

優真とは、1年の頃に学校の屋上で出会うが、2人は特に何かをすることもなく、会話すらない。ラブコメ的なことは無いのか?と聞かれたら、何も起こらないのが優真クオリティ、又は奏クオリティなのだ。

だが、何度かその出会いを繰り返している間に多少の会話(『よっ。』や『ん…。』等)をする様になり、段々と普通に話せるようになった。というより、2人とも余り自分から話しかけないだけであつて話せない訳ではない。

「…………!?貴様ら何をする!」

「こつちのセリフだよ。月宮、先生を頼む。」

「誰にももの言ってるの?馬君。」

「“ゆ”が抜けてるぞ。人の名前で遊ぶんじゃねえよ。奏ちゃん。」

「な…………!?ちや、ちゃん付けで呼ぶな!」

「先に人の名前で遊び始めたのはどっちだよ…………。」

「おい!貴様ら!私の話——」

「うるさい——」

ドガッ!バキッ!ドゴオン!

ディーンの顔と腹に2人の拳が直撃し、王城の壁に激突する。今までのやり取りを黙って見てた皆は頭を押さえ始める。1年の頃の優真と奏のこういうやり取りは学校でも結構有名だったのだ。

しばらく言い合っていた2人は桜田先生を落ち着かせ、エミリアに話を戻すように促す。

「それで？」

「それで？とは？」

「強くなった後の話だよ。すぐに魔王を倒せる訳じゃないだろ？」

「……本当に鋭いですね。確かにその通りです。その為に魔界へ行く必要があります。」

「で、その魔界へ行くための鍵は何なの？」

「貴方もですか……。話が早くて助かりますが……。鍵は魔王の幹部の持つ紋章を集める必要があります。」

優真と奏の順応性に驚きを通り越して呆れてしまっているエミリア。段々落ち着いてきたのか、勇輝達も質問する。

「その幹部ってのは何処にいるんですか？」

「幹部達はそれぞれ自分達の迷宮を持っています。ですから、その迷宮の最奥にいますと考えるのが妥当でしょう。」

「その迷宮というのは何処にあるのかしら？」

「そのことですが、迷宮の場所は明確ではありません。」

勇輝と彩華が聞くが迷宮への手がかりがないらしい。そこで優真のクラスメイトの征志郎と祥子が

「……その迷宮を持つ幹部は何人いるんだ？」

「……すみません。それも分かってないんです。」

「ていうことは、情報収集を兼ねて旅に出たりするのかな？」

「……はい。勝手な事だとは分かっています。ですが、貴方達に頼るしかありません。だからどうか！」

エミリアは勢い良く頭を下げて頼もうとするが、それは優真によって妨げられる。

「待った。3つ聞きたいことがあるんだが、いいか？」

「……何でしょうか？」

エミリアは不安そうな表情になる。優真は皆を見渡してから眼を閉じ、静かに開けて、エミリアを見つめる。その眼には静かな殺気が含まれていた。ここにいる者はそれに気付き、体を震わせる。そして優真は帰ってくる答えを分かっているかのように問う。

「まず、魔王を倒すことに俺達にメリットがあるのか？」

「!？」

「お、おい、黒神！一体何を——」

「黙ってる柏崎。今は俺が話してる。」

「ゆ、優真くん……。」

普段の面倒くさそうな態度ではなく、生徒達や先生達は初めてみる優真の真剣でどこか恐怖を漂わせる雰囲気になり込んでしまふ。そんな優真を心配そうに見つめる真央。

「どうなんだ？エミリア。」

「……………貴方達にメリットはありません…………。」

「まあそうだろうな。じゃあ2つ目だ。元の世界で消えた俺達の扱いはどうなっている？」

「急に消えたという事になってると思います。」

「ごつちにいる間は元の世界の人達から記憶が消えてるという訳ではないんだな？」

「……………はい。」

「……………なら最後だ。」

優真は静かに深呼吸をして口を開く。

「そもそも、俺達はここから帰ることが出来るのか？」

「ッ……!?!」

最も聞かれたくないような事を聞かれたと苦虫を噛み潰したような顔をするエミリア。

その顔を見た生徒達は『ま、まさか……』『おいおい、嘘だろ!?!』と焦り始める。それでも優真は続ける。

「何か言ったらどうだ？」

「分かりません。こちらに呼ぶことは出来ても帰せるかどうかは……。」

「分からない、か……。随分と勝手過ぎるとは思わないか？」

今まで放っていた殺気とは比べ物にならないくらいの威圧、覇気、殺気が優真から放たれる。それに耐え切れなかった者は気絶してしまふ。耐え切ったのは、優真のクラスメイトと奏と桜田先生。奏は冷や汗を流すくらいだが、他は立ってるのがやつとのレベルだが耐える事が出来た。

エミリアは直接、自分に向けられたものだが、姫という立場のせい、か、体は震えてしまっているが、表情は落ち着いていた。そして、震える口を何とか動かし、話し出す。

「そ、そのことは……理解して、います。」

「理解した上で呼ぶくらい大変な事態ってことか。」

「そ、そうです……。」

「それなら、それなりの誠意を見せてもらおうか。」

「誠意……ですか？」

優真はそう言うとき、ディーンの腰に付いていた魔物の剥ぎ取り用のナイフを取り、エミリアに渡す。そして優真は淡々と告げる。

「分かるだろう？ 安心しろ。その誠意を見せたら魔王とやらはしっかり倒してやる。」

優真は言外に自害しろと言っているのだ。それに気付いた皆は、

「やり過ぎだ！ 黒神！」

「そうだよ！ 優真くん、落ち着いて！」

「黒神君！ いくら何でもそれは無いわよ！」

「優真！ お前は犯罪者になるつもりか!？」

「黒神……。」

「……………」

上から勇輝、真央、彩華、康太、桜田先生、奏、祥子、征志郎、健も続いて、

「黒神君、君はそんな人じゃないよね……。」

「……一体何を考えてんだ。」

「……………」

その声は優真に届いたか、どうかは誰にも分からない。それでも優真はエミリアの事を見据える。目で訴えている。早くしろ、と。

「……分かりました。」

「！！！！！！」

エミリアは震える手で優真からナイフを受け取り自分の方に向ける。奏と健以外は止めに入ろうとするが、優真の威圧によって動きが止まってしまう。

エミリアは剣の先を見つめ、やがて静かに目を瞑る。勇輝達もその光景を見ていられず目を瞑る。

「……では、どうか。この世界に平和が訪れますように……………」

その声と共にエミリアは自分の首にナイフを振るう。

グサツ！

突き刺さる音がして、勇輝達はゆっくり目を開ける。見えたその光景に目を見開く勇輝達。勇輝達の見た光景は

優真の手に突き刺さっているナイフだった。

「……………え……………」

エミリアもいつまでたっても感じられない痛みにも目を開けて目の前でナイフを受け止めてる優真の手に困惑する。

「な、なん……………で……………」

「ツ〜!! 行ってえ〜…………。慣れないことはするもんじゃねえな。俺は誠意を見せろと言っただけだ。確かに遠回しに死ぬと言ってるように聞こえるように言っただが直接的な言い方はしてないだろう?」

さつきとは打って変わって面倒くさそうな話し方をする。何て卑怯なやり方なんだろうと皆は思ったのと同時に色々納得しだした。奏はやっぱりみたいいな表情をして、健はどこか懐かしむ様な表情だった。それを聞いたエミリアは未だに困惑しているようだ。優真は空いてる方の手でエミリアの前で手を振る。

「おーい。もしもーし、エミリアさ〜くん?」

「…………ハツ!? ゆ、優真さん? って優真さん! 手が!」

「別に平気だよ。いや、確かに痛いけど俺への罰って事でいいんだ。」

「いいから! 手を出してください!」

「あ、はい。」

エミリアの迫力に素直に従う優真。さつきまでの影がどこにも見当たらないくらい情けなくなってしまうている。優真が手を出すとエミリアが手を被せるようにして、

「神の加護のもとに《回復》^{ヒール}」

そう唱えると緑色の光が優真の手を包み込む。すると、手の傷が塞がってくる。皆はそれをじっと見ている。

「綺麗……。」

真央の眩きに皆は頷く。

「これは回復魔法ってやつか。」

「はい。私は職業は姫で、スキルに回復魔法があるんです。」

「なるほど。ようやく異世界って感じの物が見れた気がするよ。」

「それで、その……さつきの事は……。」

エミリアは魔王を倒す事に協力してくれるのかどうかを確かめたかった。それを読み取ったかのように優真は、

「ああ確かに見せてもらった。でも、やっぱり帰れないんじゃないかメリツトが無いと言うか……。」

「……それじゃ、魔王は——」

「でも、分からないだけで可能性が無いわけじゃないだろ？」

「!?という事は……!」

「ああ。ついでだ。帰る方法を探すついでに魔王様を倒してやる。」

優真の発言に周りの皆も便乗する。

「エミリアさん。俺も手伝いますよ。」

「私も、優真くんだけにやらせるのは良くないからね。」

「そうね、結局は帰るのが最終目的になる訳だし。」

「ホントにお人好しよね……。ま、帰るためにはそれしかないみたいね。」

「生徒達だけに任せるほど堕ちたつもりはない。私もやるぞ。」

残りの面々もそれぞれ気合を入れている。エミリアはそんな姿に思わず目から涙が零れてしまう。

「おいおい、泣くところじゃないだろう。こういう時はある一言で済ませれるだろ。」

「うう……グスン……はい!皆さん、ありがとうございます!」

く職業ですく

この世界での目的が決まった優真達は気絶してしまった皆が起きるのを待っている。職業を確認するなら、皆が揃ってからの方が良さだろうと桜田先生が提案し、優真達もそれに賛成した。

皆がそれぞれ話してる中、真央は優真にさっきのことについて話していた。

「……ねえ、優真くん。」

「どうしたの?」

「何であんなことしたの?」

「あんなことって?」

「自分が傷つくような事だよ。何で?」

寂しげな表情で優真に問い詰める真央。どこがとは言わないが優真は理解していた。しかし優真は、はぐらかすように、

「ああ、手の事か。これは自業自得だよ。俺だつてまさかあんな事になるとは——」

「そうじゃないよ!」

「……………」

優真の言葉を遮るように真央は続ける。優真はいつになく真剣な真央に黙るしかなかった。

「お願いだから、ああいうやり方はやめて……。それで悲しむ人だっているんだから……。」

そうやって涙を堪えるように顔を伏せてしまう真央。流石の優真もそのお願いにはつきりと答える。

「しょうがないだろ。今更変えることだって難しいし、それが俺のやり方であって、俺自身の為であるんだから。でもまあ、約束は出来ないが、善処するよ。」

「……しょうがない、か。……まあ、そういう所も好きなんだけどね……。」

「ん？何か言ったか？」

「ううん。何でもないよ。」

最後の方を聞き取れなかった優真の問いに真央は微笑んで答えて、勇輝達の方に向かってく。

「ホント、罪な男〜。」

「もう少しやり方がありましたよね。」

「……何だよ。月宮、森下。」

真央が去ったのを見計らったかのように優真に話しかける奏と健。

「いやいや、本当は分かってるのよね？」

「……だから何をだよ。」

「白井さんの気持ちですよ。まあ、白井さんだけではありませんが……。」

「……結局何が言いたいんだよ。」

「アナタの性格上、こんな事言っても無理かもしれないけれど、あまり自分を過小評価しない方がいいわよ?」

「……………」

「黒神さん、貴方は強いんです。貴方は隙を作らない。そのせいで貴方は——」

「それ以上喋るな。俺は俺の為にしか動かない。それだけだ。」

「……………」

僅かな威圧が含まれた優真の言葉に2人は何も言えなくなり、沈黙が訪れる。その沈黙は気絶をしてる者達が起きるまで続いた。

皆が起きた後、優真達はこの世界での目的を話した。パニックになつたり、意気込む人もいたり、放心してしまう人もいたが、落ち着かせてエミリアに話をするように促す。ちなみにデインは優真と奏をひたすら睨み続けていたが、当然スルーだ。

「それでは皆さん職業とスキル、ついでに属性を確認してください。

《ステータス》と頭で念じれば出ると思います。他人には見えないので報告もお願いします。」

それを聞いた皆は何かを念じるように目を瞑る。すると、

「うわっ!?!何だこれ!?!」

「す、すごいね……。」

勇輝と真央は見たみたいだ。優真は自分だけでなく2人のそれを見ていた。

名前? ユウキ カシワザキ

種族? 人間

職業? 勇者

属性? 聖

スキル? 《天賦の才》《剣術》《聖魔法》《言語理解》

名前? マオ シライ

種族? 人間

職業? 治癒師

属性? 聖

スキル? 《回復魔法》《聖魔法》《魔力自動回復》《言語理解》

(やっぱり柏崎は勇者か……。)

「お、俺が……勇者……。」

勇輝は自分が勇者だったことに驚いている。エミリアはそんな勇輝に話しかける。

「勇輝さん、勇者である貴方にこれを授けます。デイン持つてきなやう。」

いつの間にかエミリアの近くに戻っていたディーンはそう言われると何かを取りに行く。

戻ってきたディーンが持っていたのは1本の剣だ。ただの剣とは違う。

「これは《勇者の剣》です。勇者である者に与える物です。勇輝殿、受け取って下さい。」

ディーンは勇輝に話す。勇輝は《勇者の剣》を見つめる。やると言ったからにはやるしかない。そんな意思が込められた目をしている。そして剣を手に取り、

「ありがとうございます。絶対に魔王を倒し、世界を救って見せます！」

「私達も頑張ります！」

「……やるしかないみたいだな。」

そう言った勇輝、真央、康太に続くように声が響く。その間に優真は全員の《ステータス》を確認していた。

(俺のクラスほとんどチートな気がするんだが……。)

名前? アヤカ スメラギ

種族? 人間

職業? 姫騎士

属性? 光

スキル? 《呪い無効》《剣術》《光魔法》《言語理解》

名前? コウタ イシカワ

種族？人間

職業？魔導士

属性？闇

スキル？《隠密》《気配察知》《闇魔法》《言語理解》

名前？シヨウコ エノモト

種族？人間

職業？精霊使い

属性？水

スキル？《精霊契約》《水魔法》《自動防壁》オートガード《言語理解》

名前？セイシロウ ナメカタ

種族？人間

職業？鍛冶屋

属性？土

スキル？《武器創造》ウエホンクリエイト《土魔法》《超修復》《言語理解》

名前？ケン モリシタ

種族？人間

職業？暗殺者

属性？闇

スキル？《暗殺術》《気配遮断》《闇魔法》《言語理解》

名前？ハルカ サクラダ

種族？人間

職業？鑑定士

属性？無

スキル？《千里眼》《鑑定》《無魔法》《言語理解》

彩華たちが報告し終わるタイミングで優真はエミリアに質問する。

「スキルってのは1人に何個くらいあるんだ？」

「通常は1人に1つです。ですが、特別な職業だったり、貴方達のように選ばれた者なら2〜4つはあっても、おかしくはありません。」

「なるほどな……。属性は？」

「属性に関しては後から取得することも可能です。最初は大体1つです。種類としては基本が“火・水・風・電・土・光・闇・無”の8つです。強化されるとそれぞれ“炎・氷・嵐・雷・岩・聖・呪・虚”となります。」

それを考えればまだ良いのかもしれない。強すぎることに変わりはないが。しかし、それを嘲笑うように超える人物が3人いた。

(……。つまりこいつらは相当ヤバイってことだろ!?だってこれは……。)

名前? カナデ ツキミヤ

種族? 人間

職業? 魔物使い

属性? 呪

スキル? 《強制契約》《強制解除》《融合》《分離》《召喚》《威圧》《呪魔法》《言語理解》

名前? トウマ マツシタ

種族? 人間

職業? 格闘王

属性? 虚

スキル? 《身体強化》《精神強化》《肉体変化》《格闘術》《衝撃波》《覇気》《虚魔法》《言語理解》

名前? フミカ トオヤマ

種族? 人間

職業? 魔法戦士

属性? 聖

スキル? 《剣術》《魔力譲渡》《属性強化》《魔力回復》《付与魔法》《無詠唱》《聖魔法》《言語理解》

優真ですら驚くのは無理もない。エミリアが言った持てるスキルの倍は持っているのだから。勇輝達をチートと呼ぶなら、こいつらは最早バグである。

騒がれるのを分かったのか3人はある程度隠して報告する。そして、

「ねえねえ、優真くんは何の職業だったの？」

「確かに気になるわね。もしかしたら魔王でした！なんて展開があったりするのかしら？」

「流石にそれは無いだろう。優真だって一応人間なんだから。」

「何だよ一応って……。残念ながらその期待には答えれないな。ただの冒険者で、属性は無、スキルは《瞬間加速》《並列思考》《無魔法》《言語理解》だ。」

「そうか……。黒神ならもっと凄いものかと思っていたが、まあ仕方が無いか。」

「勇輝くん！何でいつも優真くんのことを嫌味たらしく言うの!？」

「い、いや、そんなつもりは……。って、そうか。流石だな。真央は誰にでも優しい。」

1人でぶつぶつと呟いて納得している勇輝をよそに真央は、

「大丈夫だよ、優真くん！私は治療師だから、いつでもすぐに治せるよ。うにしとくからね！」

「あ、ああ。ありがとう、白井さん。でも、柏崎の言う通り仕方が無いよ。」

「でも……。」

「それに戦えない訳じゃないし、さっき白井さんが言った通りなら治してくれるんでしょう？なら、安心して戦えるさ。」

「優真くん……。」

頬を赤く染めて優真を見つめる真央。勇輝も自分の世界から戻って優真を睨むが、彩華がそれを抑える。

周りの皆は自分達の職業やスキルに興奮する者がいたり、優真達のやり取りを見て色々思ってる者がいたり、カオスな状況であった。そんな状況の中、優真は罪悪感を感じた様な表情をしていた。それに気付きながらも、静かに見守るのはバグ組3人である。

(あいつらは気付いてるみたいだな……。俺が本当のステータスを隠してることに……。流石にこれは……。なあ……。)

ステータス確認の時、優真は自分でも引くぐらいの物を見てしまったのだ。

名前？ユウマ クロガミ

種族？人間

職業？魔神

属性？全属性

スキル？《全属性魔法》《合体魔法》ユニゾンマジック《魔眼》《千里眼》マジックキャンセル《魔法無効》

《魔法創造》マジッククリエイト《無詠唱》《隷属魔法》《空間魔法》マルチタスク《並列思考》イグニッションブースト《瞬間加速》

《身体強化》《精神強化》《属性強化》《魔力自動回復》《体力自動回復》

《自動防壁》オートガード《威圧》《覇気》《気配遮断》《気配察知》《超隠蔽》《超鑑定》

《剣術》《槍術》《格闘術》《銃術》《投剣術》スキルステイブル《能力略奪》《言語理解》

最もヤバイのは優真自身であつたのだ。

くチーム名とメンバー（仮）ですく

皆が職業を報告しあつて賑やかになつてる中、優真は未だに自分の職業について考えていた。

（魔神か……これはダメだろう。はあく……流石ぼっちだな俺。敵とか……別にぼっちは悪くねえだろ。全くどうしろと言うんだ。……何とかなりそうと思つてる自分がある。）

結構重要な事なのに優真は呑気に考えている。すると、

「情報収集を兼ねて旅をすると言うならパーティーメンバーを決めた方がいいんじゃないか？」

「そうですね。じゃあ、4人1組の隊を作りたいと思う。なるべく相性とか考えてもらいたいが、チームワークも大事だと思うからコミュニケーションを取りやすい人と組んだ方が良い。」

桜田先生が提案し、勇輝が皆に呼びかける。エミリアもその意見には賛成のようで頷いている。

しかし、グループを決める時には必ずと言つてもいい事態が起こる。それも人気者がいるのなれば確実だ。それは、

「白井さん！俺とパーティー組んで下さい！」

「勇輝君！私をパーティーに入れて下さい！」

等と言つたことが多く、人気者である人は取り合いになる。勇輝は爽やかスマイルで言い寄ってくる女子生徒を落ち着かせてる。真央は困つたような顔をし、優真に助けを求めるが、その前に、

「おい、真央が困ってるだろ。大丈夫か？真央」

「んだよ柏崎。幼馴染みだからって良い気になりやがって……。」

話を終えた勇輝が助けに入った。優真としては仕事がなくなつて良かったと思つてる。人気者は人気者故に嫉妬を買うこともある。それが今の勇輝と男子生徒1だろう。

しばらくして事態が収まった頃、真央が、

「優真くん、私とパーティー組まない？」

「ん？でも、白井さんには幼馴染み達がいるだろ？それもちようど4人だし。」

「でも……。」

優真は誘われたことに驚きはしなかったが、不思議に思った。幼馴染み3人がいるのに何故自分を誘うのか。

「次は私が助ける番だから……。」

小さく呟いたが、優真には聞こえていた。

「次は、と言われても俺には全く覚えが無いんだが？」

「優真くんが覚えてなくても私が覚えている。それだけでいいの！」

につこりと笑って少し頬を赤く染めている真央に思わず見蕩れてしまう優真。しかし、その雰囲気破るやつがいた。

「真央、俺達と組まないか？黒神はあまり乗り気じゃないみたいだし

な。」

「なら、黒神くんは私が貰ってもいいかしら？」

その人物は勇輝と奏。2人は互いを睨み合っている。勇輝の後ろにいるのは彩華と康太。奏の後ろには少し遠くだが当麻と文香がいる。

その光景に優真は心でニヤリと笑う。奏は優真の考えてる事が分かったから一足先に行動に移していた。真央が不安そうな表情をして、力強く優真の手を握る。優真は静かに話し出す。

「落ち着けよ柏崎、月宮。白井さん、柏崎の言う通り、君はそっちのパーティーに入った方がいい。」

「!?……何で？私と同じパーティーは嫌なの？」

「そういうわけじゃないが、柏崎は勇者だ。そのメンバーになるなら、生き残れる可能性が高いだろ？そして白井さんは貴重な治癒師だ。だから柏崎のパーティーの方が——」

「じゃあ優真くんはどうするの!?!」

突然声を荒げた真央に驚く優真達。それでも真央は続ける。

「優真くんだって生き残らなきゃいけないの！私が貴重な職業だとか、勇輝くんと幼馴染みだとか関係無い！私は優真くんと、皆と生きて帰りたい！ただそれだけなの！」

真央の強い意思が込められた言葉を皆は黙って聞いている。

「白井さん、別に俺も死に行くわけじゃない。寧ろ、生きて帰る事しか

考えてない。だからこそ治療師である白井さんは生きる為の最後の希望なんだ。」

「優真くん……。」

優真の理由にまだ納得しきれない真央は不安そうに優真を呼ぶ。すると、

「大丈夫だよ、真央。ここに来た最初の時だつて黒神君が率先して動いてたじゃない。そんな人が簡単に死ぬと思う？それとも真央の中の黒神君はそんなに弱いのか？」

「……そうだね。優真くんはすごく強くて簡単にやられることなんてないよね。私は優真くんを信じるよ。」

彩華が真央をそつと抱き寄せて宥めるように話す。その間に彩華と優真はアイコンタクトを取り、

(貸1だから。)

(これだけでかよ……。)

なんていうやり取りをしていた。

「白井さんが落ち着いたところで、そろそろグループ分けに入ろうと思います。それぞれリーダーが決まったらメンバーを報告して下さい。」

これからはエミリアがまとめることになったらしく、真央が落ち着いた頃に、話を切り出す。

グループ決めが終わり、皆がそれぞれのグループでまとまっている。

Aチーム 《桜雲・D・勇者一行》

リーダー（柏崎勇輝）メンバー（皇彩華、白井真央、石川康太）

「これ……チーム名いらないだろ？」

「そうね……流石にこれは無いわよね。」

「そんなことないよ！チーム名はあった方が絶対良いって！」

「いや、良し悪しはセンスの問題だろ……。海賊漫画の主人公かよ……。」

Bチーム 《魔王倒し隊》

リーダー（桜田遥香）メンバー（行方征志郎、森下健、榎本祥子）

「よし…これより、私達の隊は魔王を倒すためにも、きっちり修行するぞー！」

「って、先生がリーダーかよ！しかもチーム名弱そうじゃねえか!？」

「こればかりは僕も何とも言えませんね……。」

「ええ〜？私は可愛いくて良いと思うけど？」

そんな事を言い合ってる間もメンバーは次々と決まって行く。

「次は貴方達ですよ？優真さん。」

Jチーム《ALL JOKER》

リーダー（黒神優真）メンバー（月宮奏、松下当麻、遠山文香）

「おい、この意味不明な名前なんだよ……。いや、分からなくはないがただの厨二病じゃねえかよ。」

「あら？ただの厨二病の代名詞さんが何を言ってるのかしら？」

「……殺るか／殺る？」

「待てよ、絶対そんな展開じゃなかっただろ!?お前らもう少し仲良くしろよ!」

「はわわわ……み、皆さんお、落ち着いて……くだ、下さい。」

「二君／貴方／お前が一番落ち着いて!」

「ひゃあく!!ご、ごめんなさいですう……。」

他の皆が騒いでる中、エミリアはさりげなく優真の近くに移動し、すれ違いざまに話しかける。

「後で私の部屋に来て下さい。色々と説明してもらいたいですので。では。」

そんなエミリアを面白そうに見つめる優真は心の中で、

（流石に隠していることに気付いたか……。まあ別にいいけど、面倒事

だけは避けたいな。)

色々起こしたせいでエミリアに目をつけられた事に若干後悔する優真であった。

く話し合いですく

チームが決まり、これからの行動について話し合うためにそれぞれリーダーの部屋に移動する。優真達も自己紹介を終え、皆で集まっているのだが……。

「お！6と8のツーペアだ！」

「な、7のスリーカードです。」

「9のフォーカードよ。」

「ん、ロイヤルストレートフラッシュ。」

「何で!?もうこれで3回目だよ!?優真、お前イカサマしてるだろ！」

「何かを賭けてるわけでもないのにする必要あるか?」

何故か優真のポケットに入っていたトランプでポーカーをしている《ALL JOKER》。話し合う時に、気軽な事をしながらの方がコミュニケーションも取れるのでは?と、当麻が提案して偶然あったトランプでポーカーをする事になった。

現在、優真は5回中3回ロイヤルストレートフラッシュを出している。その事に当麻は耐え切れなくなりツツコミをいれる。

「それより、これからどうするのかしら?」

「これと言って制限することも無いんだけどなあ……。ていうか面倒くさい……。」「

「そんなんでいいのかよ……。もう少し考えようぜ?」

「んじや松下が決めてくれよ。俺は寝るから。」

「いや、リーダーのお前が決めてくれよ。」

奏が今後の事を聞くが、優真は適当に流してしまう。当麻がそれにツッコミを入れるが、それも流す。

「あ、寝てる場合……じゃなくもないが、エミリアに呼ばれてたわ。」

「それ……寝てる場合じゃないですよね？」

「だって面倒な予感しかしないし……。」

「ホントに性根が腐ってるわね。」

「お前には言われたくねえよ。とにかく行ってくるわ。あと、俺らのチームのルールは大きく分けて3つだ。」

「え？ちゃんと考えてんじやん！とつとと言ってくれよ。」

「今さつき思い付いたんだよ、仕方無いだろ。」

《ALL JOKER》のルールは簡単に説明すると、

- ・自分や仲間の個人情報やステータスを無闇に話さないこと。
- ・自分の敵だと思ったら容赦はしないこと。ただし、周りに迷惑を
かけない程度に。
- ・仲間を増やす際には、皆に相談すること。

「……結構まともね。」

「はい……緩いようなものを想像してました……。」

「普段の面倒そうな優真からは考えられないくらいだな。」

「お前ら俺を何だと思ってるんだよ……。松下はぶん殴らせろ。」

「はあ!?何でだ——グハツ!!」

当麻は最後までセリフを言えずに伸びてしまう。文香が慌てて当麻に駆け寄り呼びかけている。その光景を呆れた表情で見る奏。何も無かったかのような部屋を出ようとする優真。

「ま、一応ルールは伝えたから後は自由にどうぞ。俺はとても面倒な残業があるからな。」

ガチャ バタン

優真が部屋を出て行って残った3人（1人は気絶中）。

優真の足音も遠くなつて聞こえなくなる頃に奏がため息混じりに話し出す。

「はあく……全く。ホントに自分勝手よね、黒神くん。」

「……そういうえば、奏さんは優真さんと前から知り合いだったんですよ?..」

「ええ。とても不本意ながら知り合ってしまったのよ。」

「あはは……。でも、奏さん……。楽しそうですよ?..その、優真さんと話してる時とか。」

「え？黒神くと話してる時？私が？」

「は、はい。あの、客観的にどうか、私から見たら……奏さん、まんざらでもなさそうな表情してますよ？」

「……遠山さんもなかなか言うわね。」

「ご、ごめんなさい！えっと、その、ですから——」

「でも、強くは否定しないわ。」

「え？」

「彼には前から何かと巻き込まれることが多くてね。でも、その事が今となっては、私の人生を変えた出来事の1つって思えるのよ。だから私は黒神くんを嫌っている事もないし……、寧ろ好意に近いかもしれないわね。」

「……意外ですね。奏さんもそういう風に思うんですね。」

「それは偏見よ。私だって人間だもの。感謝する時、怒る時、悲しい時、たくさんあるわよ。さて、この話は終わりよ。この事は他言無用でお願いするわ。」

余計な事まで話してしまったと思い、顔を少し赤く染めて無理やり話を終わらせる。そんな奏を見て文香は微笑みながら嬉しそうに言う。

「そうですね。2人の秘密って事ですね！」

「そうね。」

こうして2人は共通の秘密を持って互いに距離を縮めることに成功した。当麻はその部屋（優真の部屋）で気絶したまま起こされる事はなかった。

「やべえ……迷っちゃったよ。」

場面は変わり、優真はエミリアの部屋に向かうつもりが、現在、城の中庭に優真はいる。

「無駄に広いんだよ。1LDKくらいにしてくれよ。」

王城に対して意味も無い文句を言う優真。しばらくエミリアの部屋がどこにあるか考えていると、

「あ、《千里眼》使えばいいじゃん。異世界超便利で助かるわ。」

スキルの存在を忘れてたと言える発言をしながらも優真は《千里眼》を発動させる。

《千里眼》は自分から約10kmの範囲を見通すことが出来る。物や動物を特定することも出来る。人を特定することも出来るが、それには相当な訓練が必要である。それにも関わらず優真は、

「お、エミリア発見。少し遠いな……。」

既に人物を特定出来るようになっていてる。

エミリアの部屋に向かい、漸く辿り着いた優真がドアをノックする

と、ドアの向こうから『どうぞ。』と声が返ってくる。

「遅かったですね。何かありました?」

「迷子になったんだよ。」

「貴方も迷子になるんですね……。」

「俺だって人間だからな。迷子くらい珍しくもないだろう? スキルの存在を忘れてたつてのもあるけど。」

「やはりきつきのステータスは嘘でしたか……。」

「あの場でギャーギャー騒がれても困るだろ?」

「そうですね。他の3人も誤魔化していましたし。」

「そこまで気付いていて何故黙っていたんだ?」

「優真さんが何も言わなかったから、優真さんに考えがあると思っただけです。」

「随分と評価してくれてるみたいだが、何故そこまで俺に執着してるんだ?」

「……夢で見たんです。この世界を救ってくれる人の夢を……。その人の声が貴方と似ている……。いえ、同じなんです。」

「!?!」

優真は驚きを隠せなかった。それは優真も同じような夢を見たか

らだ。

(もし、エミリアの夢が本当なら、俺の夢である女の声が言っていたことは……。まさか!?)

「……優真さん？」

「……悪い、考え事をしていた。ちなみにその夢のやつは何を言っていたんだ？」

「その方は『俺は自分の為に動く。それで世界が救われると言うならそれはただの偶然だ。勝手に救われただけだ。』と言ってました。貴方らしい発言だと思うんですが？」

「……確かに、否定は出来ないな。」

優真は自分の為にしか動かないをモットーとしている。それは優真も自覚している。だから否定出来ずに、確信に近づく。

「……俺もな、ここに来る前に夢を見たんだよ。懇願するような女の子の声を。」

「!?それは……。」

「全くと言っていいほど、お前にそっくりな声だったんだよ。」

つまり、優真とエミリアはお互いに夢の中で声を聞いたことがある者同士。そして互いの声の主が今、目の前にいる。

「……こんな偶然があるんですね。」

「偶然かどうかは分からないが、滅多に経験できることじゃないな。」

「そうですね。……そろそろ本題に入らせてもらいますが、良いですか?」

「ああ……そういや色々と説明してくれって言ってたな。何が知りた
いんだ?」

「貴方達の本当のステータスが知りたいです。」

「俺のは構わないが、他のやつ情報を教えるつもりはない。しかし、
お前達にとって害では無いことは約束する。」

「……それで構いません。」

優真はエミリアに自身のステータスを包み隠さず全てを話した。
優真の話を聞いたエミリアはなんとも言えない表情になって固まっ
てしまっている。

「おーい、エミリア?」

「……ハッ!何を言われても驚かないつもりでしたが流石に無理があ
りましたね。何ですか。職業が魔神っておかしすぎます。意味分か
りません。」

「そんな罵倒されても俺にだってどうしようもないんだよ。だから落
ち着いてくれ。」

しばらくしてエミリアが落ち着いて、優真に気になることを聞く。

「優真さんはこれからどうするんですか?」

「どうするって?」

「その……魔王を倒すのは協力してくれるんですか?」

「当たり前だろ。個人的に魔王とかボコしてみたいし。」

「何でそんな呑気なんですか……。」

あまりにも淡々と告げる優真に気が抜けてしまうエミリア。しかし、その表情はとても嬉しそうな、安心したような表情をしている。

話が一通り終わり、優真は部屋を出ようとする。

「もう行かれるんですか?」

「そろそろ眠いんだよ。寝させてくれ。」

「はあく……。まあ聞きたい事は聞けたので良いでしょう。では——」

「あ、そうだ。」

何かを思いついたようにエミリアのセリフを遮る優真。

「?…どうかなさいました?」

「景気付けに夢の再現でもしとくか。」

「……………え？」

いきなり変な事を言い出した優真にエミリアは呆気にとられてしまふ。

「いや、優真さん？ 私達の見た夢ってそんな軽く出来るもんじゃありませんよね？」

「そりやそうだが、せっかく確認出来たんだから正夢にしよう。報酬と思ってくれよ。」

「……………分かりましたよ。では。」

エミリアは咳払いをし、懇願するような表情で優真に向かって夢でのセリフを言う。実を言うならエミリア自身も優真のセリフを聞きたいと思っていたので結構やる気だ。

「お願いです！世界を救って下さい！」

「ごめん。無理。」

スパン！

少し期待していた分、自分だけが真面目に言ってしまった事に恥ずかしくなるエミリアは行き場のない羞恥を優真にビンタし、部屋を追い出すという形で収めることになった。そして部屋を追い出された優真は『理不尽だ。』と呟きながら自分の部屋に戻るのであった。

く訓練ですく

「1日で色々ありすぎて疲れた……。」

転移して翌日の早朝、今日から訓練が始まるというのにも関わらず、本当に疲れたような表情で優真は言う。他の皆も疲れているだろうが、優真は転移した時に色々と頭を使ったので相当疲れているようだ。そして何かを思い出すように、

「もう零華が起こしに来る日が当分ないのか。」

窓から日が昇りかけている空の遠くを見つめて呟く。優真の元の世界に帰りたい理由は、妹に会って謝る為。ただそれだけである。唯一の家族の元に戻るといっただけなのだ。

「ま、出来るだけ早く帰らなきゃな。その為なら何だってやるつもりだし……。」

呑気な口調ではあるが優真の目には確かな決意が宿っていた。

コンコン

「白井です。優真くん、起きてる?。」

「白井さん?起きてるけど、どうかしたの?。」

「えっと、入ってもいい?。」

「どうぞ。」

「し、失礼します……。」

突然の声に冷静に返事する優真。扉が開くとそこには、白いローブを着た真央がいる。この姿を見れば10人中10人がとても似合っていると言えよう。

部屋に招くと、敬語を使い出す真央。何故そんなにかしこまってるのか不思議に思う優真だが、気にせずベッドに座らせて話を進める。ちなみに優真はベッドの近くの壁にもたれかかっている。

「こんな朝早くからどうしたの？」

「何ていうか、目が覚めちゃってお城の中ウロウロしてたんだけど、優真くんなら起きてるかもって……。迷惑だったかな？」

「そんなことは無いけど、よく起きてるって分かったね。」

「それはただの勘だよ。何となく、ここに来たら優真ちゃんと話せるかなって思って来たんだよ。」

「……そっか。」

楽しそうに微笑んで話す真央に若干見蕩れてしまい、思わず顔を逸らしてぶっきらぼうに返してしまう優真。

「あ、もしかして照れてる？」

「……んなわけないだろ。」

「そういうことにしといてあげるー！」

2人は顔を少し赤く染めたここに来る前の話などをする事になった。

しばらく色々と話（元の世界での事）をして完全ではないが、日も昇り始め、訓練の時間が迫って来る。

「そろそろ戻らないの？」

「あ、そうだね。……優真くん！」

それなりの大声で呼ばれた優真。優真が真央の方を見ると真剣な表情になった。

「……訓練も頑張って、絶対に、絶対に帰ろうね！」

「……それ死亡フラグにならなきゃいいね。」

「フラグは回収だけじゃないよ！へし折っちゃうこともあるんだよ！」

「チーム名決める時もそうだったけど、白井さんって結構そういう知識持ってるよね。」

真央の少し意外な部分を知った優真であった。

しばらくして真央が去った後、訓練所に向かう優真。今日から訓練が始まるため開放されるとエミリアから聞いていたので皆より早めに向かっている。

「あ……優真さん。」

「ん？遠山さんか。訓練の時間はまだだよ？」

「そうですけど……多分、優真さんと同じ理由です。」

「そうか。なら、とつとと済ましちやおうか。」

2人は自分のスキルの確認の為、皆より先に訓練所で試そうと思っているのだ。訓練所に着いて《気配察知》を発動して誰もいない事を確認する。

《気配察知》は自分以外の魔力を感知する事が可能。所持者の才能によつて察知する距離は変わる。現在の優真では、5km程度である。

《千里眼》と大して変わっていないじゃんと思う優真は、とりあえずそんな事は置いておくことにした。

「じゃあ、始めるか。まずは魔法使ってみるか。」

「はい！私達つて《無詠唱》持つてるんですよ。具体的にはどんな感じなんですか？」

「ちよつと待ってる。」

優真は《魔眼》を発動させて《無詠唱》の効果を見る。

《魔眼》は他人のステータスとスキルの効果を見る事が可能で《超隠蔽》も無効にする。さらに、《魔眼》を発動させていると自動的に身体強化、精神強化される。

《無詠唱》は魔法の詠唱を省略して魔法を発動する事が出来る。

説明を見た優真は、そのまま文香に教える。

「なるほど……。というか、優真さんの、その《魔眼》って便利ですね。スキルの説明書みたいな感じがします。」

「一気に《魔眼》が使えなさそうなものになった気がする……。」

すみませんと謝る文香に対して、気にするなど返す優真。気を取り直してその無詠唱を試すべく、文香は訓練所の真ん中に両手を向けて初級の聖魔法を放つ。

「《聖なる雨》^{ホーリーレイン}」

文香に緑色の雨が降り注ぎ、文香を包み込む。

「回復魔法の類か？」

「あ、これは状態異常を無効にするだけみたいです。《属性強化》もしてるんですけどね。」

「でも結構助かるよ。補助担当がないもんだと思っていたから。」

「……それ《魔法創造》^{マジッククリエイト}を持つてる人がいます？」

「創るのって結構面倒なんだよ。」

本当に1人で何でも出来てしまいそうな優真に文香はジト目で言う。それを面倒くさそうに答える優真。

切り替えて優真は自分のスキル確認をする。

「《煉獄炎》^{インフェルノ}《螺旋嵐》^{サイクロン}《雷電》^{サンダーボルト}《地盤崩壊》^{グラウンドクラッシュ}合成。発動……《天災》^{デイザスター}。」

優真は《合体魔法》^{ユニオンマジック}を発動させ、炎、嵐、雷、岩の魔法を合成し、自

然災害を連想させる《天災》ディザスターを放つ。

ドガアーン!!

轟音が響き、地面が揺れる。訓練所の中心は大きなクレーターが出来ている。しばらくして静まった訓練所で、

「な、なな、何てことしてるんですか！訓練所を壊す気ですか!？」

「……本当にすまん。ちよつと調子に乗った。」

「ちよつとどころじゃありませんよ！」

慌てて泣きそうな表情の文香が優真にお説教中。

「いやゝ試すつてなるとやっぱり派手にやりたくなるっていうか。」

「目立つのが嫌いな人の発言に聞こえませんか。」

「それを言われると痛いなく……。」

そんな話をしているとドタドタと何人かが走ってくる足音が聞こえてくる。

「な、何があったんです……か……。」

「おい！一体どうし……た……。」

「優真くん！大丈夫!？」

「何があったのよ……ってうわ……。」

上からエミリア、勇輝、真央、彩華の順で訓練所に出来たクレーターを見て唾然としている。真央に関しては優真の事を心配してるだけだが。遅れて他の皆も来て、色々と説明をしないといけないような状態になってしまう。

「これは……その、あれだ。あれがあれして——」

「……何の説明にもなってませんって。えつとですね……ま、魔法を試し打ちしたら魔力の制御に失敗しちゃいまして……。」

「……。」

優真の雑な説明をしつかりフォローする文香。エミリアは何となく分かったつと言ったような顔をしている。その顔には魔神ですからねと書いてあるようにも思える優真だった。

時は過ぎ、訓練の時間がやってきた。その後、何とか誤魔化しきつた優真と文香は、やつれた様な表情でいる。今はそれぞれグループに分かれているが、担当してくれる騎士は1人のようだ。その騎士は、

「何故貴様らのことを見なきゃならんのだ。」

「こつちとしても頼んだ覚えはないが仕方無いだろ。そういうお仕事なんだから。」

「はあく……。貴様の言うことは最もだがな。」

あの雑な扱いを受けるディーンが担当。落ち着いているのか昨日のような雰囲気はない。

「てつきり昨日のこと根に持つてると思っただけけれど、やけに落ち着いてるわね。」

「私とて騎士だ。確かに昨日は腹が立ったが、今日は訓練だ。私情で冷静さを欠けては示しがつかん。」

「その言葉矛盾してねえか？」

「それを言われると何とも言えん。貴様らには本当に悪いことをしてしまったな。それに思ったんだが、貴様らは相当な力を持っているよ。うだ。」

本当に昨日までの雰囲気とは全然違うディーンの最後の言葉に一瞬、文香と当麻がドキツとするが、すぐ落ち着きを取り戻す。

「とりあえず訓練を始めるか。まずは魔力の制御の方法を教える。まずは——」

ディーンの訓練はとても分かりやすく魔力の塊を形を保ったまま維持するだけだった。さらに、それぞれに的確なアドバイスを与えていく。そのおかげで優真達はかなりの速さでコツを掴んでいく。

「よし、やはり素質があるな。もう維持することが出来るとは。特に……確か黒神と言ったな。貴様は規格外だ。」

「その扱い酷くね？」

「褒めているんだ。初日でここまで出来るやつは見たことがない。」

そう言われた優真は周りを見渡す。

「うつ……！」

「すう……はあく……。」

「はああああ!!」

体力が持つてかれてるのか、険しい表情だったり、大袈裟に深呼吸してたり、叫んでいる者達がいた。出来ていると思われるのは優真達のグループと勇輝達のグループ。桜田先生のところは健と祥子が出来ていた。残りの2人も維持は出来なかったが、魔力の塊を出す事は出来ていた。

「次はスキルの使い方だ。勇者よ。試しに私と見本の為に戦ってみよう。エミリア様は開始の合図をお願いします。」

「ええ!?俺……ですか?……分かりました。よろしくお願いします!」

いきなりの指名に驚く勇輝だが、すぐに冷静になってディーンと向かい合って立つ。周りの皆は応援したり、黙って見たりしている。

「……では、始め!」

「はあああああ!」

叫びながら突っ込む勇輝。その動きに無駄はなく、ディーンに向かって剣を振るう。

キンツ！キンツ！キンツ！

「流石《天賦の才》を持つ者だな。おまけに《剣術》もあるおかげでいい太刀筋だ。このように自動的に発動されるスキルがある一方で……。」

勇輝の剣を防ぎながら説明するデインは一度距離をとって手を勇輝の方に向ける。

「貫け光よ《ライトニング光槍》。」

一直線の光が勇輝に襲いかかる。

「うおっ……！」

かろうじて避けた勇輝。しかし、光は勇輝の後ろの方にいた優真に向かっていく。

「優真くん！危ない！」

「……隔てよ《ウォール防壁》。」

真央が焦って叫ぶが優真は落ち着いて初級の無魔法《ウォール防壁》を詠唱する。

「このように魔法を詠唱したり、中にはスキルも声に出さなければ発動しないものもある。すまない黒神、よく防いでくれた。」

「いや、ここにいた俺が悪いから気にすんな。」

「昨日もだが、その冷静な思考、判断は結構なものだな。どうだ？ 見本としてではなく、私と模擬戦をやってみないか？」

「な……!? 流石に危険すぎるー！」

デインは優真に深く興味を持ったようでも模擬戦を申し込むが、桜田先生が止めようとする。その間にメンバーにアイコンタクトし、皆が頷くのを確認する。

「分かりました。俺はいいですよ。」

「黒神！ 流石にこれは——」

「遅かれ早かれ戦う日は来るんですよ？ なら、経験しといて損はありません。」

「しかしだな……。」

「素晴らしい返事だ。私もこんなに気持ちが高揚しているのは久しぶりだ。」

生徒の事を想う桜田先生に現実を知らせるように言葉を遮る優真。その返事にデイン満足したように言う。今の優真とデインは戦いを楽しもうとしている戦闘狂のような目をして笑っている。

「はあく……怪我だけはしないで下さいね。では、始めて下さい。」

開始の合図をエミリアがした瞬間、

(つまり俺、冒険者の設定で戦わないといけないのか。)

などと呑気なことを考えている優真だった。だが、気付いて欲しい。職業を冒険者として偽ってスキルを減らしたが、戦いに使えるスキルは《瞬間^{イグニッションブースト}加速》《並列思考^{マルチタスク}》《無魔法》である。

騎士vsチート冒険者（仮）の戦いが始まる。

く模擬戦ですく

始めの合図から互いに動かない優真とディーン。ディーンは剣を構えているが、優真は片手で髪を掻き、剣を持った手はだらんと下げている。

(構えを取ってるわけではないのに、隙が全く見えないだと……。本当に楽しませてくれそうだな。)

(流れで受けちまったよ……。めんどくせえ……。)

そしてお互い思ってることもバラバラなようだ。しかし、優真に隙が無いのは確かなのだ。何もしてない。だが、自分から仕掛けに行ったらやられる。ディーンの本能がそう告げた。

(本当に何者なんだ……。いくら選ばれた者とは言え、こんな普通では考えられないぞ……。)

ディーンは冷や汗を流す。少なくとも、ついこの間までただの一般人だった者とは思えない。

「おーい。動かないのか？ んじゃ俺から行くぞ？」

優真が言葉を発したのと同時に、優真の姿が消えたと思ったら、突然ディーン目の目の前に現れる。正確には《瞬間加速^{イグニッションブースト}》を使ってディーン目の前に移動しただけである。

ガキンッ！

「……流石に反応出来るか。」

「これでも騎士の長をやってるからな。随分と戦い慣れてるように見えるんだが？」

「騎士団長だったのかよ。別にこれは見よう見まねってやつだよ。まあ人より警戒心はある方だと思っけど。」

「観察だけでその動きか……。本当に面白い。」

キンツ！キンツ！ガキンツ！

2人の剣による激しい攻防は周りの皆を唾然とさせる。いや、どちらかと言うと魅せられている。2人の凄まじい戦闘を見せられ、本能的に闘争心が昂っている。気付けば歓声もあがっている。

「優真くん！頑張って！」

「いけ！優真！負けるな！」

特に真央と当麻の声はよく聞こえる。

「思ったんだが、あの女……。白井と言ったな。お前とは特別な関係なのか？見る限り相当仲良く見えるが。」

「今、そういう事聞くか？特に何も無いが何の関係があるんだ？」

「はあく……。これは苦労するだろうな……。」

「？」

何を言ってるのか分からないと言った表情の優真に呆れるディーン。会話を交わしながらも競り合ってる2人は一度距離を取り、

デインは手を優真に向け詠唱する。

「貫け光よ《ライトニング光槍》。」

「隔てよ《ウォール防壁》。」

優真は片手を前に出し光を防ぐ。しかし、先程とは威力が違うのか《ウォール防壁》にヒビが入る。

「さっきのは加減したが、今回は少し力を上げさせてもらったぞ。」

「……隔てよ《ウォール防壁》。」

「なっ……!? 同時だど!?」

《ウォール防壁》を破られた優真はもう片方の手でもう一度《ウォール防壁》を詠唱する。

「やっぱり同時ってのは難しいのか？」

「……。」

デインは言葉が出ない。ただ者ではないと思っていたが、ここま
で出来るとなると恐怖すら覚えてしまうほどだ。1日も経つてない
のに、ここまで力を使いこなしているのだから恐怖を覚えるのは当然
と言えば当然なのだが……。しかし、同時にデインは楽しくもなっ
ていた。これほどの逸材が目の前にいる。戦っている。その事実を、
嬉しさを噛み締める。

「ハハハハ！ 本当に面白いな、黒神！」

「薄々思ってたけど、お前、戦闘狂か何か？」

「強いやつと戦えることは嬉しく思うな。」

「うわあ〜……。大変なのに巻き込まれてたのか俺は……。」

「まあそう言うな。……そろそろ中級魔法も使おうか。」

「初心者に酷くね？」

「貴様を初心者扱いしたら他は一体どうなるんだよ。」

周りの皆も頷いている。どうやら興奮が少し冷めて状況を把握したようだ。

「世の中が俺に冷たいです……。」

「優真くん！私が温めてあげるよ！」

「ああ、うん……。冗談だから。」

「え!?あ、えと……。うう……。」

((可愛いなおい))

「……………ふふっ…………。」

「…………。」

ボソツと呟いた優真の声を聞きとった真央が返事をするが優真の指摘に恥ずかしくなり、さらに、こんな大勢の前でとんでもない事を

言ったと自覚し、顔を赤くして縮こまってしまった。その姿に男女共に同じ感想を抱いた。奏は終始声を殺して笑っていた。それに気付いた優真は睨みつけるだけ。

「そろそろ行くぞ。」

「ああ、ごめん。……そうだ。次にどちらかが一撃を決めたら勝ちで終わらせないか？」

「?構わないが、どういうつもりだ？」

「いや、この後だって訓練はするだろ?だったら長い時間やってるのも良くない。」

「確かにそうだな。では、次の一撃で決めてやる。」

そう言うときティーンは剣を優真に向けながら詠唱する。

「光よ、汝に裁きを《ソードバスター光劍銃》!」

剣の先から出てきた光線が優真に襲いかかる。その大きさは優真を完全に飲み込んでしまうほどだった。

「「黒神／優真(くん)(さん)!」」

さつきまでとは違う迫力のある魔法に奏以外が声を上げる。奏は何をするのか楽しむような目で見ている。

「……無能共、せめて盾として役に立て
無き力よ、主を守る壁となれ《ランパート城壁》」

「……中級魔法やオリジナル詠唱まで使うのか……。」

《防壁》^{ウォール}の中級バージョンである《城壁》^{ランバート}をオリジナル詠唱で発動した優真にディーンは何もかも諦めたような表情になる。

「オリジナル詠唱に関しては、そんな難しいもんじゃないだろ？魔法は基本イメージなんだから、それを崩さなきゃ良いだけだ。中級魔法に関しては出来ちゃったとしか言えないんだが。」

「……。とは言え、いつそんな知識を、オリジナル詠唱を身に付けた。」

「それは一か八かだったが、元の世界のおとぎ話でそんな話を聞いたことがあっただけだよ。」

（所謂アニメやゲーム、マンガだけど……。）

「そんな危険な真似をしたのか？何も確信してなかったのに？」

「選ばれた者には、そういう補正があってもいいと思ったから。」

「……。」

激しい戦いの中、優真の思考はとても呑気なものだった。というよりは、余裕のある戦いだった。

「そもそも同時に魔法を使ったのも《並列思考》^{マルチタスク}のおかげだと思うし。」

「なるほどな……。上手くスキルと魔法を連携させていたのか。」

「そういう事だね。常時発動みたいだし。」

「……完全に負けだ。これ以上続けても私の負けになるだろう。」

「デイーンが降参をしたことにより、勝者、黒神優真。」

エミリアが勝敗の判決を下すと、『うおおおお!!』『すげー!騎士に勝った!』『デイーン様が負けた?』などの声が訓練所に響く。いつの間にか他の騎士も集まって観戦していたようだ。そんな騒ぎの中、優真は静かに自分のチームメイトの近くに戻る。

「よう!お疲れ!」

「お疲れ様です!優真さん!」

「お疲れ様、黒神くん。」

「おう。とても疲れた。受けなきや良かったぜ……。」

そんな優真の発言に笑う3人。優真達が話していると、勇輝達が来る。

「優真くん!凄かったね!」

「ホントね。あそこまで出来るなんて驚いたわよ。」

「……やっぱり何でも出来るんだな、黒神。」

「流石だな。優真。」

「三石川/康太(くん)いた(の)(んだ)?」

「お前ら!流石に泣くぞ!」

優真に話しかける勇輝達。勇輝は一瞬悔しがるような表情をする

が直ぐに元の表情に戻す。康太は久しぶりの登場でお約束の弄られ方をして泣きギレする。

しばらく騒いだ後、これから始まる訓練に気合を入れ直す勇輝達。一方、優真達は……。

「俺もうよくね？充分動いたって。これ以上動くならバイト代を請求する。」

「本当に将来、駄目人間になりそうね。」

「あはは……。」

「こいつにはもう何言ってもダメだろうな。」

「お前らリーダーなんだと思ってやがる。」

「黒神くん（優真さん）（優真）じゃない人。」

「じゃあ何で俺をリーダーにしたんだよ……。」

「いざという時は頼れ（る）（ます）。」「」

「……あっそ。」

落としてから上げられる優真は照れてしまい、素っ気なく返す。

《ALL JOKER》はいつも通り呑気なものだった。

「1週間です」

あれから数日が経ち、訓練が終わった後、それぞれのグループに1週間の自由行動が与えられた。デリアル王国の城下町を堪能しようとしたり、ひたすら作戦を練ったりと色々なグループがいる。桜田先生のチーム《魔物倒し隊》は騎士達と見回りついでに魔物を倒しに行っている。前までの皆からは想像が出来ないくらいやる気があるようだ。今は自由行動が与えられてから3日目。その頃、勇輝達は……。

「皆、やる気が出てきてるみたいだな。」

「そうね。前までの光景が嘘みたい。とか言う私達も結構変わったと思うわよ?」

「そうだな……。だけど……。」

「……。」

皆の成長を喜んでいながらも、どこか暗い空気だった。特に真央からはいつもの穏やかな雰囲気はなく、今までに見たことないくらい位に、想像出来ない位に落ち込んでいる様子が伺える。

「……真央、大丈夫よ。彼が理由なくいなくなると思う?」

「でも……。」

「確かに。あいつは必ず為になる事しかないから、気にしない方がいい。」

「大丈夫だ。もし黒神の奴が戻らなくても俺が守って——」

「……黙って。」

理由は優真の突然の行方不明。優真だけでなく、奏や当麻、文香も同様である。桜田先生の《千里眼》でも見つけることは出来なかった。最初は優真達の突然の行方不明をエミリアが報告した時は皆も驚いていたが、時間が経つに連れて自分達でも出来ることをやろうと気持ちを切り替えることが出来た。しかし、勇輝達にとって（勇輝は例外だが）、特に真央にとっては優真達はかなり大きな存在だったようだ。

——3日前——

訓練が終わり自由行動を言い渡された後、優真達はエミリアの元に向かう。

「エミリア。少し言っておきたいことがある。」

「何でしょうか？」

「俺達は自由行動の1週間で力を使いこなせるようにしたい。だから色んな所に行こうと思ってる。基本、山とかに籠ると思うが。」

「色んな所……ですか。」

「あまり危険な所には行かないわよ。」

「ああ。死にたくはないしな。」

「そ、そうですね。死んだら元もこうもありませんからね。」

優真達はそれぞれ自分に合った場所で訓練しようとしている。優真は自分の力を試すには街や王城では充分に発揮できないだろうし、奏は魔物使いで魔物と会わなければ意味がない。当麻や文香も自分の力がどこまで通じるのか知りたいという。

「何故それをわざわざ私に伝えに来たんですか？」

「エミリアは姫であって俺達に協力的だからな。だから1つ頼まれて欲しい。」

「どのような事ですか？」

「簡単だよ。俺達の行動を隠蔽してくれ。行方不明とか何でもいいから。余計な詮索されるのは好きじゃないんだよ。面倒だし……。」

最後の本音がとても優真らしい。だが、言ってる事はいたって真面目なのだ。自分は魔神で規格外である為にあまり周囲には知られたくないのだ。

「……分かりました。ですが、条件があります。」

「何だ？」

「……絶対に帰ってきて下さいね。」

「さっきも言ったが死んだら意味無いって……。まあ分かった。絶対に帰って来るから。」

あまりにも当たり前の条件を言われた優真は面倒そうに応えるが、最後には微笑んでエミリアに宣言をする。

「……その笑顔は反則です。」

「どうしたんだよ？ 顔赤いぞ。」

「「ギルティね（だな）（です）」」

「何でいきなり有罪判決を下すんだよ……。ていうか、お前らよくハモるよな。」

そんなやり取りを最後に優真達はそれぞれ目的地に向かって行った。

自由行動からちようど1週間が経った。今は皆、訓練を受けている。選ばれた者と言うだけあって皆の成長は速かった。特に勇輝達の成長速度はとても早かった。

勇輝は手加減はあるもののデインと張り合えるようになり、真央は表情が優れてなく、落ち込んだ様子だが、《回復魔法》の回復量が上がっている。彩華は《剣術》のレベルが格段に上がっていて、光魔法の扱いにも慣れてきている。

そして、桜田先生のチームも最初とは比べ物にならないくらい成長している。

桜田先生は《千里眼》で人を特定できるようになり、祥子は下位互換の精霊と契約することが出来た。征志郎も《武器創造》ウェポンクリエイトの生成速度

が速くなり、それなりの強度を持つ武器を作れるようになっていく。その中で最も異常な成長を見せたのは康太と健だった。

「……………
《闇弾》」

康太はまだ使えるのは初級魔法だけだが、《無詠唱》のスキルを得ていた。新しいスキルを得るには《能力教授》スキルティーチャーというスキルを持つ唯一の人物、ログレスという男の元に行かなければならない。しかし、ログレスの居場所は分からず、そもそも生きているのかも分からない。エミリアとディーンはそんな状況でどうやってスキルを得たか聞かぬが、『気付いたら使えるようになっていた。』と言うだけである。

一方、健の方はというと……………

「な……………!?どこに行った!?!」

「慌てるな!しっかりと狙い定め——」

「そんな余裕ありますか?」

騎士の2人を相手に手も足も出させずに、喉と心臓部分に指を当てる。《気配遮断》と《暗殺術》、さらに康太と同様で、いつの間にか《隠密》のスキルを手に入れていた。それらを利用し、気付かれずに近づいて殺す。まさに暗殺者の技である。

「……………ここまで出来るのか……………」

「まあ皆さんに付いて行って実戦もしたので、慣れてきただけです。まだまだ上を目指さなければなりませんよ。」

笑いながら上を目指すと言った健に騎士達は満足したかのように頷く。そして、また訓練を再開し、確実に技に磨きをかける。そんな

中で訓練の様子を静かに見ていたエミリアは不安な表情をして呟く。

「優真さん……。『絶対に帰って来る』って言ったじゃないですか……。」

自分勝手な部分が多いがやるべき事はやって、自分の意思を曲げず、結局は仲間のことを大切にしている少年の言葉がエミリアの頭から離れず、繰り返されている分、余計に悲しそうになる。その時だった。

ズドーン!!

外から大きな音がした。そして音は続き、城全体に振動が伝わってきた。訓練所にいた皆は何事かと思っっていると……。

「た、大変です!!」

「何があった!?!」

駆けてきたのか、慌てた様子で息を切らしながら見張りの兵がデインに説明する。

「ま、魔族が、魔族が攻めてきました!!」

「な……。!?!」

「!?!?!」

見張りの兵の発言にデインだけでなく他の皆も驚愕してしまう。皆が慌てて外に出て様子を見る。

「なん……。だと……。」

「ウソ……。」

誰が発した声かは分からなかった。だが、皆は同じことを思っただろう。皆の目の前に広がっている光景は前の世界では見ることもなかった。いや、見る事が出来なかった。

「グルルル!!」

「ギャオオオ!!」

「フフフ……。さあ、お前達！勇者共を、人間共を殺せ！」

それは魔物達を引き連れた魔族の大軍がデリアル王国の城下町を襲って、賑やかだった町並みを火の海へと変えていた。

く魔族の襲撃ですく

「まさか……本当に魔族が……。」

エミリアが信じられないと言った表情で呟く。これまでも魔族が襲撃してきた事はあったが、今回は明らかに量が違い過ぎる。それに勇者の召喚があつてまだ1週間という時間で攻めてくるとは思っていなかったのだ。

「勇者の召喚があつても元々は一般人。訓練も満足に出来てない頃合いを狙ってきたんだろう。……迂闊だった！」

デインは今回の襲撃を推測して対策できなかった自分に悔しがるが、そんな暇はないとすぐに切り替え皆に伝える。

「よく聞け！これは訓練ではなく本当の戦いだ！生と死が関わってる戦いだ！貴様らは選ばれた以上戦うことが優先される！しかし、今回はあまりにも無理がある！戦う意志のある者は力を貸して欲しい。それが無いなら生き延びることだけを考えるんだ！」

デインの言葉に皆は俯いて黙ってしまふ。その沈黙を破つたのは勇輝だった。

「俺は、この世界を救うために呼ばれたんだ……。だから戦う！勇者として！」

その言葉に皆は顔を上げて勇輝を見る。そのまま勇輝は続ける。

「俺は仲間を守る為に、世界を救う為に、その為に俺は戦う！皆もきつと同じ気持ちだと思ふ！そして、俺達は選ばれたんだ！」

そう言う勇輝に『そうだ！』や『今までとは違う！』と士気が上がるように次々と声上がる。

「……すまない。ホントにすまない。」

「謝罪は後にしてください。そろそろ来ます。」

謝るディーンにスツと近付く健。そして、魔族達がこっちに向かってくる事を伝える。一般人は兵士達が避難させているというのが状況を見る限り確実に助かっているとは言い難い。だが、心配してる暇はない。

「……ッ！来るぞ！防御魔法だ！」

ディーンという言葉と共に魔獣達が放った炎の球がこちらに向かってくる。その言葉に反応した康太と征志郎と祥子を筆頭に数人が防御を貼る。

「ブラックホール闇渦！」

「隔てる土よクレイウォール《土壁》！」

「お願い！私達を守って！土精霊《ドーラ》！」

ズズズズ！ドゴン！

康太はあらゆる物を吸い込むブラックホール《闇渦》を防御代わりにして、土属性を持つ者が壁を作る。祥子も精霊の力を借りて応戦する。

「聖なる力よ、裁く力となれ！ホーリープラスター《聖光波動》！」

「光よ、汝に裁きを！ 《光劍銃》！」

「無の波よ！ 《衝撃》！」

防いだ後、勇輝やティーン、桜田先生が欠かさずに攻撃を仕掛ける。

「グガアアア!!」

「よし！効いてる！」

攻撃が通じると分かって喜んだ勇輝。正確に言うなら喜んでしまった。油断した勇輝に黒い槍をもった魔族がいた。

「お前が勇者か。ふむ、どうやら今来て正解だったようだな。」

「お前は何が言いたい？」

「俺はグラン。まあそれなりに高い地位で、多少心が読めるんだが、お前はこの場にはいない誰かに対して憎しみ……いや、嫉妬をしているな？」

「!？」

「凶星か……。勇者が嫉妬する程の奴、一度会ってみたいものだな。」

「……俺が何に嫉妬してるって言うんだ。」

「さあ？そこまでは分からないな。力か才能か、いや、勇者ならそんなのは妬まないか。もしかして女か？」

「……ッ！黙れ！」

グランの言った言葉に明らかに動揺してしまう勇輝。そして更に挑発するように勇輝に問いかける。

「おいおい、マジかよ！ハハッ！こいつは面白い。それに凄く扱いやすいな！」

「黙れ、黙れ！」

冷静さを失った勇輝はグランに切りかかる。しかし、グランはそれを楽しそうに笑いながら避けている。

「感情に飲まれた人間は弱い。勇者がそんなんでいいのか？」

カキン！グサツ！

グランは黒い槍で勇輝に反撃する。それを剣で防ぐ勇輝だが、力の差と経験の差でその剣を弾かれてしまい、槍が勇輝の肩を貫く。

「うわああああ!!」

「痛いか？苦しいか？だが安心しろ。すぐに息の根を止めてやる。」

そう言つて槍を振り上げ、勇輝の心臓部分を狙い貫こうとする。

「ダークブレット・セカンド闇弾・Ⅱ！」

「貫け光よ！ライトニング《光槍》！」

「勇輝くん！神よ、汝にさらなる癒しを《ハイヒール超回復》。」

しかし、それは康太と彩華の技によって防がれ、真央が勇輝の傷を手当てしている。

「ほう……仲間も随分と強そうな奴がいるな。だが、こっちだけを心配してていいのか？」

「何を言っ——」

「いやああああ!!」

「た、助けてくれええええ!」

勇輝達と離れていた他の生徒達はハンマーを持つ魔族に襲われていた。その光景を見た勇輝達は急いでそっちの方に行こうとする。

「行かせると思うか？」

しかし、グランが立ち塞がり勇輝達を足止めする。

「どけええええ!」

「闇よ、拘束せよ シャドールバインド 《影 縄》。」

「くっ! 離せ!」

グランの影が縄状に伸びて勇輝達を拘束する。ディーンもそれに気付いたようだが、大量の魔物によって行く手を阻む。その間にハンマーの魔族に襲われていた他の生徒達が殺されていく。

「や、やめ——」

グシャ!

生々しい音と共に命が消えていく。次々と命が消えていく。戦う力のないエミリアは今までの光景を見て絶望に染まった表情になる。

「ハハハ！実に良い気分だ！こうして勇者の召喚と完全に覚醒してない時期を狙うことが出来る日が来るとはな！」

今回は運が悪かった。そうとしか言えないのだ。今回の戦いには魔族側に頭の優れた者が居たのか、時期を考えて狙いを早める事だった。完全な油断。勇者を召喚出来た安心感。勇者達を召喚した後の様々な出来事、これからという時に襲われてしまった。外と連絡を取ろうとするも、結界が貼られていて既に遅かった。そんな自分の愚かさを呪ったエミリアだった。

「さてと……。そろそろお前らも終わりにしてやるか。向こうも終わりそうだしな。」

グランが向こうと言って目線をハンマーの魔族の方に向ける。そこにはまともに動けそうにない桜田先生、祥子、征志郎、そして辛うじて立っている健だけが残っていた。40人いたメンバーが今では8人にまで減らされてしまった。

「んじゃまずは……。そこの回復使いで良いか。」

「な!?やめろ!!」

最初に死刑宣告を言い渡されたのは真央だった。槍を首に突きつけられ真央は怯えるが、心の中であの少年の事を思っていた。

(私……。ここで死んじゃうのかな……。)

グランはその槍を振り上げる。勇輝達は必死に声を荒げている。しかし、真央の心はそこにはない。

面倒くさがりで鈍感。見た感じ良くも悪くもない容姿でどこか暗い雰囲気、寂しそうな雰囲気を纏った少年。

(せめて……伝えたかったなくこの思い……。)

そのせいで一人であることが多く、周りとの関係もあまりないと思っていた少年。そんな少年のことを想い続けて、つい涙を零し、言葉にして呟いた。

(ごめんね……。)「大好き、だよ……。」

真央の、彼女の想いは……

キュイーン!

そんな甲高い音と共に結界が破れ、4人の少年少女が現れる。

「久しぶりだな、お前ら。それと白井さん、その言葉はまた後で聞かせ

て欲しいな。」

そこには1週間前の姿とは離れていたが真央には分かった。漆黒の髪、冷たい瞳、怠そうな姿勢な少年。特にその少年にはすぐに気付いた。

「優真くん……。」

真央の想いは、その少年——黒神優真にしつかりと届いていた。

「さあ、覚悟は出来てるんだな？ 魔族風情が……。」

そしてグレン^{魔族}達は優真^{魔神}の逆鱗に触れてしまっていた。

く魔神達の力ですく

結界を破られたことに驚くグラン。だが、それ以上に恐怖している。

黒髪のツンツンヘアでTシャツに学ランと言う普通の格好の当麻。

羽根付きのハットを被り、マント付きの服を着て腰に剣を差していて、まさに魔法戦士と言った格好の文香。

黒のアンダーウェアにベージュ系のポンチョとシヨートパンツで、セミロングの黒髪を靡かせている奏。

黒いコートに身を包み、漆黒の髪に冷たい瞳、怠そうな姿勢をした優真。

結界を破ると共に現れた4人に対して恐怖をしている。特に優真に対しては驚愕している。グランは少しだが、心が読める。他の3人からは少なからずとも、魔族に対する怒りや、町の被害を見て酷いと思っていた。しかし、優真からは何も感じられない。だからこそ驚いている。本当に人間なのか、人としての心があるのか。

「とりあえず、その拘束を解いてもらおうぞ。」

そう言って優真は《瞬間加速^{イグニッションブースト}》でグランに近付き殴り飛ばす。魔法を維持出来なくなったのか、勇輝達を拘束してた《影^{シャドウ} 縄^{バインド}》が解ける。そして優真は勇輝達に話しかける。

「お前ら大丈夫か？」

「……。」

「だ、大丈夫よ。」

「助かったぜ、優真。」

勇輝は目の前で起きた出来事に呆然とし、彩華と康太は助かった事に安堵する。

「優真くん！」

「おっと……もう大丈夫だよ。」

そんな中で真央は優真に強く抱き着く。そして優真は優しく受け止める。子供をあやすように優しく頭を撫でながら。安心したのか、真央からはさつきと違った涙が零れる。

「うう……優真、くん。」

「遅れてごめん。怖かったよね。」

「うん……。すごく怖かった。ここで死んじゃうじゃないかって、もう……会えなくなるんじゃないかって……。」

「ホントにごめん。」

「うん。また、助けてもらっちゃったね。」

「また？」

「そうだよ。この世界ここのに来る前にも助けてもらったことあるんだよ？ 優真くんは覚えてないみたいだけど。」

「そっか……。ま、その話は後にしよう。」

「あ……。」

少し話をし過ぎたと思い、優真は真央からは離れるが、真央は寂しげな表情で残念そうな声を漏らす。そんな真央に優しく微笑みを返す優真。そして吹き飛んだグランの方に顔を向け真剣な表情に変える。

「松下は先生達の方に。月宮と遠山さんは魔物共を潰してきてくれ。」

「了解。」

優真の指示に奏達は従い、それぞれ移動する。そして優真はグランの方へと向かう。その途中でエミリアに声をかける。

「エミリア……遅れて悪かったな。落とし前はつけるつもりだ。だから説教は後にしてくれ。白井さん達に説明よろしく。」

「……分かりました。後で理由を教えてくださいますからね。」

エミリアがそう言った後、優真はグランの方に向かって行った。見送ったエミリアは勇輝達に話しかける。

「みなさん、大丈夫ですか？」

「ああ。それより黒神は大丈夫なのか？」

「ええ、問題ありません。」

「何故そんなに言い切れるのよ。」

エミリアの発言に勇輝達は不満を感じるが、エミリアは優真の行った方向を見て、優しい表情で言った。

「だって彼は……この世界を救う魔神ですから。」

優真の指示に従い、魔獣を倒しに行った奏と文香。向かってる最中に、若干ボロボロになりながらも耐えているデインと遭遇する。そしてデインに襲いかかろうとしている魔物の群れに文香が魔法を放つ。

「《ロンギヌス聖槍》！」

ズドーン!!

巨大な槍のような形をした光が魔獣達を一瞬で消し去っていく。目の前で起きた事にデインも驚いて目を丸くしてしまう。

「え、えと……だ、大丈夫、ですか？」

「あ、ああ。助かった。しかし、今のは一体な——」

「話は後にももらえるかしら？今は敵を片付けるのが先でしょ？」

「あ……す、すみません！」

「別に怒ってるわけでは無いのだけれど……。」

ディーンの話遮る奏に焦って謝る文香。ディーンは納得したのかすぐに切り替えて、再び魔獣達と戦おうとするがふらついてしまう。

「あまり無理はしない方がいいわ。貴方が思ってるより相当なダメージがあると思う。」

「ここは私達に任せて下さい！」

そう言っただけで奏達はディーンが何かを言う前に魔物の群れに飛び込んで行く。

「じゃあ実験台になってもらおうかしら。《召喚・人狼》サモン ウルフマン《機械人形》マシンドール。」

奏がそう言うと2つの魔法陣から二足歩行の狼と表情の無い機械的な女の子が現れる。そして召喚された2体は人間の言葉で話し出す。

「ウオーン！御用でしょうか、お嬢様。」

「オ呼びデシヨウカ、マスター。」

「呼び方は後で話すとして……とりあえず、敵と思われる魔物達を蹴散らしてもらえるかしら？」

「了解です（デス）。」

奏の《強制契約》によって契約された魔物は契約した主人の言うことは絶対になっている。

「アオオーン!!」

人狼は自慢のスピードと鋭利な爪で魔物達の弱点を狙っていき、次々と倒していく。

「排除シマス。」

機械人形は足元から放出されるエネルギーを利用して飛び回り、腕を銃にしたり、剣にしたりなど武装を変えながら魔物を排除していく。

「そろそろ私も行こうかしら。《融合・雪狐》。」

《融合》によって雪狐スノーフォックスという氷属性の技を使う魔物と融合した奏。狐の耳と尻尾が生えて、とても可愛らしい格好になっているが、発揮される力は恐ろしい。

「……《雪月花》!」

奏を中心に氷が咲いた花のように広がっていく。その氷に巻き込まれた魔物は一瞬で凍りついた。そして凍った魔物達をすぐに砕く。

「迅速に片付けてあげるわ。その短い命で足掻き続けなさい。」

不敵な笑みを浮かべて《威圧》を放ちながら言った奏に魔物達はこれ以上でない悪寒を感じた。ここからは一方的な蹂躪だと、その身に知らしめさせてやると、氷のように冷たく鋭い瞳が伝えている。

「やあああああー！」

その頃、文香は少し離れた場所で魔獣達に剣を振り、戦っていた。普段は引つ込み思案な所がある文香だが、そんな風には思わせない程の戦いぶりだ。さらに文香は全属性の魔法を使えるまでに成長している。

「《付与魔法・《炎》《雷》》。」

そして剣に《付与魔法》を発動し、炎と雷を纏わせる。その間にも魔物達が襲ってくるが文香の魔法の発現速度には敵わない。

「《雷炎斬》！」

纏った魔法をそのまま斬撃として飛ばし、魔物達を消し炭にしている。文香の剣術の才能はディーンや勇輝に劣らず素晴らしいものであつて魔物を次々と斬っていく。戦っていてテンションがおかしくなったのか、普段の文香からは考えられない言葉が発せられる。

「まだまだだー！これからが本当の戦いだぞゲタモノ共おおおお!!」

そう言いながら、あらゆる魔法を剣に纏ったり、魔力弾を放つたりする文香。この光景を見たディーンはこう思った……。

(この子こんな感じじゃなかったよね!?)

少し時は戻り、桜田先生達の方では魔族に追い詰められ、魔族が健に向かつてハンマーを振り下ろそうとした時。

「させるかあああああ！」

ズガアーン!!

叫び声と共に飛んできた当麻は《身体強化》をして魔族を殴り飛ばす。ハンマーを持った魔族はそれなりの巨体だったが、それを容易く吹き飛ばす当麻に桜田先生達は呆然とする。

「お前ら大丈夫か？」

「……ええ。すみません、手を煩わせてしまいました。」

「気にすんなよ。優真リーダーの指示に従ったまでだ。だから礼と謝罪ならそっちに言ってくれ。」

「……君は松下か。あいつを、倒せるのか？」

「殺らなきゃ殺られるんですよ？なら殺るしかないでしょう？」

健と桜田先生と少し話を交わした当麻はそう言い残してすぐに吹き飛ばした魔族の方に向かう。民家か何かにぶつかり、瓦礫に埋もれたハンマーの魔族がゆっくりと起き上がり片言で話し出す。

「オマエ。イジヨウ。ナニモノ？」

「松下当麻。ただの高校生だよ！」

そう言いながら魔族に素早く懐に入り、アツパーを繰り出す。魔族はハンマーで防御をしたが、そのハンマーごと破壊され、宙に浮く。そして浮いたところを追いかけるように跳躍し、

「おらっ！」

「グギギ……!!」

一回転して踵落としを決める。見事に決められた魔族の方は呻き声の様なものをあげて地面に激突する。少し遅れて降り立った当麻は《覇気》を発動させると同時に、新しい力を使い始める。

「さっさと決着をつけさせてもらうぞ。《龍の力》！」

そう言うのと当麻に龍の鱗の様な紋章が顔の左半分に浮き出してくる。そして左眼は龍の瞳と言える程の力を持っている。ふらふらと立ち上がる魔族に対して当麻は冷たく、静かな怒りを乗せて言い放つ。

「さて、遺言はねえよな？速攻で終わらせてやるよ……。《龍の息吹》！」

（コイツ。イジヨウ。チガウ。モット。ベツノモノ……。シツパイ。）

当麻は口に覇気と魔力を溜め込み、一気に解放する。その姿は龍そのものを連想させる。

ハンマーの魔族は後悔した。自分がやったことの愚かさに。人間側に勇者以上の逸材がいる事に気付けなかったことに。そして目の前の少年に手も足も出なかったことに。

その頃、優真とグランの戦いは一方的なものだった。グランは決して弱い訳では無い。寧ろ強い部類に入る程の力の持ち主だ。だが、それを嘲笑う様にグランの攻撃を避けたり、無力化したりと体力的に、精神的に追い詰めていく。

「はあ……はあ……。お前、マジで何者だよ……。」

「だから俺にダメージを与えたら教えてやるって言ってるだろう？」

グランは吹き飛ばされてから油断や加減などは一切していない。それでも優真にとつて、これはゲームに過ぎない。ダメージを与えることが出来れば報酬を与える。そんな感覚で戦^{遊んで}っているに過ぎないのだ。

「まあ面倒になってきたし、そろそろ終わらせるか。答えとしては俺は人間でありながら魔神だ。」

「な……!?!」

「やっぱり驚くよなく。俺も最初は驚いたし……。ま、そんな事はどうでもいいんだ。」

グランは優真の言葉に驚いた。人間族でありながら魔^{こっ}族^ち側で最強に位置する存在の称号を、職業を持っているなんて誰が想像出来たか……。

「じゃあ答えも聞いたし満足だよな？」

そう言いながら《覇気》や《威圧》、強化系のスキルを発動させてグランに恐怖を刻む。死に対する恐怖を。

グランの方は、これを受けた者は優真の言葉を納得せざるを得なかっただろう。

(これが魔神の力……か……。)

「感心してるところ悪いが、さよならだ。《銃形態・消去弾》。」
バレットタイプ・デリート

そうやって《空間魔法》で作った《空間倉庫》キャビネットから銃を取り出し、グランに向けて引き金を引く。銃弾が当たるとグランは糸の切れた操り人形のように動かなくなり、段々とその存在が消えていく。その様子を疲れた表情で見つめる優真。

「さてと、そろそろ他も終わってるだろ。まったく、何て説明しようかな……このステータス……。」

そんな事を呟きながら優真はエミリア達の元へと戻って行った。

く隠れた努力ですく

それぞれの戦いを終えた優真達はエミリア達の元に戻り、デリアル王国に起きた悲劇を静かに聞いていた。生き残った町の人達は城の方で一時的に預かっけていて、デイーンを除いた騎士達が対応している。桜田先生達は真央の治療能力を受けながらエミリアと共に優真達に今回の魔族の襲撃について話している。

「本当にすまない！こんな事、予測出来たはずなのに……。」

デイーンは対処できなかった訳では無いと思い、酷く後悔している。デイーンの言う通り今回の襲撃は初めてだったかもしれないが、対処出来ない事では無かった。完全な隙を突かれたのだ。そんなデイーンの発言に皆は顔を俯かせたり、悔しい表情になったりする。しかし、優真と奏はその重々しい空気を打ち消すような発言をする。

「今更、後悔したって遅いだろう。」

「そうね。例えどんな理由があっても過去の事はどうにもならないものね。」

ただし、その発言は良いものとは言えなかった。優真と奏の言葉に目を見開くのはエミリア、デイーン、健以外の人達だ。確かに過去の事はどうにも出来ない事はみんな分かっていたが、この場においてその発言は酷な物だった。それに何を思ったのか征志郎と桜田先生が言う。

「いくらなんでも言い過ぎじゃないか？」

「そうだ。彼だって必死に——」

「ていうか、後悔も何も無いんじゃないか？」

桜田先生の言葉を遮るように当麻が言う。

「そ、そうです、ね。これは私達の推測になりますが、その……ディーンさんは、逃げたい奴は逃げろって忠告くらい、したんじゃないですか？」

続けて、文香がディーンという人物を値踏みした結果から見い出せた推測を語る。言い当てた事に驚いたのか、優真のチーム以外は目を見開く。

「その反応は凶星だな。ていうか、良く分かったな遠山さん。」

「これでも人を見る目はあるんですよ？」

優真に言われてどこか嬉しそうに微笑みながら答える文香。その笑顔に少しドキツとしてしまう優真。

「むう……。」

「白井さん、そんな可愛く唸られて抓られると反応に困るんだけど……。」

抓られた腕は実際痛いのが、耐えられない程ではない。というより、拗ねている真央が可愛いという気持ちの方が勝っている。

「おい……。」

今まで黙っていた勇輝が呟く。

「黒神……お前はこっちの仲間なのか？」

「ああ、そうだった。その説明もしないといけないのか……。面倒だなく。」

桜田先生達は何の事か分からず、首を傾げている。優真は面倒臭そうにエミリアに説明したのと同じように職業^{魔神}について話す事にした。

く説明中く

「……という訳で俺の職業は魔神だ。それと別にお前らと敵対するつもりもない。」

「……………」

優真の説明を聞いたほとんどの人は呆然としてしまう。

「あはは……流石だね、優真くん。」

「そうですね……。流石は規格外です。」

「おい森下、お前は分かってたんだろ？」

「さて、何のことでしょう？」

真央は苦笑いしながら言い、健はやっぱりと言ったような表情で言う。それに対して優真は健にバレてたと思いき聞かすが、肩を竦めて流される。健とは会話では敵わないと感じる優真だった。そんなやり取りをしてる中で再び勇輝が問い詰めるように優真に言う。

「この1週間何してたんだよ？」

「何って、それぞれ特訓してただけだ。」

「何で行方不明なんて事にしたんだ？」

「その方が都合が良かったからだ。それで何の関係がある？そのせいで他の奴らが死んだと言いたいのか？」

「……ッ!? 黒神!!」

「さっきも言ったが逃げるといふ選択肢があつたのにも関わらず、逃げずに戦って死んでいったんだろ？ならそれは、そいつら自身の責任だ。」

「だからって——」

「俺らが出て行かなければ守れたと？」

「……ああ、そうだ。」

勇輝は少し怒りの混じった声で聞くが、優真は淡々と答える。そして優真達の実力を目にした今、最初から優真達がいれば、誰も死なずに済んだ。勇輝はそう言いたいのだ。だが、それは優真を呆れさせるだけだった。

「この1週間何をしてたか。それに対して特訓してたと言ったな。」

「それがどうしたんだよ。」

「察しが悪いな。……その1週間が無ければ俺らだってまともに力を扱えなかったって言ってるんだよ。」

「なっ……!?!」

勇輝は驚いた。それは同時に優真の力を認めていた事を表している。

「特殊な職業とはいえ召喚されたのはお前らと一緒になんだから力を安定させるのにも時間は必要だ。まあ戦闘は多少慣れてた所はあるが……。」

「……確かにそうですね。寧ろ、この1週間でここまで扱えるのは凄い事です。」

優真の発言に納得し、賞賛するエミリア。そしてそのまま質問をする。

「そう言えば、石川さんや森下さんの新しいスキルについて説明して欲しいのですが?」

「つまりはログレスについて知りたいってことか。」

優真の言葉に頷くエミリア。ディーンも悔いてばかりでなく、そのことが気になるようで一度、気持ちを落ち着かせて聞く姿勢に入る。

「簡単に説明するぞ。まず俺は説明の時にも言ったが、《スキルステイラー能力略奪》というスキルを持っている。文字通り能力を奪う力だ。」

真面目に話す優真に他の皆も真剣に聞く。

「単なる可能性としてだが、奪う力があれば与える力が存在するんじゃないかって思ってな。《千里眼》と《魔力察知》、《魔眼》を使って

その人物を探し出した。」

「すぐに見つかったのか？」

「ああ、出て行った翌日には見つけたぞ。」

デイーンの質問に対してあっけらかんと答える優真。その言葉に驚き過ぎて何も言えなくなってしまうデイーン。それはそうだろう。何処にいるかも、生きてるかも分からない人物を1日で見つけたのだから。そこで疑問に思ったのか、桜田先生が質問する。

「まあそのログレスという人が能力を与える力を持っていて、そいつに出会ったって事は分かった。だが、今ではその《能力教授》スキルティーチャーは黒神が持っているんだろう？」

「そうですね。話が早くて助かりますよ、流石先生。」

「そしてお前は奪う力も持っている。」

その言葉に皆はハツとして優真を見る。恐らく皆が考えてる事は同じだろう。それを言われなくても分かるというように優真が続ける。

「ご明察だ。俺はログレスから《能力教授》を《能力略奪》で奪った。」

またもや皆が驚く。それを見た優真はいい加減慣れるよと思った。

「奪ったといっても一方的じゃねえから安心しろ。俺はログレスと話して俺が貰うと話をつけただけだ。」

「一体どうやったの？」

次は彩華が質問する。優真は1度、目を瞑ってゆっくり目を開いて言う。

「ログレスは俺と出会う時には瀕死状態だった。」

「な……!?!それは本当ですか!?!」

「見たところ、襲撃されたような跡だったよ。山の奥にバラバラになつてた小屋があつて、そこから少し離れた所に今にも死にそうな状態のログレスがいたんだよ。」

「襲撃したのは……。」

「ログレスを瀕死に追い込むくらいの奴だ。魔族の幹部と考えるのがいいだろう。」

「何でそんなことが分かるの?」

次は祥子が聞いてきた。

「お前、話すの久しぶりだな。」

「行方くんもだよ!」

「メタ発言はやめろつてお前ら……。魔族からしたら、というより、《能力教授》は持つてる方が優勢になる確率が高いんだ。大体予測はできるだろう?」

「そいつの潜在能力を引き出すのと、文字通り能力を教えて与える、ということか。」

「ああ、それは種族が何でも関係ない、誰も欲しがるとは言えない。」

征志郎の言葉に付け足すように続ける優真。新しい能力が手に入る方法が現在では《能力教授》によるものしかない。そしてそれは唯一の人物が持っているとなると皆が狙う。それを警戒して山奥にひっそりと暮らしていたらしいが、それで見つからないなら苦労しないだろうと思つた優真だつた。

「魔族側もそれを欲していた。死にかけてるログレスから直接聞いたから間違いないだろう。事実、『使われるなら人間族の方がいい。』と言われたし。それに、人間側である俺に奪_奪わせたんだからな。」

「そう……だつたんですか。」

エミリアの寂しげな声に静まり返る皆。その寂しさからログレスとは少なからず接点があつただろうと思ふ優真だが、必要以上に踏み込まない。

ここにいる桜雲高校の生徒達はこの1週間で色々なことを経験し、色々なことを思われ、考えさせられた。異世界に転移させられて、職業を与えられ特訓して、仲間を失つて、人の死を目の当たりにした。それでも多少の動揺がありつつ、落ち着いて冷静になつていられる。それ程の力を、精神を秘めている。仮に精神的に弱く、自分の力を過信してしまつた人達が死んでいった者だとしたら、今、生き残つていた優真達は本当に選ばれた者だ。勇輝達や桜田先生達は危なかつたが、あそこまで耐えられなければとつくに死んでいたのだから選ばれたと言えるだろう。

「それから俺は1度ここに《気配遮断》を使つて戻つてきたんだ。石川と森下に実験体になつてもらつたためだけに。」

「実験体だったのか!？」

「あの違和感はやはり黒神さんでしたか。」

康太の反応はともかく、健の反応には優真も呆れかけている。こいつはどこまで見えているんだろう、と疑問を持つ優真に不敵な笑みで返す健。

「まあなかなかの能力の覚醒だったと思うぞ?」

「言い方が厨二みたいね。」

「……………。で、その後は特に重要な事もなかったな。力を試すために色々と場所を変えながら特訓してただけだ。」

「彩華にボソツと言われたが、スルーして1週間の事を雑にまとめて終わらせた。」

この1週間で優真はスキルを手に入れる為の方法を確保し、力を充分に扱えるようにした。

奏は目ぼしい魔物を自己判断で決め、《強制契約》を使い様々な魔物と契約したり、《融合》と《分離》の使い方を慣らしたりしていた。

当麻はひたすら魔物と戦い続けて近接戦を極めていたらしく、ドラゴンとも戦った。

文香は魔法と《剣術》を組み合わせて幾つものパターンを考え、どの場合にも対応出来るように努力をしていた。

例えばどんなに特別であっても、絶対に油断をしてはいけない。この4人はそれを知っている。だからこそその1週間の特訓。自分がどんな風に見られようとも、2度と同じ過ちを起こさないようにするために、自分の選んだ道を進んでいく。

「もう二度と、失いたくは無いから…………。」

優真は小さく呟いた。独り言のように、自分に言い聞かせるように。静かに、強く言い聞かせていた。

その声を聞いていた1人の少女に気付かずに。

く白井真央ですく

1週間についての説明を終えた後、優真は真央に呼び出されていった。

「……。」

「……。」

しかし、二人の間には会話がない。と言うよりは真央が話し出そうとするのを躊躇っていて、優真はそれを静かに待っている。優真は真央が何を話そうとしているのか気付いてた。それを待つのは優真なりの気遣いであり、優真自身にも関係がある事だったからだろう。『その言葉はまた後で聞かせて欲しいな。』と言った手前、逃げる事は許されない。そして自分の気持ちを確かめたいという事もあったのだ。

「……い、色々大変だったね。」

「……そうだな。」

「優真くんも……大変だったよね。」

「白井さんは俺のこと疑わないのか？」

「優真くんは疑って欲しいの？」

「質問に質問で返すなよ……。まあ、そういうわけじゃないが……。」

「間に合わなかった事に対して責めて欲しいの？」

「……!？」

そう言われた時、優真の表情が一瞬だけ驚きで硬直した。そして真央はそれを見逃さなかった。それを自慢気に微笑みながら優真に聞く。

「ふふふ……。何で分かったのみたいな顔したね。」

「……よく見てるんだな。」

「クラス委員長だもん。皆の事はよく見てるよ!……特に優真くんは、ね。」

「何も悪いことしてないのにな。」

「確かにしてないけど……。でも、優真くんは、見てて危ないと思ったの……。」

少し寂しそうな表情で言う真央。

「危ないってのは優真くんが危険な人物とかじゃなくてね、優真くん自身が危ないかかって思うんだよ。」

「……。」

「優真くんは人と関わるのを面倒だと思ってるかもしれないけど、それでも私達と一緒に居てくれるのは何でかな?。」

「それは……。」

優真は言葉が続かなかった。自称ぼっちである優真は確かに人付

き合いがあまり好ましくない。しかし、それでも真央や奏、この異世界に転移した皆と関わる理由。真央はその答えに辿り着いた。

「ホントは皆の事が好きなんでしょ？」

「ッ!？」

「あはは！もう、分かりやすい反応だね。」

「何でそう思ったんだ？これも演技かもしれないってのは考えないのか？」

「思わないよ。」

即答だった。真剣な表情で。何でこんなに真っ直ぐで、早く答えるのか。いや、答えられるのだろうか。それは彼を——黒神優真の事を見続けて、想い続けたから。

「汚れ役を買ってでも、誰に嫌われようとも、何かを成そうとする優真くんはカッコイイよ！」

「……ははは。全部見抜かれてるんだな……。」

自嘲気味になる優真。自分では隠していたつもりだったのだが、全て気付かれていた事に恥ずかしさもあって少し顔が赤くなる。普段なら今の部分も誤魔化すだろうが、真央には通じないと思ったのだ。優真は気付いている。ずっと前から。だから隠しても無駄だと思ったのだ。

そう、これは真央だから気付いただけであって、他の人は恐らく気付いていない。優真に好意を抱いている人は気づいているかもしれないが、真央の想いは誰よりも強いだろう。それ故に今まで保っていた

——閉ざした心を優真は開く打ち明けることになる。真央の一言によって。

「これからはもう、孤独一人で頑張らなくても良いんだよ?」

その言葉を聞いた瞬間、優真は崩れる様に真央に抱きついて、枯れていたと思われた涙が溢れ、想いを吐き出す。赤子のように、泣いて、泣き喚いて、泣き叫んだ。全てを吐き出打ち明けるすように。

皆さん、こんにちは。私は桜雲高校2年D組の白井真央。

学校ではクラス委員長をしていて、色々な人と会話することが多く、毎日楽しい生活を送っています。

そして、突然ですが、私には好きな人がいます。

その人は面倒臭がりで、鈍感で、暗い雰囲気を持っていて、一人でいることが多い。でも私は知ってる。本当は優しく、強くて、皆の事を大事に思っているって言うことに。確信?そんなものはないけど……好きな人の事だもん。私はそう信じてるってだけ。その彼の名前は……。

……え?もう分かってるって?確かに分かりやすいかもしれないですね。だって好きな人を目の前にしたら、自分が抑えられないって

言うか、何て言うか……うう……。？……それ以前の話？私がメインヒロイン？ちよつと何言ってるか分からないですね。

コホン……。彼と最初に出会ったのは中学生の時でした。その時は幼馴染みの勇輝くんとその家族と私達の家族でご飯を食べる日だった為、食材を買いに行かされたその帰り道に彼と出会った。いや、助けられたと言った方が正しい。正直、色々と怖い思いをしたが、これがあったからこそ彼と出会えた。そんな気がする。そんな衝撃的で王道な展開で私は彼に一目惚れをしました。

今日はそれについて、その後について、私の過去と共に詳しく語らせてもらいます。

～中学生の頃～

私は今、勇輝くんと食材を買いにスーパーに来ています。

「ごめんね、勇輝くん。うちのお母さんが無理言っつけて付いてきてもらっちゃって……。」

「別に構わないよ。真央に何かあったら嫌なのは俺も同じだからね。」

「ふふ……ありがとう。」

心配性だなくと思いな言おうと勇輝くんは顔を赤くして目を背けてしまう。そんな可愛いらしい反応を少し楽しんでいるのは私だけの秘密だ。

買い物が終わり、私達はスーパーを出て帰り道に着く。時間は夕方くらいで、その帰り道の途中には薄暗く、狭い道がある。夕方でも人の顔を認識出来るか出来ないかくらいの明るさで、人通りの少ないこの道は私達の家の近道とも言える所で行く時にも通った道だ。普段使っている道でもあるから自然にその道で帰っていたら……。

ドンッ

「あ、すみません。」

「おいおい、痛えじゃねえか嬢ちゃん。」

ぶつかったのは高校生くらいの男の人で、すぐに謝ったがその男の人は私の肩を掴んで文句を言ってきた。

「おい！真央から手を離せ！」

「ああ？ぶつかって来たのはそっちだろうが！」

「だから謝ったじゃないか！」

勇輝くんが高校生の男の人と言い合いをしてると……。

「ん？誰そいつら。」

「ああ、ぶつかって来たから注意してやってるだけだよ。」

「あくなるほどね。」

ぶつかった人合わせて5人の高校生達が集まってきた。ニヤニヤとこちらを見ながら話している。勇輝くんは私を守ろうと前に出て庇ってくれている。

「まあ許してやらないこともないけど、一つだけ条件がある。」

「そーそー。その女の子を少し貸してくれたら許してあげるよ。」

「は!?そんなふざけ——」

「てめえの意見なんて聞いてねえんだよ!」

「がはっ!」

「勇輝くん!!」

勇輝くんは高校生にお腹を膝蹴りされて、蹲ってしまふ。勇輝くんは彩華ちゃんの所で稽古していたが、やはり経験と体格の差のせいから高校生達にボロボロにされてしまふ。そして勇輝が離れた直ぐにぶつかった人（恐らくリーダー）が私を壁に抑え付ける。

「いや!離してよ!」

「ギャハハハ!おい!そいつ抑えておけ。今からこの女と遊ぶからよお。」

「おい!ずるいぞ!」

「や、めろ……。」

「おいおい、黙っとけって!!」

倒れているにも関わらず勇輝くんを蹴る高校生達。そして高校生のリーダーである人が私を抑えつけながら言う。

「まあこいつが汚れるのをしっかり見とけよ。」

「っ!?!」

私は途端に怖くなり声も出せなくなっていました。確かに私はスタイルは良い方かもしれない。でもこの時ばかりはこの体を恨んだ。こんな体ならそういう輩が狙ってくる事は今の私にも分かっていた。高校生のでかい体に力で適うはずもなく、されるがままにされそうになる。そして高校生のリーダーが私の服に手をかけた時だった。

「はあく……。」

何処からか態とらしい溜め息が聞こえる。

「誰だ!？」

「……。」

高校生のリーダーが焦るように聞くが、返答がない。その代わりにスタスタと足音が聞こえる。そこに現れたのは私達と同じくらいの男の子だった。

「はあく……。」

また同じような溜め息が聞こえた。誰だ?という質問に自分だと言いたいのだろうか?

「あん?ただのガキじゃねえか。おい!そいつ追っ払っけ。」

リーダーがそう言うと言輝くんを抑えてる人以外、つまり3人の高校生達はその男の子を囲むように並ぼうとする。

「に、逃げ……むぐっ!？」

「まあまあ落ち着けて。誰だか知らないがギャラリーは多い方が良いだろ?」

私は逃げるように言おうとしたが口を手で塞がれ話すことが出来なくなる。目線だけ男の子の方向に向けるとその男の子の表情は……一言で言うなら『面倒だな……。』と思われる表情だった。しかし、逃げられる状態ではない。いや、逃げるつもりが無いのだろうか。高校生達が何を言っても無言。それに苛立ったのか1人の高校生が殴りかかる。

「さっきから無視してんじゃねえよ!」

私はギュツと目を瞑った。いくら他人とはいえ、巻き込んでしまった罪悪感と人が痛めつけられる、それも同い年の男の子が痛めつけられるのなんて勇輝くんの時にも感じたが、見たくなかった。だけど聞こえてきたのは。

ゴキツ!

「ぎゃあああああ!う、腕があああああ!!」

骨が折れたような音と高校生の悲鳴。私を抑えていたリーダーの人も私から離れて男の子の方向に向かう。

「て、てめえよくも!!」

「仕掛けてきたのはそっちだ。俺は悪くないだろう。」

「この野郎!」

「舐めた真似しやがって!」

次は二人がかりで男の子を攻撃しようとするが、男の子は避けたり受け流したりして、高校生達に隙ができた瞬間を狙って反撃をする。

「ぐっ！」

「かはっ！」

「中学生に負けるとか……。弱いなお前ら。」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべてリーダーと勇輝くんを抑えてる人を見る。そして勇輝くんを抑えていた人が男の子に向かって隠し持っていたナイフを振り下ろす。

「危ねえもん持ってるな。こんなのは没収です。」

……。今私が見た光景は振り下ろされたナイフを人差し指と中指で白刃取りして、注意する先生のように言っただけでナイフを取り上げる。そんな行動に怯えてリーダーともう1人の高校生は腰が抜けたように座り込む。男の子はその2人に向かって笑顔で言った。

「ここにいと邪魔なので仲間を連れて帰って下さい。あ、後これ治療費です。」

「し、失礼しましたああああ!!」

そう言ってお金(かなり多かったが気にしない)を渡して追っ払った。そして何事もなかったかのように去ろうとするので、私は慌てて止める。

「ま、待って!!」

「ん？ああ、大丈夫だった？まだ純潔？」

「え？あ、はい。ってそうじゃなくて！」

「そこで倒れてる子も結構な傷負ってるから早くしてあげな。救急車は呼んどいたから。」

「あ、大丈夫!? 勇輝くん!!」

「何とか……。痛っ!!」

「多分、^{あはら}肋が幾つかやられてるかもしれないから安静にしといた方が
良いぞ。」

そう言つて本当に帰ろうとしてる男の子に声をかけた。

「あ、あのー！」

しかし、すぐに救急車が来てサイレンの音で私の声はかき消されてしまし、男の子の姿はどこにも無かった。何故か私達の親も一緒に来て驚いたが、今は勇輝くんが心配だ。それと同時にあの男の子の事も気になっていた。

あの事件以来、勇輝くんは完治して、あの高校生5人は警察に捕まったとニュースでやっていた。どうやらあの高校生達は何度か同じ事をしていたらしい。本当に救われたんだと私は思った。そして私はあれ以来、ずっとモヤモヤしている。それに気付いたのは数週間が経ってからだった。

多分、私はあの男の子に恋をしてる。不良から助けられた。そんな王道な展開だったけど、最初に見た時から私は彼に惹かれていた。見

た目は良くも悪くもという感じだったが、彼の面倒臭そうな表情の中に何かが見え隠れしている気がした。それにあ事件の時も、相手を煽り、圧倒的な力の差を見せつける。そうして相手に恐怖を刻み、関わりたくないと思わせている。そんな気がした。

でも私はそんな彼を素敵だと思った。確かにやりすぎなところもあったかもしれないが、裏を返すなら無駄な争いを避けていると私は思う。その為に犠牲は付きものだ。彼は昔、恐らく、とてつもない絶望を感じたことがあるのではないだろうか。その理由は『弱いなお前ら。』と言った時の顔が、まるで自分に対して、自分を責めるように、そう言ったように聞こえたからだ。

そう、彼を好きになった理由は、かっこいいとか、強いとか、優しいだけではない。助けてあげたい。たった一度のしか出会って無いけど、この気持ちは本物だ。

「はあ〜……。また会いたくないな。」

彼が登場した時と同じ溜め息を付いてそんな事を呟いていた。

〜高校1年生〜

あれから数ヶ月が経ち、私は高校生になりました。

そして良い知らせと、とても良い知らせがあります。

良い知らせは私と幼馴染みの4人全員が同じ高校だった事。そしてとても良い知らせと言うのは……。彼も同じ高校だった事です！キヤー！どうしよう!?!どう話しかければいいのかな？と言うより向こうは覚えてるのかな？どうしようどうしよう!!……。ふー。落ち着け私。こんなキヤー……。こんなキャラじゃないでしょう！……。言い直せてないし。彼を見つけた時はテンションがこれでもか、というくらい上がったしまったが本当に話せるだろうか。クラスは別々になっっているし、休み時間は彼は教室にいないし、何処に居るのか全く分からない。そのうち見かけるだろうからその時に話そうと思った

矢先、彼とすれ違う。だけど声はかけられなかった。何故か？？心臓がバクバクで緊張しちやつてるんだよお。(？ ㄇ？。)

そして彼を見かける度に緊張して頭が真っ白になって話せないでいる日が続いて……。

く 高校2年生く

「何やってんだ私……。」

1年を無駄に過ごした気がする。いや、友達も出来て楽しく過ごせたからそっちは大丈夫なんだけど……。彼と話せずに1年が過ぎてしまった事に悔いを感じている。しかし、神は私を見捨てなかった！なんと！彼と同じクラスになったのです！これでやっと話せると、そんな風に思う時期が私にもありました。

「……。」

未だに何を話せばいいのか分からず、一人で盛り上がって勝手に沈んでる私……。はあく……。こんなんで本当に話せるのかな。そんな事を考えてると。

「今日は委員会や係を決めたいと思う。」

先生が言った。何て？委員会？そうだ！これで彼と一緒に委員会が出来たら！そんな風に思う時期が（ry

私は推薦でクラス委員長になりました。確かに1年の頃に一緒だった子達が多くてこゝなる事は仕方ないと思うが……。あんまりだよお。(？ ㄇ？。)

そして帰りの時間になった。トホホ……。私は報われないのだからか。いや、私がチキンなだけか……。そんな風に落ち込んでると、彼は帰りの時間になった今でも寝ている。それを少しじっと見つめ

てしまう。

「おーい真央。帰るぞ。」

「あ、うん。先行つててもらえる？」

「じゃあ昇降口で待つてるね。」

勇輝くと彩華ちゃんに先に行ってもらおうようにして私は彼の元に起こしに行く。少し緊張していた。この緊張の正体も実は分かっていた。覚えられて無いだろうから、その時の反応が怖くて声をかけられなかった。

それでもやっと話せる機会チャンスだった。だから私は声をかけた。

「おーい！もう帰る時間だよー！」

「……ん？ふああ……。誰？」

……少し胸が痛んだ。でも仕方が無い。例え何がどうであつても私の気持ちに変わりはない！

「クラス委員長になった白井真央です！よろしくね！君は？」

「黒神優真……。よろし、く……。……むにゃ。」

「わわっ!?ダメだよ！起きて！起きてよ！優真くくん!!」

こうして白井真央私と黒神優真彼は本当の再会を果たすことが出来た。やっぱり私はどうしようもなく好きだ。こんな会話だけでとても幸せで、嬉しい。

そして同時に改めて決意する。

『今度は私が助ける番だ。』

第二章く魔神の旅路く く新たなスタートですく

あれからどのくらい経ったのか……。優真と真央は月明かりに照らされていた。

真央は優真を優しく包み込むように受け止めて、子供のよう泣きじやくっていた優真は落ち着きを取り戻し始め、姿勢は抱きとめられたままだが話をする。

「……白井さん。」

「ん？どうしたの？」

「俺には好きな人がいたんだ。」

「……。」

優真が語り出す。それを静かに、真剣に聞く真央。

「確かに異性としてもだが、それ以上に憧れてたんだ。」

「うん。」

「俺には勿体無いくらい、高嶺の花だったんだ。」

「……うん。」

「でも、ある日に死んだ。殺されたんだ。」

「……っ!？」

「理由としては俺の関係者。俺が好意を持った者。多分そんなところだ。そういう理由で、その子も、親も、親戚も、俺と妹を残して殺されていった。」

「……。」

「俺が関わったせいで、俺が弱かったせいで失った……。」

「だからそんな風に周りとの関係を避けて、そこまで強くなるために今まで過ごしてきたの?」

「ああ……。失いたくなかったからな。……護るために強くなった。」

この会話だけでも2人は深く理解し合っていた。

真央は優真が自分の知らない世界で過ごしてきたのだろうと思っただ。関わっていけない、離れて欲しいと優真が望んでいるんだという事も理解していた。

優真は真央が自分の過ごしてきた世界を否定してくれないこと。決して自分のことを諦めようとはしない彼女の気持ちを理解していた。

だからこそ2人は……。

「それでも俺と一緒にいてくれるか?」

「うんーもちろんだよ。そして……絶対優真くんの一番になってみせる!!」

体を起こし、しっかりと真央の目を見て言う優真に笑顔で元氣良く返す真央。そしてそのまま続ける。

「優真くんが『どういう世界』で『どんな事』をしたかなんて私は気にしない……とは言わないけど、私の気持ちは変わらない。……絶対に変わらない。」

「白井さん……。」

「真央って呼んで、優真くん。」

「いや、難易度高いって……。」

「えく……。じゃあ優真くんの一番になったら、呼んでくれる？」

「……考えとく。」

えへへ、と微笑んでから意を決したような顔をして真央は不意打ちで優真にキスをする。突然の出来事に目を見開く優真だが、すぐに状況を理解し、真央のことを優しく抱きしめる。しばらく繋がっていた唇を離すと真央はまた笑顔ではつきりと言った。

「大好きだよ!!優真くん!」

あその後、真央は自分の部屋に戻ると言って去っていったが、優真はまだその場に残っていた。夜空を見上げてポツリと呟いた。

「俺は恵まれてるな……。」

今でも憧れであって、手を伸ばしても届きそうにない高嶺の花のよ

うな存在だった少女を思い出しながら言った。

「お前といい、白井さんといい、お人好しばつかだよ……。」

その目には光り輝くものがあつた。それは嬉しさによるもので優真も心地よく、素直になれた。もう一度、確認するように月に向かって問いかけた。

「俺はまた、人を好きになつてもいいのかな……那月……。」

答えは返つてこなくても、かつての恋人に向かって、許しを貰うように問いかけた。

あれから数週間が経つた。

国は徐々に回復していき、壊れた家やお店も修復されていた。これは優真が《能力教授》で征志郎の《超修復》を覚醒させて《超修復・改》となつた。これは武器や装備品だけでなく、家や土地そのものを回復出来るようになった。一般市民達や騎士達の怪我もエミリアや真央、文香の《聖魔法》による回復で治していき、襲撃される前までとは言わずも順調な回復をしていた。同時に空いた時間があれば動ける者は訓練をする。そして今、訓練しているのは……。

「《聖光波動》!!」

「闇弾・Ⅱ!」

ズドオオオオオン

勇輝と康太が相手に向かって同時に魔法を放つ。その衝撃で砂煙が舞ってそこから出てきたのは片手を前に出してる無傷の優真。

「うん。かなり威力も上がってきたな。《自動防衛》オートガードが無かったら傷は与えられてたな。」

「相変わらずチートですね。最早バグです。」

「そんなこと言いつつ俺の背後に回れてるお前は何なんだよ。」

優真は《自動防衛》で勇輝達の魔法を防いだ後、健が優真の背後に回り込んで隠し持っていた暗器で攻撃を仕掛ける。だが、優真はそれを魔力を纏った手を手刀の形にして防ぐ。

「お前の方こそ相変わらずだよな。」

「おや？何のことでしょうか？」

激しい攻防の中、優真の言葉に誤魔化す様に返事をする健。

「ですが、確かにやってる事は『本職』と変わらないですね。」

「本当にお前のやり方は恐ろしいよ……。」

はあく、と溜め息を吐きながらもバックステップで健と距離を取る。健も勇輝と康太の所に戻り立て直す。

今訓練しているのは、優真、勇輝、康太、健の4人で、優真VS他の3人で戦っている。もつと言うなら優真が3人を訓練していると

言える。《能力教授》で皆の潜在能力を開放もしてある。

「さてと、……本気で守らないと死ぬぞ。」

「……っ!?!」

殺気に乗せた言葉に勇輝と康太は若干怯むが、関係ないと言わんばかりに、優真は片手を上に翳し、魔法を発動させる。

「《流星群》メテオシャワー」

勇輝達の上空にでかい魔法陣が現れ、幾つもの星が勇輝達に降り注ぐ。岩属性と聖属性と闇属性の魔法を合わせて創り出した優真オリジナルの魔法だ。

「おい！流石に洒落にならねえだろ!?!」

康太が叫んでいるが勇輝は呆然としてしまう。健もどうしましよるか、と落ち着いて考えている。その姿にまた康太もツツコミを入れようとするが、星が目の前に迫っていてそれどころではない。

「《星砕き》!!」

ドゴオオオオオン

叫ぶような声と共に勇輝達の後ろから《衝撃波》が飛んできて星を粉々に吹き飛ばす。その声の主は……。

「流石にやりすぎだろ!?!優真!」

「いや、防いでるお前が言えることじゃないぞ、松下。」

現れたのは当麻だった。《星砕き》はスキルの《衝撃波》による一つの技だ。当麻曰く、《衝撃波》は使い方を分けられるらしい。だからそれぞれに分かりやすいように名前を付けたという。

「んで、何の用だ？混ぜて欲しいのか？」

「誰が好き好んでお前のスパルタを受けるか！エミリアが呼んでこいって言ってたぞ。」

「了解……。んじゃお前ら、今日は終わりだ。解散。」

そう言っただけで欠伸をしながら訓練所を出る優真。その後にはグツタリしながら付いて行く勇輝達。この訓練は言っただけじゃあ、例えば《ALL J OKER》以外のメンバーを強化するためのものである。既に全員が《能力教授》によって能力を覚醒させている。その結果ほとんどが《無詠唱》を使えるようになった。

「しかしまあ、お前らも十分化け物になったな。」

「その化け物にしたのは優真だけだな。」

「確かにそうですね……。」

優真が何気ない一言にツツコミを入れる当麻。それに呆れたように答える健。その光景に苦笑いする康太。勇輝は何かを考え込んでいるような表情で話が入ってないようだ。

そうしている内にエミリアの元に着いた。他の皆も既に集まっていて、優真達が集まってからエミリアが話し出す。

「そろそろデリアル王国も回復してきました。これは皆さんのおかげです。ありがとうございます。」

「改まってどうした？」

「いえ、改めてしっかりと礼をしたいと思いますだけです。本題はこれからです。」

エミリアの改まった態度に疑問抱いた優真。エミリアは真剣な表情になって皆を見据える。

「皆さん、そろそろ旅に出ませんか？」

「いきなり過ぎだろ。俺よりぶっ飛んでる。」

「あら、自覚があったのね。」

エミリアの急な発言に素で驚く優真。それに対して奏が辛辣な言葉を発する。

「確かに突然かも知れませんが、ここ最近はデリアル王国付近にも魔族が現れなくなりました。これは多分、優真さんが結界によるものだと思います。」

「感謝し尽くせ。」

「……。なので本来の目的である魔王を倒すために、新しくメンバー編成をし、色々な情報を集めて迷宮を探しに行ったほうが良いかと思っ
ています。」

「ふむ……。一理あるな。」

優真の言葉をスルーして説明を続けるエミリア。それに納得して

いる桜田先生。そこで彩華が質問する。

「メンバー編成はする必要があるの？」

「確かにそうだな。そこには理由があるのか？」

彩華の質問に勇輝も質問を加える。

「要はパワーバランスを考えろって事だ。」

その質問に答えたのは当麻だった。それを聞いてもいまいち納得していないらしく、首を傾げている勇輝達。

「つまり《ALL JOKER》の力を分散させるという事ですね。」

「概ね正解だろう。」

健が加えて説明し、優真はチラッとエミリアが頷くのを見ると、正解だ、と言う。

「じゃあとつとと決めるか……。いや、面倒だから決めといてくれ。」

「はあく……。その面倒臭がりは筋金入りね。」

「あはは……。」

優真の発言に呆れる奏と文香。その光景を羨ましそうに、けど微笑ましいと思っただけで見ている真央。

しばらく話し合い、メンバー編成が決まった。3人1組のチームが4つになっている。

Aチーム

黒神優真、白井真央、森下健

Bチーム

柏崎勇輝、皇彩華、月宮奏

Cチーム

石川康太、行方征志郎、榎本祥子

Dチーム

松下当麻、桜田遥香、遠山文香、

ここからまた、真の物語新たな人生が始まろうとしていた。

く出発前の出来事ですく

新チームになった翌日、それぞれが旅に出始めた。最終目的は魔王を倒すこと。しかし、その為には魔界に行くための鍵が必要だ。その鍵は何処にあるのかも分からない迷宮を探し、その最奥にいる幹部の紋章を持っていかなければならない。デリアル王国王城の周りは探しに行ったが、迷宮どころか魔物すら完全にいなくなっていた。エミリアの言った通り、優真による《結界》がその効果を生み出していたようだ。

そして現在、その優真達というと。

「そろそろ王国出れそうか？」

「恐らくですが、もう端の方に来たと思いますよ。」

「了解。白井さん、大丈夫？」

「大丈夫だけど、普通こんな移動の仕方って序盤にやる事じゃないよね?。」

「早めに拠点を確保しておきたいんだ。仕方がない。」

優真達は空を飛んで移動していた。優真が『歩くの面倒なんだから。』と言って《風魔法》の《空中歩行》エアロウォークを発動させ、その範囲は真央と健にも及んだ。怪しまれない為にも《隠密》や《気配遮断》、《空間魔法》による《空間制御》で周りから見えないようにしていた。健はすぐにバランスをとり制御出来たが、真央は怖かったのか優真にしがみつくようになり、お姫様抱っこをしたまま優真が《空中歩行》することになった。

「つと。そろそろ降りといった方が良いかな。」

優真がそう呟くと同時に地面に降りる。お姫様抱っこを解除された真央は少し残念そうな表情になるが、優真の腕に抱き着くという形で満足する。しばらく歩いてしていると関所が見えてきた。

「これ絶対面倒な気がするんだけど……。」

「でもこういう手続きしとかなないと後が大変だよ？」

「いや、別に騒動になったら逃げれるし。」

「指名手配犯にはなりたくありませんよ？」

「はあく……。面倒だなく。」

そう言いながら関所にいる厳つい人に話しかける。

「すみません。デリアル王国から来た黒神優真ですけど、そっちのアースナル王国に行きたいんですが、良いですか？」

「ちよつと優真くん！そんなので——」

「ああ。良いぞ。」

「あれ!?良いの!？」

「エミリア様から報告は来てたんでな。黒髪の片目。黒いコート。名前は黒神優真。全部一致している。そちらの2人も特徴は聞いているから名前だけ教えてくれ。」

用意周到だと感じる優真達だった。

「あ、白井真央です。」

「森下健です。以後お見知りおきを。」

「……。ん。OKだ。森下健に関しては普通としか書かれてないが、『優真さんと居る人なら誰でも大丈夫』と言ってたんで問題ねえだろうよ。随分信頼されてるんだな。」

「あはは……。」

「俺自身そこまで信頼される心当たりは無いんだけど……。」

「……。むう。」

「痛い痛い。白井さん。痛いし、柔らかいし、いい匂いするから止めて。」

抱き着いてた腕を締め付けるようにギューつとする真央。関節が決まっついていて、女の子特有の肌の柔らかさといい匂いで理性が飛びそうな事を含めてストップをかける。

「ふふ。意外と“嫉妬”深いですね。白井さんって。」

「だ、だってえく……。」

「確かに黒神さんの周りには良い女性ばかりですからね。」

「そういう話は俺がいない時にしてくれる？」

健と真央が優真の話をしていてそれを聞かされる当人は恥ずかし

いことこの上ないだろう。

「そういえば良かったんですか?」

関所を通って次の国に向かつてる最中、ふと思い出したように健が優真に聞く。真央も何を聞きたいのかを分かっただらしく質問を加える。

「そうだね。あそこまでしなくて良かったと思うよ?」

「とは言ってもなあ〜……。それはあの時も言った通りだよ。」

時はチーム編成が決まった直後に遡る。

新チームが結成された時、一番大きく反応したのは勇輝だった。

「おい、どうして真央が黒神の所にいるんだ?」

「ん?」

勇輝のいきなりの発言に優真は何を言ってるんだ、と言いたげな顔

で勇輝を見る。

「おかしいだろ？真央は俺と幼馴染みだし、一緒に行動した方が良いに決まってるじゃないか。」

「何を根拠に言ってるんだよ。」

「俺は『勇者』だ。いくらお前が『魔神』という強い存在で俺達の味方だと言っても危険だと思ってる。」

「ちよつと！勇輝くん！優真くんは——」

「なるほどな……。つまりは自分側に置いておきたいと言うことか？」

「少なくともお前に預けるよりはな。」

勇輝の無茶苦茶な言葉に真央も反論しようとするが、優真に制されてしまう。しかし、我慢出来なくなったのか真央はそれでも反論する。

「優真くんは危険なんかじゃない！勇輝くんだって本当は分かっているでしょ!?!」

「そうね。流石に無理があるわよ勇輝。」

「優真の実力と俺らに対する態度だって文句なかっただろ？」

幼馴染みの皆にも説得され、それで納得するかと思っていたが、勇輝はそれでも止まらなかった。それどころか、もつと悪い方向に向かっていた。

「そうか。分かった。お前ら洗脳されてるんだな。」

「「!?」」

その言葉には誰もが驚いた。いや、数人を除いてだ。

「だからさつきから黒神の事を庇うように言うんだな。理解したよ。」

「ち、違うよ、勇輝くん！私は本当に優真くんが——」

「安心しろよ、真央。今すぐ解放してやるから。」

そうやって剣を抜き優真に向ける勇輝。流石にこの状況は不味い
と思い、皆で止めに入ろうとするが、それは優真の《覇気》によって
妨げられる。

「随分と都合の良いお花畑な頭をしてるんだな。」

「……っ！お前の方こそこんな事をしてよく恥ずかしくないな。」

(いや、何もしてないから何とも無いんだけど……。)

内心では正直呆れ果てているものの、優真は続ける。

「それはお前が都合良く変えてるだけだろ？現実を見ろよ、三流勇
者。」

「……ッ!! 《ホーリープラスター聖光波動》!!」

「優真くん!!」

遂に怒りが爆発したのか、優真に魔法を放つ勇輝。魔法の大きさは本当に殺す勢いだ。その光景に真央が叫ぶ。

「おいおい。そんなんじゃ俺は倒せないぜ?」

しかし、その魔法に突っ込む優真。《自動防御》オートガードの力だけで身を守っている。気付いた時には優真は勇輝の目の前にいる。

「くっ……!!」
《天罰》ジャッジメント!!」

上から雷光が降り注ぎ、優真を狙う。しかし、優真はそれを気にせず勇輝を掴み、降ってくる雷光に向かって投げつける。

「うわああああああああ!!」

雷に打たれて地面に落ちていく。自分でかなりの威力を持った魔法を放っただけにダメージは大きかった。

(くそっ!何で!何で俺が黒神なんかに!!)

「その程度か?お前にとって、その程度の物だったのか?」

——好きな人を守るという覚悟は、その程度なのか。と優真が言う。その言葉に勇輝は顔を上げて優真の顔を見て目を見開いた。寂しげな表情で、怒りを秘めた表情で、勇輝に訴えるようにその眼差しを向けていた。

フラフラになりながらも立ち上がる勇輝。その意気込みだけには満足したのか優真は薄ら笑いを浮かべる。

「俺は、絶対に、お前に、……勝つ……。」

「なら俺を目標にするんだな。俺を越えろ。俺を倒せ。憎んで、恨んで、殺そうとしろ。そうでもしなければお前は強くなれない。」

そう言いながら勇輝に向かって一歩一歩距離を縮めて行く優真。そして勇輝の目の前に着くと同時に腕を広げ両の掌を勇輝に向け、構える。

「黒神流格闘術——壹の技《内壊うちこわし》。」

ズドオオオオオン！

言うのが終わると同時に両の掌を勇輝の鳩尾に素早く叩き込む。しかし、勇輝の体は吹き飛ぶことが無く、その場で全ての衝撃を受け止める事になり、内蔵が破壊され、より激痛を伴う。この技は優真の父親が生きていた頃に教えて貰った技だ。

「……………ツ〜!？」

悲鳴や絶叫を上げることすら許されず、激痛で意識が飛びそうになる。その意識が薄れていく中で聞こえたのは。

「…………お前、〃傲慢〃だよ。」

そう告げる優真の冷たく、どこか悲しそうな声だった。

そして意識が無くなった勇輝以外には聞こえる声で優真は言った。

「俺という目標を持てば、お前はきつと化けれるだろうな…………。」

「あの時は本当に色々ヒヤヒヤしたんだよ？」

「そうですね。やり過ぎなのは否めませんね。白井さんが治癒師だったから良かったものの。」

「それは俺も思ったけど、柏崎は勇者だ。だからこそ強くなってもらう必要がある。」

「もう。本当に不器用だよ。そういうやり方しか出来ないって。……まあそんなところが好きなんだけど。」

「理解してくれる人がいて良かったですね。」

「……ああ。俺には勿体ないくらいだよ。」

そんな話をしながら歩いていると。

「さて、ここが新しい国か。」

「随分と遠くに来たね。」

「ここがアースナル王国王城ですね。」

このチームはどこよりも早くデリアル王国を出て次の目標へと向かうのだった。

一方その頃。

「今頃、黒神くん達はもうデリアル王国を抜けたのでしようね。面倒くさいとか言いながらやるのが彼だもの。」

「ははは……。奏さんは黒神君の事よく分かってるんですね。」

「この世界に来る前にも何かと巻き込まれてしまったからね。不本意ながらよく一緒に居たわね。」

勇輝達は奏と契約した魔物——海馬マリンホースに乗って移動していた。水陸両用という便利な魔物である。奏と彩華は大分打ち解けた様でよく話している。

「あゝ。月宮さん。」

「何かしら?」

「黒神ってどんな奴なんですか?」

その言葉を聞いて奏は呆れたように溜め息を吐きながら言う。

「貴方、黒神くんと戦ってまだ分からないって言うの?それだと永遠に彼に追いつく事は無いわよ。」

「っ!!」

優真を越せない。それどころか追いつく事も不可能と言われ顔を

響める勇輝。それを気にせずには奏は続ける。

「彼を理解しようとしなない人は彼に近づく事も許されないのよ。」

その言葉に胸を痛めたのは勇輝だけでなく彩華もだった。そして発言した奏自身も自分に言い聞かせるように言ったようにも聞こえた。

奏はそれを言った後、少し先を進み始めた。

勇輝は未だに何を言ってるのか分からないと言った表情で、彩華は複雑な気持ちになっていた。真央を見る限りあの2人は結ばれた。彩華は前から真央の気持ちは知っていたので応援を続けるつもりだった。

(でも、何だろう。この気持ち……。)

そんな風に不安になっていると。

「彩華は俺の事を見てくれるか?」

勇輝が突然聞いてきた。不安そうな、置いてけぼりをくらった子供の様な顔で聞いてきた。

「そうね。私は真央と違ってまだ届くかもしれないわね。」

この気持ちはきつと知ってはいけない。これを知ってしまったら抑えられない。彩華はそう思いながら勇輝の質問に微笑んで答えた。

くアースナル王国ですく

何事も無くアースナル王国に辿り着く事が出来た優真達は今、門番である兵士達と口論していた。

「だくかくらく！別に怪しい人じゃないです！デリアル王国から来たんですってば！」

「そんな事信用出来るか！証拠を持って来いと言っているんだ！」

主に真央と門番の1人が言い合っているだけなのだが……。

「つまり、こちらまで連絡が来てないんですか？」

「その通りです。こちらの不手際だと思うのですが……。」

「いや、絶対エミリアだよ。どっか天然だもん、アイツ。」

「あはは……。仲がよろしいんですね。」

「でかい態度なのは自覚してるつもりだ。」

真央達が言い合っている中、他の3人が話を進める。

「とりあえず、言い合っても埒が明かないですね。」

「……強行突破でもするか？」

「それ私たちの前で言う事じゃないですよね？」

門番を前に恐ろしい事を言う優真に健と門番は苦笑いをする。

「冗談だよ。ん〜、何か良い方法無いかな〜……。」

しばらく考えて『あっ……。』と閃いたと言わんばかりの表情になる優真。そうすると一瞬で目の前のアースナル王国とは違う方向の森に向かう。

ズドオオオオオン!!

優真が森に入ってから数秒後に何か強い衝撃を受けた轟音が響いた。取り残されていた門番達と真央と健は何事かと思ひ森の方を見つめているとズルズルと何かを引きずる音と共に優真が戻ってきた。

「とりあえず、これを交渉材料にと思ったんだが。」

優真が持ってきたのは全長3mはある巨大な猪——メガファンゴだった。

メガファンゴは主に肉料理に使われる極上な材料で、無駄なくその身を使う事が出来るらしい。メガファンゴ自体は何匹も存在するが、人間が1人で狩るには冒険者Sランクの実力が必要らしいが、それでも数秒で倒すなんてことは有り得ない。つまり、だ。

「俺達は危害を加えるつもりは無いし、寧ろここを拠点に活動させて欲しいんだが？」

圧倒的な力を見せつけ、それをアースナル王国の利益になるように仕向けている。ここを拠点にする以上、余計な手は出さないようにしたいらしい。

場面は変わって、アースナル王国王城内。

「良かったんですか？」

「あれだけのものを見せられたら断る方が怖いですよ。」

「結局、強行突破と似てると思うんだが……。」

「優真くんって困る時あるのかな？」

優真達は門番の兵士に連れてこられ、たわいもない話しをしながらアースナル王国の王と出会う為に、王室に向かっている。

コンコン

「アルデギオ陛下、デリアル王国より客人が参りました。」

「うむ……。報告は受けていなかったが、まあよい。入れ。」

「失礼します。」

門番の兵士が扉を開けると、初めての国というだけあって真央はガチガチに緊張しているが、優真と健は普段と変わらずスタスタと王室に足を踏み入れる。その様子に慌てて真央も付いて行く。

「どうも。お初お目にかかります、アルデギオ陛下。私、デリアル王国より勇者召喚で召喚されし1人、黒神優真です。」

「同じく、森下健です。以後お見知りおきを。アルデギオ陛下。」

「え!? え、えと……。し、白井真央です! と、突然の訪問失礼しました!」

「ふむ……。私はアルデギオⅡクライスだ。そう堅くならんで良いぞ。」

慣れたような挨拶をする優真と健に驚き、しどろもどろになりながら言葉を紡ぐ真央。その光景を少し面白そうに見るアルデギオ。見た感じアルデギオはとても厳しそうな性格をしているように見えるが優真と健はこの短い間で意外とフレンドリーな性格だと思い、口調を戻す。最も、健は変わらないが。

「ならお言葉に甘えて。いきなり悪かったな。エミリアから伝わってるもんだとばかり。」

「いや、気にするでない。あの者はしっかりとしてるように見えて少し抜けているところがあるからな。しかし、一国を治めるのに少々若過ぎるが、あれ程しっかりとっているのなら将来は大物になるだろう。」

本人のいない所で言いたい放題言う2人は気が合うのではないだろうか。客人用と思われるソファに促される優真達。

「それで。一体何用だ? メガファンゴを提供してくれたと聞いたが。」
「あんなのはただの差し入れだよ。俺らがお願いしたいのは1つだけだ。」

「……。」

優真とアルデギオは真剣な表情になり、話をする。

「ここ——アースナル王国を拠点にして、活動させて欲しいんだが、構わないか？条件があると云うなら出来る限り聞くつもりだ。」

「そうだな。なら、早速だが、お主らに頼みたい事がある。」

「その頼みの報酬が拠点にする事を許可するという事ですか……。」

「その通りだ。悪い話ではないだろう？」

「確かに。悪い話しどころか、なかなか美味しい話じゃないか。」

「カツカツカツ！お主は中々面白い奴だな。内容も聞かずによくそんな事を言えるな。」

その言葉に更に優真は笑みを浮かべる。

「別に。こんな所で躓いてるようじゃ俺達の目標は絶対に達成させられないからな。」

「魔王……か。」

そう言うアルデギオに優真達は全員頷く。その反応に満足したようにアルデギオは笑う。

「随分と肝が据わってるな。それは『傲慢』では無いだろうか？」

「ここに来る少し前にその『傲慢』に喝を入れてきた所だよ。」

そう言つて優真は流そうとする。その時の事を思い出したのか真央と健は苦笑いする。その態度に更に満足するアルデギオ。

「そうかそうか。やはりお主らは面白いな！それに実力も相当なものを見た。職業を聞かせてもらっていいか？」

「二「魔神／暗殺者／治癒師。」」

「……。ん？」

「黒神優真。職業は魔神。」

「森下健です。暗殺者をやっています。」

「白井真央です！治癒師です！」

優真達の言葉に思わず固まってしまうアルデギオ。確かに実力があると言ったが、職業がとんでもない物だと知り、驚愕して固まった。

「それは……冗談、ではないようだな。」

「嘘つくメリットが何処にある。寧ろデメリットしかないだろう。」

「そうだな。では改めて頼まれて欲しいんだが。」

アルデギオの言葉を静かに待つ優真達。次に発せられた言葉に優真達は驚く。

「……最近、急に現れた妙な迷宮があるらしいんだが……。」

真央はバツと立ち上がり、優真は目を見開いた後、すぐにニヤリと笑う。健も静かに口角を吊り上げる。そして優真が話を再開させる。

「なかなかどうして恵まれているな。」

「ん？どういう事だ？」

「魔王を倒すために必要な手掛かりなんですよ。」

「なるほどな。つまりその迷宮は魔族の仕業なのだな？」

「多分そうですね。優真くんはどう思う？」

「ん？どうって？」

「その迷宮って私達が求めてる迷宮なのかな？迷宮ってその魔族の幹部だけが持つてるとは限らないんじゃないかなって。」

「おや。鋭い所に気付きましたね。これは一本取られましたね。」

「確かに白井さんの言う通りだ。俺らは魔族の幹部だけが持つてると思い込んでいただけだな。」

「えへへ……。じゃ、じゃあ優真くん。ご褒美、欲しいかなって……。」

上目遣いで優真に迫る真央。皆（アルデギオと健と門番）が見ている中でそんな事を言う。

「あのか。白井さん？」

「ダメ……。かな……。？」

優真の目の前に広がるのは真央の潤んだ瞳。汚れ一つない綺麗な

顔。薄いピンクに輝く艶めかしい唇。そして甘える様な声とくっ付いた体がトドメとなり、真央の唇に自身の唇を重ねる優真。

「んっ…………。」

「おやおや。」

「大胆なのだな。優真殿と真央殿は。」

「これが桃色空間というやつですか。」

優真の大胆な行動に真央は受け入れる。健とアルデギオと門番はその光景を微笑ましく見ている。

「…………んはあ…………。優、真くん…………。」

「これで満足してくれたかな？」

「ふにやあああ…………。」

完全に蕩けきった真央に流石に困惑する優真。真央はそのまま幸せそうに意識を手放した。思ったより刺激が強かったらしい。

そんな真央を支えながら健達に《威圧》をかけながら言った。

「今すぐ忘れるか、物理的に記憶を消されるか。好きな方を選ぶ。」

「『前者を選ばさせて貰います！』」

優真による脅迫^{選択肢}は一国の王ですら迷わず選ばせる効果があるようだ。

くキレリア街ですく

優真達はアルデギオに頼まれた迷宮を調べる為にアースナル王国を出て、迷宮近くにある街——キレリア街に向かっている。しかし、優真達はその道中で魔物の大狼フーウルフの群れと遭遇していた。

「グオオオオオ！」

「はあく……。」

「ウインドカッター《風 刃》！」

「いい加減しつこいですね。」

だが、そんな魔物達を虫を払うように倒していく。優真は溜め息を吐きながら《グラビティ重力操作》を発動させて魔物達を地面に埋めている。真央は《風魔法》で、健は短剣で魔物の急所を確実に狙っている。ある程度倒し終わると、群れのボスと思われる他より少し大きめの大狼が真央に襲いかかる。

「ホーリーフラスター《聖光波動》！」

しかし、真央の《聖魔法》による《聖光波動》によって吹き飛ばされる。

「もう治癒師の域超えてるよな。」

「黒神さんの妻なんですから何も不思議じゃありません。」

「妻言うな……。高校生だぞ俺ら。そして遠回しに規格外呼ばわりするな。」

「何も間違つて無いじゃないですか。それに白井さんの方は満更でも無さそうですね。」

「えへへ……。優真くんの、妻……。えへへ……。」

優真が健の言葉に少し照れながら返事をし、真央を見ると物凄く緩んだ顔に両手を添えて体をモジモジさせている。

「おーい。白井さん？戻ってきて。」

「えへへ……。は!?ゆ、優真くん！あの、その。不束者ですが、よ、よよろしくお願いします!!」

「うん。取り敢えず落ち着こうか。」

『はい、深呼吸して。』と優真は真央を落ち着かせている。健はその光景を見て微笑んでいる。そんな風に暢気に過ごしていると、ガサガサと茂みの方から物音がする。真央はそれが魔物かと少し警戒するが、優真と健は別の意味で警戒したような表情になる。そして茂みから出てきたのは。

「はあ……。はあ……。」

「猫族^{ケットシ}か。」

「そうですね。何やらピンチみたいです。」

「ちよつと!?何でそんなに冷静なの2人とも!?!」

出てきたのは衣服はボロボロであらゆる所に傷を負って、今にも倒

れそんな猫族の女の子だった。案の定、そのまま倒れそうになるが、近くにいた優真が支える形になった。そしてそのままポツリと言葉を紡ぐ。

「はあ……、おね、が……です。皆、たす……。」

「大丈夫!? 《超回復》!」

ハイヒール

言い終わるのと同時に意識を手放した猫族の女の子。一応、回復をしたが今すぐ目を覚ます気配はない。何があつたか聞きたいところだが、しばらく安静にさせようと思い、優真はお姫様抱っこで猫族の女の子を抱える。その際に少し気になる物を見つけたように目を細める。

「まずは街に向かって宿を探るか。」

「そうですね。」

そして街に向かって歩き出そうとした時、再び茂みの方から魔物の気配を感じた。そこから出てきたのは二つの頭を持った犬——
オルトロス
双頭犬だった。

「これはまた珍しいですね。」

「どうやら、この猫娘を狙ってるみたいだな。」

そうやって双頭犬を見据える優真達。よく見ると双頭犬の首に首輪がついていた。

「優真くん。あの首輪って……。」

「間違いなく『奴隷の首輪』だな。そしてこの猫娘には首の周りにそれっぽい跡がある。」

「つまり追っ手ですか。」

真央が首輪について聞くと、優真が面倒な事に巻き込まれたという表情をしながら答える。健も肩を竦め、やれやれと言った感じだ。

「グルアアアアア!!」

「おっと。」

双頭犬は猫族の女の子を狙うため優真に襲いかかるが、それを軽くバックステップで避ける。

「無闇に戦うのはやめとくか……。『奴隷の首輪』がある以上、何かと面倒だ。」

「その子を保護誘拐してる時点でもう面倒事に巻き込まれているよね。」

「どっちが悪役なんでしょうね。」

「人聞きの悪い事言わないでくれ。別に保護のままでも良かったじゃない。態々言い方を変え無くても……あくもう、しつこいな駄犬が！」

こんな会話をしながら双頭犬からの攻撃を避けているが、襲われていた優真は我慢出来ず、抱えた猫族の女の子に負担がかからない様に回し蹴りで双頭犬を蹴り飛ばす。

「早くずらかるぞ。」

「完全に悪役の台詞ですね。」

「あはは……。」

そう言つて優真達はその場を離れた。

その少し後に優真達が居た場所に現れたのは、馬車に乗つて如何にもお金持ちと言つたような格好をした肥太つた男だつた。その男の周りには『奴隸の首輪』をつけた大狼が数匹と人間の男が数人。見た所護衛のような働きをさせられているのだろう。

「な……!?!ワシの双頭犬が負けておるだど!?!」

双頭犬が道端で倒れているのを見て驚く男。奴隸にされている男達も目を見開いていた。双頭犬は強い魔物に部類されている。にもかかわらず、追跡させた双頭犬は何者かによって倒されていた事にその場にいた皆は驚いていた。

「おのれ!! 貴様ら、あの猫娘とそれを盗つた者を探し出して捉えてこい!!」

男が「命令」すると『奴隸の首輪』が光だし、奴隸達の目から光が消え、虚ろな目になる。そしてすぐにその辺を探るように動き出す。

「何者か知らんが、絶対に後悔させてやる!」

その頃、優真達はキレリア街に着いていた。優真は《千里眼》で男達の様子を見ていた。

「これはマジで面倒だな……。」

「ん？どうしたの？」

「何でもないよ。それより宿を……つと。あれか。」

ごく普通の宿屋に優真達3人は入っていく。

「あら、いらつしやい。」

女の人が微笑みながら挨拶をしてくる。恐らく宿屋の主だろう。見た感じ、まだ若くてスタイルが良く、大人の色気がある。その姿に少し顔を赤くする優真。

「……優真くん？」

「白井さん……その笑顔怖いからやめて下さい。」

「あらあら、ふふ……。そんなに可愛い子が居るのに私に目移りしちゃうんですか？」

「健全な男の子には厳しいものがあるんですよ。」

顔は笑っているが目が笑っていない真央に思わず敬語で返す優真。それを更にかうかう様に言ってくる宿屋の主——ミラの言葉に対して素直に返す優真。

「正直なのね。で、いくつ部屋が希望かしら？」

「2部屋で。」

「2部屋ね。……泊まりだけなら3人で90Gだけど、どうする？」

「500Gで今日の夜と明日の朝のご飯、お風呂をお願いします。」

そう言ってコートのポケット（《空間倉庫》キャビネット）から500Gを取り出して渡す。

「こんなに無くても良いのよ？」

「いえ、こちらは持て余してるんで大丈夫です。」

「あら、お金持ちなのね。」

「後ろ盾がお金持ちと言った方が正しいんですけどね。」

優真はミラに多めにお金を渡し、それに少し驚いているミラに真央は苦笑いで補足する。そんな話をし終わると、部屋に案内される優真達。部屋に案内する最中に軽く自己紹介をする。

「私はこの宿の主のミラです。」

「黒神優真。」

「白井真央です。……あれ？そう言えば健くんは？」

真央がふと気付く。この宿に入ったのは優真と真央と優真に背負われている猫族の女の子の3人だ。

「ん？ああ。あいつはもう動き出してるよ。」

「動き出してるって……まさか……。」

「軽い偵察だよ。あいつならそれくらい今日の夜に終わらせて帰ってくる。だから500G払つといたんだよ。」

「流石だね……。2人とも。」

「あら、もう1人いるの？」

「そうですね。ごく普通のやつがいます。」

「なるほどね。そこまで配慮して500G先払って中々気が利くのね。」

「持て余してるんで。」

いつの間にかいなくなり、既に行動を開始している健と暗殺者^{職業}の相性は伊達じゃないと思う真央だった。優真とミラも意気投合してるのか少し笑いながらさつきと似たようなやり取りをしていた。

「じゃあ、こっちとそっちを使ってちょうだい。」

「無難に男と女で分けるか。」

「そ、そうだね……。……私は別に優真くんと一緒でも……。」

部屋分けの話になり、無難な分け方を提案した優真に賛成する真央だが、顔を赤くしながら後の方をゴニョゴニョと聞こえない声で話す。

「ん?どうしたの白井さん?」

「へっ!?あ、べ、べべ別に何でもないよ!」

「そ、そうか……。」

「ふふふ……。では、ごゆっくりお休み下さい。」

優真に聞かれると慌てて返す真央。その様子を微笑んで見つめ、去って行くミラ。しかし、その目はどこか羨ましそうで、寂しげだった。そしてそれを見逃さない優真だった。

「とりあえずこの子を寝かせるか。」

そう言って真央達の部屋に猫族の女の子を寝かせる。

「この子……。結構酷い目にあつた……。んだよね。」

「だろうな。……あれは速攻死刑お掃除かな……。」

「?……。何か片付けるの?」

「いや、何でもないよ。夜まで時間あるし、白井さんも少し休んでなよ。」

「……また、無理しようとしてる。」

辛そうな表情で言う真央の言葉に少し驚いた優真。気付かれない様に小さめの溜め息を吐いて真央に話す優真。

「今回はしないよ。多少はするかも知れないけど、俺には今、白井さんがいる。」

——俺が傷ついたら悲しむ人がいる。

そう思った優真は真央に近付いて優しく抱きしめる。それに応えるように抱きしめ返す。

「今回は……か。……優真くんらしいね。でも、私が大好きな優真くんだよ。」

「俺も好きだよ。白井さん。」

「それでもまだ一番じゃないけどね。」

優真の胸に頭を預けて微笑みながら言う真央。その言葉に優真は心の中で返す。

(そう遠くない気もするけど……。)

しばらく抱き合っていたが、安心したのか真央は自分のベッドで眠っていた。

優真は自分の部屋に戻り、ベッドに寝っ転がって、さっきの真央の言葉を繰り返していた。

『……また、無理しようとしてる。』

(どうして俺が好きになった人って似たような事言うんだろ……。)

元恋人は

『ゆうくん、また無理するの?』

家族は

『無理を続けるのは良くないわよ?』

『無理して無駄にしたら意味が無い。これを忘れるな。』

『お兄ちゃん!無理はメツ!だよ。』

色々思い出し、優真は堪え切れず目から涙が零れる。

(本当に俺には勿体ないよ……。)

そう思いながら、遠のいていく意識に身を任せて静かに眠った。

く休息の一時ですく

「……ん。眠ってたか……。」

どのくらい眠っていただろうか。外の夕焼けの空を見て寝た頃は
まだ昼間だった事からある程度の睡眠は取れたと確認する優真。

「ん？」

起きようとするが、腕に何か乗っているように重く感じた。いや、
実際乗っていたというより、くっ付いていた。

「は？……何でここにいるの？」

「んにゃ……。」

隣で寝ていたのは猫族の女の子だった。優真の問いには寝言で返
していた。

「こんなところ白井さんに見つかったら……。」

あ、これフラグ。と思った時にはもう遅かった。廊下からドタバタ
走ってくる音が聞こえ、ドアが開かれる。

「優真くん！あの子がいなく……な……つちや……。」

ドアを開けたのは猫族の女の子を探していた真央だ。既に予測し
ていた優真は焦らずとも、だが決して落ち着いている訳でも無く、
放った言葉が更に混乱させてしまう。

「白井さん、違うんだ。」

「出た！浮気した時の言い訳ランキングトップクラス！」

「ちよ、ちよつと落ち着いて——」

「落ち着く？何に落ち着くの？優真くんがその子連れ込んだ事に？ああ……どうしよう。優真くんの好みはスレンダー系だったの？そうだ。手術。手術して余計な脂肪を取り除かないと……。」

「そんな事して無いし、しなくていいよ！話を——」

「じゃあ何？その子が勝手に入ってきたの？そういう事なの？」

「そうとしか考えられない。」

「え？何？つまり、寝取られた!?会って間も無い女の子に!?……この泥棒猫ッ！」

錯乱して普段の穏やかな真央からは感じられないくらい恐ろしい雰囲気纏っている。目は虚ろで声は1つ低いトーンで後ろに般若が刀を持っている様に見えてしまう。幻覚とは思えない程にはつきりと見えてしまっていた。実際、真央の手にはナイフが握られていた。

「白井さん、ストップ！流石に洒落にならないし、一体何処から出したの!?!」

ナイフを取り出す動作すら見えなかった優真は素直に驚き、現状にかなり焦っている。

「何処からって……。そんなの心からに決まってるでしょうが!!」

「答えになつてない!？」

割と本気で襲いかかろうとしている真央に何か無いかと思ひ、優真は頭をフル回転させる。ハッ!と何かを閃いた優真はゆらりゆらり歩いてくる真央に一声かけた。

「白井さん、愛してる。」

「……………ふえっ?」

「愛してる。」

優真の放った言葉が何度も頭の中で繰り返される真央。

「本当に?」

「もちろんだよ。」

「えへへ……………私もだよ。」

許されたのか、真央の手からナイフが消えていて優真の空いている手の方に抱き着いて頬擦りし始める真央。本当にあのナイフは心から出てきたのだろうか。と疑問を持ったが、とりあえず修羅場は潜り抜ける事が出来た事に安堵した優真。真央のナイフ心に優真の愛情表現言葉の刃が刺さったようだ。

「ん……………ふわあく……………あれ?ここは?」

「あ、起きたみたいだね。」

「まああれだけ騒げば——」

「何か言ったかな？」

「俺のせいじゃないって……。」

「?……ッ!?あ、ひにやああああ!?!」

まだ根に持っている真央は目の笑ってない笑顔を振りまく。いつからヤンデレになったんだ……や。と心の中で思う優真。そんな事を考えていると、騒ぎで目が覚めた猫族の女の子は優真にくっ付いてる事に気付くと顔を真っ赤にして慌てて離れる。

「だ、誰ですか! 貴方達は!?!」

「おい泥棒猫……。私の優真くんに媚び売った挙句、そんな扱いをするのか? ああ?」

「その話は後にしてくれ……。俺は黒神優真。んでこの子が白井真央。君は倒れる寸前で俺達に拾われたんだよ。追われてたんだろ?」

優真は猫族の女の子に食って掛かる真央を宥めながら、自己紹介と追われてた事を自身の首の部分を指で示しながら聞いた。

「……はい。私はある方法で首輪を外して逃げる事が出来ました。」

「《伸縮変化》^{ゴムチェンジ}か。」

「……ッ!? 何で分かったんですか!?!」

「そういうスキルがあるんだよ。《魔眼》ってやつ。」

《伸縮変化》は自身の体を伸ばしたり、縮めたりして自分の体の性質を変えることが出来る。それを言ってもないのに優真が分かったことに驚く猫族の女の子。

「にしても、首輪から抜けるってことは随分と無理矢理出てきたのな。」

「毛のように細くもなれますからね。」

「ところで君の名前は？」

「あ、申し遅れました。私はミーニヤと言います。」

「んじやミーニヤ。早速だけど、何故捕まったのか、そしてそれからの出来事を教えてもらえるか？」

猫族の女の子の名前を真央が聞き、名前はミーニヤと言う。そして優真が早速本題に入ろうとするとミーニヤの顔に影が落ちる。

「ああ……。言いたくないなら言わないでいい。結果的にお前達の味方は助かる事になる。」

「ほ、本当ですか!?!でも、何故……。」

「気まぐれかな。」

「……………え?。」

優真の言ったことにキョトンとしてしまおうミーニヤ。

「基本俺は俺の為にしか動かない主義なんぞな。お前達を縛っている貴族様は俺が生きる上で邪魔でしかないから片付ける。ついでにミーニャ達は助かる。」

「ど、どういう事ですか？」

「どの世界でも権力者つてのは面倒なんだよ。」

「偶に大物が行方不明になってたりするニュースは優真くんのせいかな？」

「俺だけとは限りません。」

淡々と告げていく優真に思考がショート寸前のミーニャ。そして元の世界の事を思い出した様に質問してくる真央にも流す様に返す優真。

「じゃあ……本当に……。」

「ああ。だからもう我慢する必要は無い。どれだけ逃げていたのか、どんなに辛い事があったとか興味は無い。まあでも、よく頑張った。」

「……うう……うああ……。」

「今は全部吐き出せ。俺達以外誰もいない。」

「ぐすつ……。うわあああああ!!」

ミーニャは堪え切れず、優真に泣き付く。優真は優しく頭を撫でている。時々、猫耳を触って楽しんでいる様子も見られる。

「やっぱり優しいね。優真くん。」

「そんな大層なもんじゃないって。」

ミーニヤが泣き止むのを静かに待つ優真と真央。優真と真央の2人は目を合わせてからミーニヤに優しい視線を向ける。その光景は娘を想う夫婦のようだ。

「大丈夫か？」

「はい。え、ええつと……。ありがとうございます……。」

「気にすんなよ。」

しばらくして泣き止んだミーニヤは顔を赤くしてモジモジしながらお礼を言う。そのお礼を軽く受けた後、ミーニヤにボロボロの服から着替えるように指示し、ミーニヤと真央とミラと食事を取る優真。その途中で宿屋の扉が開く音がするとそこにいたのは健だった。

「お待たせしました。ただいま帰りました。」

「ご苦労様。」

「お疲れ様、健くん！」

「あら、貴方が健君ね？」

「はい。森下健と申します。以後お見知りおきを。」

帰ってきた健にそれぞれ反応を示す。ミーニヤは『誰?』と言いたげな表情だが、優真達のやり取りを見て仲間という事に納得し、食事

に戻る。

「では、まずは彼の家の場所ですね。」

「もうそこまで分かったのか。」

「権力でものを言う人は大体が隙だらけですから。場所ですが、ここから少し離れた所にある山が彼の所有地であり、その麓にある豪邸が住んでいる所です。そして、この街も一応彼の管理下にあるそうです。」

「……。」

「この街の管理者って……。貴方達、バルムと何か起こすつもりなの？」

「あの肥えた貴族様はバルムって言うのか。」

「ええ……。アイツは私達から色んな物を奪っていった。私の場合は夫と娘を奪われたわ。」

「なっ……!?!」

ミラの放った言葉には確かな憎しみがあつた。その放たれた言葉と感情に真央は驚くが、優真と健、ミーニャは真剣な表情のまま静かに聞いている。

「だけど、アイツにこの街を支えられているのは事実で、逆らえば私達の関係者は処罰を受ける。」

ミラは悔しそうな表情と手出しができない自分の弱さに怒りを感じ

じている。それに気付いた優真は溜め息を吐いて呟く。

「本っ当に面倒な奴だな……。まあ、理由が増えたなら尚更良しか。」

「貴方、まさかバルムを倒すつもりなの？」

「いや、そんなんじゃないよ。」

「じゃあ、何するつもりなの？」

「殺すけど？」

「……は？」

淡々と告げた優真にミラは驚きを隠せない。ミーニヤも少なからず驚いている。健は最初から分かっていたと言うような表情で頷いている。真央も少し悲しそうな表情をしながらも『やっぱりか……。』と呟いている。それら全てを無視して続ける。

「んじや、居場所も分かったなら今夜にでも実行してやるか。」

少しばかり狂気を交えた薄ら笑いをしながら言う優真。そして、真剣な表情に戻し、それぞれ皆の顔を見て一言。

「面倒だ。可及的速やかに終わらせるぞ。」

く作戦会議? ですく

優真達は今夜の『貴族打倒及び奴隷解放』に向けて準備をしていた。

「取り敢えず厄介なのは『奴隷の首輪』だな。」

「そうだね……。絶対命令って事は自害させる事も出来るから奴隷は全員人質って事だよな。」

優真と真央は『奴隷の首輪』に対する作戦を考えていた。

「手っ取り早いのはバルムさんに気付かれず、確実に殺すことなんですよけどね。」

「それ、お前がどうにか出来ないの?」

「出来るなら殺してから戻ってきますって。バルムさんや人間の奴隷なら問題はありますが、奴隷にされている魔物の種類がかなり多く、探知系の魔物もいると考えられるでしょう。」

「なるほどな……。」

健の言ってる事に何気なく返している優真だが、話している内容は物騒極まりない。

「いつそのこと優真くんの魔法でどうにかならない?」

「出来なくはないと思うが……。いや、この際、試してみるか。」

「何か新しい事でもするんですか?」

「マジッククリエイト
《魔法創造》を使ってみようかなって。」

「え、優真さんってそんな事も出来るんですか？」

「まあ、それくらい。」

質問したミーニヤは優真の答えによって優真は人外である事を確定した。ミラは驚きを通り越して真顔のまま固まっている。

「でも、無償で作れるわけではないですよね？」

「代償無しとか本当にチートじゃん。魔王もビックリだわ。」

「いや、優真くん。優真くんも職業で言ったら魔神だからね？それで、代わりに何を犠牲にするの？」

「俺の一部。肉体的でも精神的でも構わないらしいが……。」

「物によっては強制されそうですね。」

「大きなもので言ったら記憶だろうな。」

《魔法創造》 マジッククリエイト

魔法を創ることが出来る。しかし、代償として肉体の一部、感情や記憶、自身の何かを差し出す必要がある。

それを聞いた真央は寂しそうな顔をしながら優真に尋ねる。

「やる気なの？優真くん。」

「折角だし1回くらいは使いたいって思うかな。」

「そっか……。」

その表情に気付いた優真は真央を撫でながら聞いた。

「やめてほしい?」

「……え?」

「おや、これは珍しいですね。」

真央と健は驚いた表情で優真を見る。

「何だよその表情は……。」

「他の人を気にするなんて珍しいと思って。」

「同じく。」

「お前ら……俺を何だと思ってやがるんだよ。」

「自分勝手な私の恋人。」

「敵には無慈悲な規格外。」

「よく分からない人です。」

「……そうですか。ていうかミーニヤまで言ってくるか……。」

言い返そうにも当たっているので何も言えなくなってしまう優真。それに満足したのか、真央と健はニヤケている。そのニヤケ顔をすぐ

止めて真央は言う。

「……正直に言うなら止めて欲しいけど、それは優真くんが決めていいよ。私は全部受け止めるから。」

「……ごめんな。」

優真はそう言って目を瞑り、《魔法創造》マジッククリエイトを使った。そして優真は真央、健、ミーニヤに向かって声をかける。

「さあ、行くぞ。何を作ったのか、それは見てからの楽しみだ。」

「「うん！／＼了解です／＼はい！」」

3人はそれぞれの返事をし、付いて行く。

左目を閉じたままの優真に。

くVSバルムですく

しばらく歩いていると魔物の群れと遭遇した優真達。その魔物達には全て『奴隷の首輪』が付いていた。

「この辺から既にバルムの領域って事か。」

「金持ちって面倒ですよね。」

「それよりも気になる事があるよね?」

「はい。いくら何でも数が多過ぎます。」

優真達は一つの違和感に気付いていた。

「『奴隷の首輪』ってこんなに持つてるもんなのか?」

「はい。それは私達が捕まった時にも思った事です。」

そう、『奴隷の首輪』が多いという事だ。奴隷が反抗しないように付ける物であるが、ここまで多く所有するのは珍しい事だ。買うにしても数は限られるし、それなりの値段で何個も買える物では無いらしい。ミーニヤの発言から本当に珍しいのだろう。

「増量系の能力スキルでも持つてるのか?」

「魔眼で見れないんですか?」

「ん? ああ、そうじゃなくて——」

「バルム以外の誰かが、って事だよね?」

「なるほど……。そういう事でしたか。」

優真はミーニヤの質問に返そうとするが、先に真央が答えた。その言葉に納得したミーニヤと理解されてる事に少し驚いた優真。

「白井さんも大分染まってきたね……。」

「じゃないと優真くんの彼女は務まりません。」

「それはそれで傷つくなく。」

「癒してあげようか？」

治療師だし。と呟いて《ホーリープラスター聖光波動》を魔物達に向けて放つ真央。それを見て優真はため息混じりに言った。

「言ってる事とやってる事違うし、元凶は白井さんなんだよなく。はあく……。黒神流剣術——七の技《しちてんばつとう七天抜刀》。」

実際に溜め息を吐き、《剣術》を利用した優真が持つ技、《七天抜刀》を使った。抜刀すると同時に七回切るといいう技である。それによって魔物達を切り刻んでいく。

「優真くんって何が出来ないの?。」

「時間を操る事、再生する事、蘇らせる事、それから……。」

「ごめんなさい。私が悪かったです。」

「分かればよろしい。」

真央の問いに対して優真は屁理屈の様にペラペラと出来ない事を本気で言い出して、止まらなくなる勢いだと思い、真央は途中で遮って謝罪をする。

しばらくして魔物達を撃退した優真と真央は健とミーニヤより少し先に進んでいた。

「お……。見えてきたな。森下、あれでいいのか？」

「はい。あの豪邸で間違いないです。」

その直後、健とミーニヤも戦いを終えたらしく、優真の言葉をちようど聞いた健は答える。ミーニヤは少し体が震えている。そんなミーニヤの頭に優しく手をポンと乗せ、話し出す優真。

「無理も無い。逃げてきた所に戻るなんて普通じゃないからな。それでも皆を助けたいと思ったのはお前の強さだよ。」

——だから自信を持って。そう言つて優真は先を進む。その背中を見てミーニヤは泣きそうになるが、それ以上に優真の言葉に嬉しいと思う気持ちの方が強かった。

「はー。」

元気に返事をし、優真の後に続いていく。そして優真の隣にいる真央は優真の耳元で囁く。

「やっぱり優しいね、優真くんは。」

「さて、どうだろうな？それとそこ。笑ってんじやない。」

「おや、顔に出てましたか。」

「顔に出てなくても心で笑ってるだろう？」

「ご名答です。」

これからというのにも関わらず、いつも通りの優真達であった。

「近くで見るとやっぱりでかいな……。」

今、優真達の目の前にはバルムの豪邸がある。その大きさに素直に感心する優真。

「……ここを拠点に——」

「いや、アルデギオさんとの交渉が無意味になっちゃうよ！」

「冗談だよ。何かと王国の方が便利だからな。」

「そうですね。ある程度の物は揃えられますし。何より王という立場の人間が居る方が安全性は確かです。」

優真の冗談に振り回される真央。健も王国の便利さを補足して言う。

「さて、そろそろ入るが……ミーニヤ、大丈夫か？」

「……はい、問題ないです。もう落ち着いてきましたから。それに――」

不安が残ってるのか少し声が震えていた。それでもはつきりと優真に大丈夫だと伝えようとする。そして、一拍置いてミーニヤは笑顔で言った。

「優真さんが居るから大丈夫です！」

「……そうか。」

その笑顔に少し見惚れる優真。しかし、すぐに優しく微笑み返してミーニヤの頭を撫でる。

「……。」

「ん？白井さん？」

「ううん。何でもない。後で私にもご褒美欲しいな〜って思ったけど、思っただけだから別に何でもありません。」

ミーニヤに甘々な優真を見てすっかり拗ねてしまった真央。

「これが終わったら出来る範囲で言うこと聞いてあげるから。」

しかし、今更それに動揺する優真ではなく約束を取り付ける。

「……本当に？」

「いない？」

「……欲しい、です。」

「よしよし。」

今回は優真が一つ上手だった。素直になった真央の頭を撫でる優真。抜かりないようです。

「あの、そろそろ行きましょう。そんなもの後でやって下さい。後、爆ぜてください。」

一連の流れを見ていた健がさらりと怖い事、というより酷い事を言う。

「そうだな。とりあえず今は目の前のことを優先にしなきゃな。」

そう言って豪邸の扉を開ける優真。

「バルムはまだ気付いてないんですかね？」

「いや、流石に気付いてるだろ。それでも何も起こさないって事は隠し玉があるんだろう。」

ミーニヤの問いかけに自分の推測を付け加えて答える優真。

「本当に広いね。やっぱり豪邸ってどこもこんな感じなのかな？」

「大体こんな感じですね……っと。」

真央の呟きに答えた健は何かを感じたのか天井に向かってナイフを投げる。

「グギャアアア!!」

現れたのはカメレオンみたいな魔物だった。天井の色と同化して隠れていたようだ。

殺られたのが合図だったのか、魔物達があらゆる所から現れる。

「モンスターハウスかよ。《アイスショットガン氷散弾》。」

と言いつつも、片手を前に出すと、魔法陣が展開され、幾つもの氷の弾を発射する。それに当たった魔物達は一瞬で氷漬けにされる。

「《シャドローバインド影繩》。」

健はグランが使っていた《影繩》を使って魔物達を縛る。それに加えて技を繰り出す。

「《ツイスト捻る》。」

魔物達はバキツボキツと嫌な音を立て、絶命していく。

「《サイクロン螺旋嵐》！」

真央は巨大な竜巻を起こし、魔物達を巻き込んで吹き飛ばす。

「《サンダーランス雷槍》！」

ミーニヤは自身に向かって《雷槍》を落とし、自分に雷を纏わせた状態で手を伸ばし、鞭のように振るう。

「なるほど。ゴムだから電気は平気なのか。《エンチャント付与魔法》擬きか。」

「偶然雷属性だったのが幸いなだけです。」

優真の言葉に苦笑いしながら返すミーニャ。

襲ってきた魔物達を一掃した優真達は再び足を進める。

「……か……。」

優真は既に《気配察知》と《千里眼》でバルムの居場所を分かっていた為、早く辿り着いた。

「やっぱり人質もいるようだな。」

「それで一体どうするんですか?」

優真に対して健が問うと優真はニヤリとして答える。

「左目だけで手に入れたにしては十分過ぎる。」

そう言つて扉を開けると、そこにはバルムと何人かの猫族ケットシーとアー
スナル王国の兵士と思われる人間が集まっている。

「お前らか。ワシの可愛い魔物達を倒してくれたのは……。」

「先に襲つて来たのはそっちだ。俺は正当防衛したに過ぎない。」

バルムと優真はお互い睨み合っている。優真は睨んでいないが、目を逸らさないようにしている。バルムは視線を少しずらすとミーニャを見て不敵な笑みを浮かべる。

「わざわざその猫娘を渡しに来てくれたのか。」

「え？そんな風に見えたの？頭悪いだろお前。」

「そんな口を聞けるのも今のうちだぞ。ワシの命令で『奴隷の首輪』を付けているやつは自害させることも可能だぞ。」

予想通りの反応で作戦通りだと思った優真達。しかし、次のバルムの言葉で展開が崩れ始める。

「その猫娘と……そうだな、その小娘を渡せ。そうすれば今回は見逃してやるぞ。」

その小娘——つまりは真央のことであり、言われた真央は体をビクツとさせて少し怯える。ミーニヤも捕まっていた時の記憶で恐怖が残っているのか震える。健はゴミを見るような目でバルムを見る。

「どうだ？小娘達も不自由な生活はさせないぞ？そっちの方が——」

「おい……。」

ゾクツ！

当たり前のように手に入ると思い、満足気に話していたバルムは途中で言葉が止まった。原因は割り込んで話しかけ、《殺気》を放った優真だ。

「あまり調子に乗るんじゃないやねえよ、クス野郎。」

「な、なんの真似だ！」

「あ？俺の女に手を出しといてよくそんな事言えるな。俺に勝ってか

「いえよ。」

そう言つて《瞬間加速》イグニッションブーストを使ってバルムを蹴り飛ばす。吹き飛ばされたバルムは血を吐きながらフラフラと立ち上がり、感情任せに『奴隷の首輪』を付けている人質に命令した。

「も……もういい！ お前達、自害しろ!!」

しかし、その命令に従うことは無かった。

「何故だ！ 言う事を聞……っ!?!」

ガシヤ

バルムが一步足を出して足元から音がしたことで言葉が続かなくなった。それは奴隷だった者達に『奴隷の首輪』が付いてなく、自分の足元に大量の『奴隷の首輪』が落ちていたからだ。

「き、貴様!! 一体何をした!?!」

「《転移魔法》。この左目を犠牲に手に入れた力だ。」

「なっ……!?!」

バルムが優真に問うと、淡々と答える。

優真が《魔法創造》マジッククリエイトで作った魔法は《転移魔法》だった。

視界に入っている物や人を転移させたり、見える場所に転移したり出来る。

「ただの貴族が魔神のモノを口説いてんじゃねえよ。身の程を弁えろよ。」

「ま、魔神……だと!？」

バルムは驚愕し、体が硬直している。何とか言葉を発して会話が成り立っているようだが、明らかにバルムは優真に対して恐怖を感じている。そして優真はバルムの言葉に耳を貸さずに話す。

「別にお前が何しよう構わないが、俺と関係のある奴らを巻き込んだ時点で死ぬことは決定事項なんだよ。」

そう言っつて優真は両手を前に出して唱える。

「インフェルノ《煉獄炎》サイクロン《螺旋嵐》サンダーボルト《雷電》グラウンドクラッシュ《地盤崩壊》合成。発動……デイザスター《天災》!」

《ユニゾンマジック合体魔法》で魔法を合成し、訓練の時以来の《天災》を発動する。

「まっ……!?!」

ドガアーン!!

バルムの声を聞く間も無く吹き飛ばす優真。その後の惨状に真央達はそれぞれ思った。

「流石にやり過ぎな気が……。」

「完全にキレてましたからね。」

「あは、あはは……。」

ミーニヤに至っては壊れ気味に笑っていた。目の前の出来事を見ていた奴隷だった人達も解放された喜びより、驚愕に染まっている。

「ふう……。スッキリしたぜ。ストレス解消にもなったし。」

事を終えた優真はガラリと雰囲気を変える。そこにまた若干の恐怖を覚える皆だった。

く一難去つてまた一難ですく

バルムを倒した優真達、というより優真は欠伸をしながら真央達の元へ戻る。

「ふあく……。疲れたわく。」

「やり過ぎだよ……。」

「まあでも、あれくらいやってもらった方がスッキリします。」

「だろ?」

真央は呆れたように、健は優真に同意するように言った。優真達がそんな風に話していると、捕まっていた猫族の男が話しかけてきた。

「お、俺らは助かったのか?」

「ん?」

優真は最初、その質問の意味が分からず聞き返したが、すぐに理解する。

人間族に捕まり、好き放題扱われていたのだから警戒するのは自然な事だ、と。

だから、それに対して優真は少し笑みを浮かべ答える。

「ああ。お前らはこれで自由だ。こいつが必死になってくれたおかげだな。」

優真はミーニヤに近寄りながら答えてミーニヤの隣に立つと頭を撫でる。ミーニヤは一瞬ビクツとするが、すぐにされるがままにな

る。それを気にせずに優真は続ける。

「ミーニヤが一人で逃げた事に不満を持ったやつもいるかもしれない。」

「だけど、こうして戻ってきてお前達を助けようと必死に協力してくれるやつを探して、バルムの追っ手から逃げながら、ボロボロになりながら走り回ったんだ。」

「能力が使えなくなるまでの疲労と苦痛に耐えて、諦めずにいたら、俺達と出会い、助けに行く事が出来たんだ。だから感謝するならミーニヤにしてやるんだな。」

「優真さん……。」

優真の言葉を静かに聞く。真央達はもちろん、猫族の皆も捕まっていた人間族もみんなが黙って聞いていた。ミーニヤは目に涙を浮かべ優真を見つめる。それは嬉しさからくるものだった。

それに加えて、ミーニヤが話してないにも関わらず、ある一つの不安を消してくれたことに更に嬉しさが込み上げる。

それは自分一人が逃げた事。それに対して怒りや不安を感じているのではないかと思っていた。それを一瞬で振り払ってくれた優真に対してある想いを確信する。

(私、やっぱり優真さんのこと好きなんだ……。)

「では、我々はこの辺で失礼します。」

「俺達も故郷に帰るぜ。」

捕まっていた兵士達や猫族のみんなが帰る中、ミーニヤは優真達と

一緒に見送っていた。

「良かったのか？」

「はい。私はこれから優真さんと共に過ごしていきたいですから。」

優真は一応ミーニヤに帰ることを勧めたが、ミーニヤは優真達と旅をすることを選んだ。猫族のみんなも賛成してくれたおかげで一緒にすることが出来るが、優真は一つだけ疑問に思っていた事をミーニヤに聞いた。

「……家族の人は良いのか？」

「きつと……いえ、絶対に許してくれますよ。優真さんみたいな人なら任せられるって。」

「……すまん。」

「ふふ……気にしないで下さい。」

妙な言い回しに優真は察し謝る。ミーニヤはそれを微笑んで返答する。大分前からだったのか割り切れているようだ。

「これからどうするの？」

「とりあえずアルデギオの所に戻ってキレリア街の状況報告かな。」

真央の質問に優真は体を伸ばしながら答える。そしてバルムの部屋を漁り始める。

「何してるの？」

「恐らくだが、バルムは操られていた。」

「え？」

「だけど何をして戻る気配は無かったから殺した。そういう事だ。」

優真の言葉にミーニャは呆気を取られるが、優真は気にせず部屋を物色しながら続ける。

「操るといふより、完全な精神支配、洗脳の類の力によるものだと思う。そして、それを行ったのは——ツ!?伏せろ!!」

話の途中で優真は背中に悪寒が走り、皆に伏せるよう叫ぶ。真央達もその叫び声に咄嗟に反応して伏せる。

ズパァン!!

その直後、優真達の頭上を何かが通り過ぎ壁を真っ二つにした。

「な、なな、何ですか!これ!」

「落ち着いて下さい。まだいます。」

突然のことにミーニャは慌てて、健は落ち着いて状況を把握する。

「ツ!?ミーニャー!森下!右へ跳べ!!白井さん、ちよつと我慢してね。」

優真はみんなに避ける方向を教えながら真央を抱えて自分も避ける。優真達の居た場所は斬られた跡が残っている。

「へえ〜……。君、凄いな。まるで飛んでくるところが分かっているように指示してたね。」

優真達は声のする方向を見る。そこには薄い金色の髪をした女の子がいた。少し気怠い感じの話し方が特徴的でもある。優真はその女の子を《魔眼》を使ってみる。そして一瞬だけ驚くが、すぐにその女の子を睨みつけて呟く。

「お前……ベルフェゴールか。」

「ッ!?なるほどねえ〜……。そんな所までわかつちやうんだ。そんなに私のプライベート知りたい?あ、ちなみにベルちゃんって呼んで欲しいな。」

「それじゃあ名前、住所、電話番号、身長、体重、スリーサイズを教えてください。」

「いやいや、何言ってるの?まあ、日本人ということだけ教えてあげよう。」

今の問答で優真はしてやったりといった感じでニヤリと笑った。

「なるほど……。お前も転移者、又は転生者か。」

優真の言葉に真央達、ベルフェゴールさえも驚いた。健はすぐに理解したらしく、優真に確認する。

「彼女も僕達と同じって事ですか?」

「同じかどうかは知らないが、地球から来たということは間違いないな。」

2人の話を聞いてベルフェゴールも納得したかのように頷く。

「そういう事ねえ。なら改めて自己紹介でもしましょうか。」

そうやって1度静かに目を瞑り、すつと顔を上げてニツコリと笑う。

「“怠惰を司る悪魔”ベルフェゴール。ベルちゃんって呼んでね？よろしくねえ。」

「黒神優真。異世界転移しただけの、ただの高校生だ。」

転移者 怠惰と 転移者 魔神が今ぶつかる。

???

「No. 1とNo. 8の接触を確認。予定より早かったですね。」

「そうだな。だが、別に問題は無い。そのまま監視を続けろ。」

「了解です。」

「新たに報告致します。No. 1とNo. 8にNo. 7が接近中。」

「……構わん。そのまま続けろ。」

「了解です。」

「この短時間で3人も接触とは、なかなかどうして、恵まれているな
……。」

く怠惰と魔神ともう一人ですく

優真とベルフェゴールはお互いに相手を見つめながら、警戒し合っている。すると不意にベルフェゴールが目を逸らして呟いた。

「流石にそんなに見られると恥ずかしいな……。」

「……………は？」

ベルフェゴールの言葉に優真は混乱してしまい、思わず情けない声を出してしまった。

「いやいや、お前……今戦闘中じゃねえか。んな事言ってる場合じゃ無いだろ？」

「でも、恥ずかしいものは恥ずかしいもん。」

「……………えく……。」

優真は呆れて手を額に当てて唸る。対してベルフェゴールは本当に恥ずかしいのか頬を紅潮させて顔を手で覆っている。

「そもそも戦いとかあまり好きじゃないし、一番得意なのは奇襲だから、この状況は私的に不利なんだよね。」

「……………変わり身早いね。」

顔を覆ってた手を次は考える様な仕草に変えて言うベルフェゴールに少し離れた所で見ていた真央が呟く。

そんな話をしていると、突然、優真の上から氷の刃が降り注いだ。

「……!? 優真さん！上から降ってきます!!」

「問題ない……つと。」

「うえっ!? ちよ、速くない!?!」

ドゴオオン！

ミーニヤの焦るような声に対して冷静に返す優真は《瞬間移動》イグニッションフーストを使って氷の刃を避けると同時にベルフェゴールの前まで移動する。その速さにベルフェゴールは驚くが、その驚き方には何処か演技のように感じるものがあった。その証拠に優真の拳はベルフェゴールには当たらず、透明な壁に遮られていて、その向こう側でベルフェゴールがニヤリと笑っている。

「やっぱりソレ……厄介だな。」

「ふふ。そんな事も分かっちゃうんだあ。勿論、持つてる側からしたら便利だけどね。」

優真の言うソレとはベルフェゴールが持つ一つのスキルである。今一度、優真は《魔眼》を発動させてベルフェゴールのステータスを確認する。

《ステータス》

名前：ベルフェゴール

種族：悪魔

職業：七つの大罪（怠惰）

属性：全属性

スキル：《全属性魔法》《属性強化》《魔法増強》《魔法付与》エンチャント《魔力自

《自動魔法》オートマジック 《怠惰の真力》アクセス・アケディア

優真が厄介と言ったのは《自動魔法》の事。

《自動魔法》は無詠唱より優れたスキルであり、自分が発動する魔法、位置、タイミングを想像するだけで発動出来るスキル。さっきの氷の刃も《自動魔法》によるものだ。

また想像をしなくとも、このスキルを所有している者に危機が迫ったり、異常事態を感じたりすると自動的にその状況に適した魔法が発動する。

その為、優真の速度に反応出来なかったベルフェゴールを守ろうと自動的に無属性の上級防御魔法である《絶壁》ブレンピスが発動された。

しかし、《絶壁》に徐々にヒビが入ってくる。その現象にベルフェゴールは驚く。

「……!?何で!?君、馬鹿力にも程があるでしょ!?!」

「別に力じゃねえよ。《魔法無効》マジックキャンセルってスキルがあるんだよ。」

「な……!?そんなの卑怯よ!!」

「悪魔が卑怯とか言ってるじゃねえ!?!つーか早く壊れるよ!!お前の方こそ卑怯なレベルで頑丈過ぎるじゃねえかよ!!」

「そんなの知らないわよ!こつちだつて頑張ってるだけなの!!」

最早やり取りが友達の喧嘩レベルになってしまった優真とベルフェゴール。真央たちは、そのやり取りを何とも言えない表情で見ている。

実際、お互いに力を加減はしていないし、全力そのものである。優真の力は確かに最強とも言える力であるが、それに対して防御魔法を使うベルフェゴールの方も魔法に特化したスキルをたくさん持つて

いる為、互角に渡り合う事が出来る。

つまり、こんなやり取りをしながらも、それを周りから見ればちよつとした災害とも言える状況だった。優真とベルフェゴールの力がぶつかり合つて二人を中心に周りの地形が崩れかけているのがまさにその通りだった。

このままじゃジリ貧だと思つた優真は一度距離を取り、手を前に翳して魔法を発動する。

「《煉獄炎》！」
インフェルノ

「私も〜！ほいつ……と〜！」

優真が魔法を放つたのに続いてベルフェゴールも真似る様にして《煉獄炎》を放つ。

二人の魔法はぶつかり合つて爆発し、煙が発生して優真とベルフェゴールの姿を隠す。

「優真くん〜！」

少し離れた場所から見ていた真央が叫ぶ。その叫びは心配や不安からではなく、ベルフェゴールによる次の攻撃が真央には見え、注意を促す声だった。その意図を理解した優真は《千里眼》で真央達の位置を把握し、《転移魔法》でその近くに移動することで何とか避けることが出来た。

「ありがとう白井さん。もうすぐで蜂の巣になるところだったよ。」

優真のいた所には無数の穴が空いていた。そして立て続けに優真に向かつて《風刃》ウィンドカッターが飛んでくる。近くにいた真央達にも当たりそうになるが、その前に健が魔法を発動する。

「《闇渦》。」
ブラックホール

《闇渦》で《風刃》を吸い込み、目で優真に『こっちは任せて下さい。』と合図する。

優真はそれに頷いてベルフェゴールに向かって手を出すとベルフェゴールを囲むように4つの魔法陣が現れる。

「これに耐えられるか？」

優真がそう言うのと4つの魔法陣が光り出す。

「《火龍》《水竜》《風竜》《地竜》合成。発動……《四つ首の竜》！」
ベルクーナス イルヤンカシュ オビオーン アウンユラピス フォースドラゴン

「グオオオアアアアアアアアアア!!」

ベルフェゴールを囲む4つの魔法陣からそれぞれの属性を持った竜が現れ、ベルフェゴールに襲いかかる。

「ちよ、まず——」

ベルフェゴールが何かを言い終える前に4匹の竜は一斉にぶつかりと轟音を響かせて爆発する。

「やりましたか!？」

「いえ、まだ気配が残ってます。というよりは……。」

「ああ……。もう一人来やがった。」

ミーニヤの期待した声に対して健が否定し、更に優真が加えて状況

を説明する。しばらくして爆発した時に発生した煙が晴れると、そこにはベルフェゴールを担ぐ様に持ち上げている女性がいた。

「全く……。何をやっているのよ、ベル。」

「しようがないでしょ！何かアイツ異常なんだもん！」

薄めのピンク色の髪に誰もが憧れる様なスタイルをしていて、大人の色気と妖艶な雰囲気を出した女性がベルフェゴールに向かって呆れた口調で言う。

その女性に担がれたまま、ベルフェゴールはじたばたして文句を言う。そして担いでる女性はベルフェゴールが言ったアイツが誰を指しているのかすぐに分かり、舌なめずりして呟く。

「ふうん……。結構良い男じゃない♪貴方名前は？」

「知りたきや先に名乗るのが礼儀ってもんじゃないか？そうだろう……。アスモデウス。」

「フフフ……。既に分かってるじゃない。ねえ……。黒神優真くん。」

ベルフェゴールを担いでる女性——アスモデウスは優真に《魔眼》で名前を知られた事に驚きもせず淡々と話を進める。

それどころか、優真の名前を言い当てる。その事に真央とミーニャは驚き、優真は様子を伺うようにアスモデウスを睨み付ける。

「そんなに怖い顔しないでよ。かっこいい顔が台無しよ？」

「かっこいいかどうかはともかく、元々こんな感じなんだよ。」

「あら、中々釣れないわね。じゃあ少し強引だけど……。」

優真と会話をしていたアスモデウスの姿がいきなり消えて、担がれていたベルフェゴールが地面に落ちる。消えたアスモデウスは優真の目の前にいきなり現れて優真の頬に手を添えてキスをする。それも深いやつだ。

「……っ!?!」

「なっ……!?!」

「これはこれは。」

「にや、にやにやにやにやにや!?!」

「ちよー!アーちゃん!?!人を地面に落とすといて何してんの!?!」

優真はいきなりのキスに思わず硬直してしまう。

周りの皆もそれぞれの反応を見せる。ベルフェゴールに関しては少しズレた反応をしている。

「んっ……。ぐ馳走様♪」

「……お前、一体何のつも……り……。」

そう言うとアスモデウスはすぐにベルフェゴールの元に戻り、優真と距離を取る。

アスモデウスの行動に疑問を持った優真はアスモデウスに問いかけたが、今の自分の状態を理解した優真は問いかけた言葉を小さくしていく。

そんな優真に向かってアスモデウスは妖艶な笑みで返す。

「私は『色欲を司る悪魔』アスモデウスよ。また会える時を楽しみにしてるわ♪」

「次は絶対に負けないんだから！このチート野郎!!」

そうやってベルフェゴールとアスモデウスはその場から消えた。

「ゆ、ゆゆ、優真くん！大丈夫!?あ、あの、あの女!」

「落ち着いて白井さん！別に命に問題は——」

「大ありだよ！命に問題はないかもしれないけど、普通に問題ありだよ!」

「そ、そうですよ!あ、あんな……あの、キ、キキ……ふにゃ〜!」

「ミーニヤさん、恥ずかしいなら言わなくて大丈夫ですから。それで、一体何がどうなっているんですか?」

優真の言葉を最後まで聞かずに真央は暴走し出す。ミーニヤに聞かしては自分の発言に恥ずかしくなり、途中でショートする。そんな中、健は落ち着いて優真にどうなったのかを聞き出す。

暴走している真央を優真が羽交い締めで抑えながら健の話に耳を傾ける。真央もそれを聞いて少し大人しくなり、真央を解放してから優真は言った。

「……簡単に言えば、スキルに制限をかけられた。」